

土居

旦夕に在と、古人の詞今まさに當れり、所詮降を乞、一命を扶からんやと、上下歎きけれハ、城主力及す、且ハ不便也とて、自面縛して罪を謝し、降參せしかハ、疑へきにあらすとて、本領を給りける、土居の城へハ小姓の面々馳向ふ、城中の兵共山下へ取出、西谷口をそ防ける、寄手の若侍十三人鎧先を揃て突掛り、土煙を立て相戦、城兵大きに捲下同ジ捲り立られ、足床を亂して引退を、若士追懸る所に、城兵取て返し、午の刻の終り申の符カ半迄兩方互に引退かす、爰を専途戦けり、桑名藤七是を見て、若殿原か血氣に跨跨て、無法の軍を好ハ曲事也、急呼返せと、吉松治部左衛門を遣せ共、皆若者共なれハ、誰先に引んと云者なし、二番に岩松七左衛門を遣せ共、引返さす、三番に白川與兵衛、嶋田可右衛門を遣しける、兩人懸向て、早日暮に及ぬ、急き引取候へと、押立く引處に、敵是を見て、大勢突て出しかハ、又一同に返し合て戦けり、其中に、中嶋彦五郎鎧先にて首を取、城兵打負城に入り、寄手ハ味方へ引取けり、高森の城へハ、幡多勢五組手當にて押寄る、城主中野式部二十町計山下に打出、互に時の聲を舉、矢合をする程こそあれ、入亂戦所に、寄手の中ハ國澤越中と名乗老武者唯一騎、鎧取て敵の真中へ乗入、巻り立、突て廻り、敵を山上へ追上たり、是を見て胸勢胸閔を作て押懸り、山下残らす放火し、一度にさつと引取ける、桑名彌次兵衛越中に向、老人の無用の骨を折られたりと申けれハ、國澤、年老、すねハ弱り候へ共、心ハ昔の越中にて候間、馬さへこたへハ、天晴若殿

高森

土居岡本
金山等ハ
西園寺氏
ノ旗下

河野通直
ノ窮狀

通直ノ家
老平岡某
岡豊ニ質
トナルハ
西伊豫ハ
元親ニ從
ハズ

原にも劣るへからすと云てそ笑ひける、其後兩方互に氣を勵し相戦といへ共、寄手ハ目にあまる大勢なれハ、討るれ共滅せず、負れ共遠引せず、荒手を入替攻懸る、城中には入替る勢もなく、次第に兵糧矢玉も盡ぬれハ、斯てハ叶ハしとて、城主中野式部、深田掃部に便りて降參す、深田、高森、土居、岡本、金山ハ其間程近く、四支のことく、十指のことく、一も欠てハ成へからすと、互に隔なく扶け合しに、今深田、高森は敵に屬しけれハ、土居、岡本、金山偏に便を失て、心細くそ成にける、此城々ハ皆西園寺左衛門太夫太か旗下成が、如何成故にや有けん、是程十死一生に及といへ共、加勢もなく、後卷の方便もなく、一向音信なかりけれハ、土居、岡本、金山野心を起し、牒し合せ、人質を出し、元親へ降參して、城も領地も本のことくに安堵す、爰に河野四郎通直ハ、誰手差者ハなけれ共、四方の城々或ハ攻落され、又ハ明退降參して、河野も次第に押せはめらる、心地しけれハ、家臣共、斯てハ當家もいか、有んすらん、所詮弱みなき先に降を乞給ハ、四國に双ひなき大家にて候間、元親も自餘の城主にハ准すへからず、一家同門の思ひをなし給へし、急書簡を遣され然るへう候と諫けれハ、もとより通直懦弱にして武道拙き人なれハ、兎も角も能様にはからへと申されける、臣下共喜び、土左左へ羽檄を飛して降を乞、家老平岡人質として岡豊にそ相詰ける、河野斯りし上ハ東伊與、中伊與ハ悉く治けれ共、西伊與の輩のみ隨ハさりけれハ、四州の勢催し、城々を責干、男女を

天正十二年九月十一日

一八二

撫切せんと、流言四方に満々て、諸人恐怖する事斜ならず、寄手ハ次第に猛なり、城々八月を追て嗜嚙す、兎に角敵對せん事叶まし、其上元親孰の城を責んもしれされハ、假令加勢を乞たり共、援兵ハ成へからず、一所懸命の領地さへ相違なくハ、早く降參して安堵せんにハしかしと、城々佗る由聞へしかハ、元親一々相違有ましき書券をそ出されける、去程に西園寺、白木、板嶋、岩井、森を始、西伊與の輩皆降參せしかハ、當國一統に治けり、其中に得居、來嶋ハ僅の小嶋なれハ、責取ても益なし、責す共降參せんと打捨置れけるハ、家運の強所也、

〔参考〕

〔土佐國編年紀事略〕ハ 天正十二年秋、元親、久武彦七親直ヲ以、伊豫國ノ軍代トス、

元親記并金子氏藏古文書ニ據、下文ニ見故、斯ニ略、

同年八月、久武親直諸軍ヲ督シテ、伊豫國三間郡ヲ侵シ、深田、高森等ノ城ヲ攻、同月十一日、并ニ之ヲ降ス、軍ヲ進メテ、諸村ノ稻ヲ刈テ凱ル、

○中略、元長一代記及長元記、又能勢新右衛門尉康澄覺書、上略土佐國得來支、天正十二年甲申年、文見上、○但シ、福留書兵衛尉伊國渡海、其ヲ引ク、上略セルモノニ同シ、又後豫州美間陣御供ニ加ル、其刻於美間表、高森、深田、土居之城三ツ之城攻ニ、首尾合候ト蒙仰、御感文有テ、長岡郡之内ニテ少知被下、門田之郷ニ依居住、此此門田ト言々、又敷地左兵衛尉康但先祖覺書ニ、我等事二十三ニテ與州深田之城ヲ元親公御責被爲成時、城ハ鐵炮打申爲、芝築地ヲ仕置候、其築地ニ忍寄、鐵炮提、指眼申所ニ、右之城主築理院弟左馬正ト申仁、築地之影ハ忍被居、人數六人ニテ我等一人ヲ一度ニ鐵砲ニテ討被申候、右之肘ニ貳ツ玉ニテ爲討、其玉一ツ者脇之下ヨリ胴ニ入、一ツハ具足ト身之間ニ留リ申候、深手故則座ニ轉申候ヘハ、敵來、首取可申ト仕時分、難計露

毛利輝元、伊豫來嶋出兵ノ日次ヲ桂元親ニ報ジ、來會ヲ促ス、
〔桂文書〕 ○池田與一氏所藏

在番衆中各へも相心得可申候、

其境爲可見合、此者差越候、万々内談入事候、其元長々辛勞無申計候、聽而入人數差渡候、何も内々聞及儀候ハ、可申越候、猶口上申含候、恐々謹言、

九月三日

輝元(花押)

桂兵部丞殿

其方替之儀付而申越之通令承知候、無盡期辛勞之段無餘儀候、近日諸勢差渡、一行申付砌候之間、今少馳走可爲祝著候、一所之者共是又能々可申聞候、將又内々自訴之事、罷戻可申候、猶自木次所可申候、謹言、

天正十二年九月十一日

一八三

命危所ニ、少片下之故、我ト少轉申内、味方能鐵砲討立申ニ付、敵避申内、召連候者馳來、引立取離、運開候得キ、○中略、金子文書ニ同シ、按ニ、元親記ニ、此條ヲ以十四年トシ、又靈簡集ニ九年トスル者、皆誤也、如何ニトナレハ、金子古文書ニ、上邊之儀東西彌勝手之由候ト有ハ、上文所舉香宗我部古文書ニ見タル小牧陣ノトキノ事ト覺シキ上、能勢康澄力覺書ニ、既ニ天正十二年トモ云レハ、此年ナルコト疑ナシ、故ニ南海治亂記ノ紀年ニシタカフ、又深田城主中野、敷地康但カ覺書ニハ、築理院トス、孰カ是ナルコトヲ不知ト云トモ、康但ハ幡多人ニテ、彼城攻ニモ親ク逢シ人ナレハ、正説ナルヘシ、又古城傳承記ニ、中野式部ト有ハ、其據ヲシラス、又按、元親記ニ、板島ヲ以西園寺城トスル者ハ、恐ハ誤也カ、長元記ニハ、黒瀬ヲ以西園寺ノ居城トス、立石氏ハ幡多人ナレハ實説ナルヘシ、長元記ノ下文ニ見タリ、可合見、
(圖下同シ)

十三日
乘船出發
スベシ

天正十二年九月十一日

九月七日

桂兵

輝元(花押)

一八四

追々申遣之候、至來嶋渡海之事、來十三日各乘船候、其方事定而先度以申聞之首尾、早々可罷出候、日限右之分ニ令儀定候上者、遅々候て先様一動之節不罷著候てハ、不可有其曲候、爲此重々申遣之候、猶任口上候、謹言、

九月十一日

輝元(花押)

桂兵部丞殿

其表之趣申越之通、具こ承知候、急度人数指渡、一動可申付催候條、其節万端心遣肝要候、長々逗留辛勞無申計候、猶自粟藏所申候、謹言、

九月十二日

輝元(花押)

桂兵部丞殿

○元親、伊豫黒瀬ノ陥落ヲ輝元ニ報ズルコト、十月十九日ノ條ニ見ユ、

大友義統ノ將戸次道雪、高橋紹運等、蒲池鎮運ヲ築後山下ニ攻メ、尋

テ、築河、瀬高、鷹尾等ヲ火ク、是日、鎮運、道雪ノ陣ニ抵リテ降ル、

〔蒲池文書〕乾

〔大友義統〕 尚々、屋形様御事も、急速被寄御陣、方々可被加御下知御覺悟候、我等事致供奉、然而御近邊こ堪忍之條、毎事取合等不可有緩候、雖不及申候、御入魂之一儀露顯候ハぬやうに、御才覺專一候、

先度被成御書候之處、御心底聊無別儀之通被捧御請文候、乍案中御祝著之段折々被仰出候、珍重候、殊頃三池鎮實迄御入魂之趣被申越候之條、令披露候處、今度鎮運地盤尖被聞召、倍御頼敷被思召之段被成上意候、既近々可被及御行之條、寄々言上之首尾曾而無緩、最前以手切可被勵粉骨事肝要候、累代之續不可有御忘却候之條、強而不及口能候、猶自鎮實可被申述候、恐々謹言、

八月廿三日

宗歴(花押)

鎮運まいる 申給へ

〔薦野家譜〕三 豊後勢筑後國出張、道雪、紹運黒木出陣所々働の事

一○中略、黒木實久、大友義統ニ降ルコト それより山下の城へ押よする、蒲池志摩守ハ、かねて大友家〔池下同シ〕に内通しけれハ、城を渡し、其身ハ先手に加ハリける、城には宗像掃部を入置けり、其後下

天正十二年九月十一日

一八五

三池鎮實

朽網宗歴

山下ノ蒲池鎮運道雪ニ降ル
大友義統ノ薦野家譜
兵鷹尾氏ヲノ

道雪紹運
築河攻撃
ヲ議ス
築河城ノ
結構

西牟田城
鳥等ヲ拔

和仁邊春
三池等降

天正十二年九月十一日

一八六

筑後へ打出、高尾(鹿)の城を攻圍む、田尻鎮種は柳川の城に在ける故、留守居の者共防ぎけれ共、豊後勢物ともせず乗崩し、悉く焼拂ひぬ、爰におゐて道雪、紹運、諸將と柳川の城を攻へき評議あり、此柳川の城と申へ、二方は海により、二方ハ沼堀縦横にして、要害堅固の地也、其上佐賀の士將龍造寺家治(鹿)、多勢にてこれを守る、又この比神代、熊代等加勢として籠りしかへ、卒爾こへ攻よせ難しと、詮儀區々なる處に、高良山座主良寛より使を以て、當山は堅固の地也、その上大友屋形、弘治、永祿兩度の太亂に、御陣をすえられ、大敵を退治有し吉例也、今般も當陣に御陣をめされ、諸方への御手遣ひ然るへきかと申越けれハ、諸將是に同意し、柳川を攻すして、坂東寺に諸勢をまとめ、佐賀より人數を入置たる西牟田の城を、暫時に乘崩し、これより城島の磐に押よせ、一時に焼拂ひ、江島、江上を駈散し、酒美、榎津邊まで悉く放火しけれハ、此勢ひに辟易して、和仁、邊春、三池等の諸士、佐賀を叛き、道雪、紹運の陣にそ加はりける、○中略、道雪、紹運等、軍ヲ高良山ニ移ス

前(四)、御一通、同(十一)、到來候、其表之儀統虎被仰談、無異儀之由案中候、彌彼境無油斷、每事可被仰付事肝要候、此表之儀、高良山、黒木事ハ先書こ申達候條、不及書載候、彌無別儀動等之砌者、自身罷出致馳走候、可御心安候、前(七)、山崎、易許(カ)、山下城麓悉相動候、左候得者、蒲地鎮連佐言一著候條、同(十)、各申談築河近邊、瀬高上下、鷹尾表、三池郡

下筑後ハ
築河ノミ
殘ル

十四日坂
東寺ニ寄
陣ノ豫定
鳥津氏ノ
著陣スニ

道雪田原
親家ト議
シ上筑後
ニ行動ス

薦野増時

義統増時
ノ辛勞ヲ
稿フ

境迄燒詰引歸候、同(十一)、鎮連儀致參陣、各々遂一禮無底意入魂候、可御心安候、西牟田其

外和仁、邊春、三池已下以佗言、一兩日中可致手切之由申候、○道雪等、西牟田等ヲ侵スコ、下筑

後之儀者、築河計之儀候條、彼方角爲閉目、明日(十四)、至坂東寺表寄陣候、當國之儀者、廳

而平均可罷成事指掌候、萬方面白事千々萬々こて候、爲御心得候、薩州衆事、肥後熊本ハ

著陣候、○鳥津義久、兵ヲ隈本ニ集結ス、至隈部、今明之間被取懸之由、追々到來候、從是も飛脚

指遣候條、罷歸候ハ、段々可申遣候、爰元之儀今少之事候條、急度上筑後ハ打登、親家(田原)

申談一行之覺悟候、必前ヲ以御左右可申候、北目之事、統虎被仰談、吉河郷内御存分被

仰渡之由、彼方角之儀者、每事無異所事候、諳成言種之存分雖有之、致校量候、中々明瞭、

向後可任上意迄候、先日判昏之儀承候へハ指進之候、彼到來如何候哉、承度候、豊前目之

儀、親家申談、調無油斷候、可御心安候、万端用口上候之條、先殘多候、恐々謹言、

九月十三日

道雪御判

増時(薦野)
まいる人々

今度道雪、紹運至黒木表越山候、然者其方事爲立花城番、統虎ハ被副置之由、辛勞之至候、殊舍弟勘解由丞、同彌助事、道雪同心候、仍而前(九)、築河表發向之刻、兄弟依手碎、被

天正十二年九月十一日

一八七

官安部六彌太及度々分捕高名之由候、忠儀無比類候、必其境取鎮、至増時一稜可賀之候、爲存知候、恐々謹言、

九月十四日

義統御判

薦野三河守殿

彌助、勘解由丞ハ伯父甥也、事多き時節なれハ、筆者の誤りなるへし、

〔立花記〕 九道雪公、紹運公御征伐筑後袁

其後川崎、邊春、兼松、谷川、山崎ノ諸城ハ皆風ヲ聞テ降參ス、山下ノ城ニ取カクレハ、城主蒲地志摩守鎮兼テ大友内通シタリケレトモ、龍造寺ニ質ヲ出メ置ケレハ、様々歎キ、肥前ノ質ヲ盜取、城ヲ明テ渡シケレハ、城ニハ宗像掃部助ヲ入置ケリ、其後下筑後不殘放火シ、鷹尾ノ城ヲ乗破リ、柳河ノ城近邊ヲ燒拂ヒ、同九月ニ道雪、紹運柳川陽ヘ打テ出、所々ニ火ヲカケ燒拂フ、蔣野彌助手ヲ碎キテ敵ノ中ヘ割テ入、火花ヲ散シテ戰タリ、被官阿部六彌太、同民部、中間市郎ハ、各敵ヲ打取ケリ、○上下略、黒木實久、大友義統ニ降ルコト及ビ道雪、紹運等、高良山ニ陣スル柳河立花家譜 坤 鑑連 是月七日、諸將ト軍ヲ山崎ニ移シ、蒲池鎮運カ山下ノ城ニ迫ル、鎮運降ヲ請フ、十日、柳河近邑瀬高上下ノ莊、鷹尾ヲ焚キ、三池郡ノ界ニ至ル、是時西牟田、和仁、邊春、三池ノ諸邑主使ヲ遣リ降ヲ請フ、筑後略定ル、獨リ柳河未タ降ラス、○上下略、黒木實久、大友義統ニ降ルコト

川崎邊春諸城大友氏ニ降ル

鎮運ハ表裏ニ屬セシメテスル

道雪等坂東寺ニ陣スル備ハ堅固

及ビ道雪、紹運等、高良山ニ陣ヲ移スコトニカ、ル、本月一日ノ條及ビ十月三日ノ條ニ收ム、

〔高橋記〕 二十一下筑後上妻郡御陣替 并 豊州衆心持違被打入事

筑後山下住人蒲池兵庫守秋廣者、近年龍造寺ニ一致シテ、於肥前證人ヲ出シ置候ヘ共、紹運公、道雪公著陳ニ付テ、難儀ニ及ヘキノ由被見付、内々兩大將ヲ頼ミ、至大友殿遂御侘言、御味方ニ可參ノ由御斷リ最中也、然共證人ヲ盜ミ可取間ハ、上ヅラハ肥前方ニテ、内證ハ豊州一篇ノ覺悟一定ナリ、コレニヨツテ御人數モカサミ、同年八月廿四日、上妻郡ニ御陳替ヲ以テ、被舉放火ナリ、同八月廿九日、高良山ノ座主良寛味方ニ參セラレ、○良寛、大友氏ニ應ズルコト、同九月朔日、紹運公一手ニテ、黒木廻リ發向ノ所ニ、忍ヘ兼降參ス、同九月五日、山崎ニ陣ヲ替、山門郡瀬高庄鷹尾、田尻、海津、堀切マテ放火ス、同九月十五日、坂東寺ニ陳替ニテ、三潞郡西牟田、城嶋、酒美、榎木津ニ至テ放火シ、柳川一城ニ詰寄候ヘ共、龍造寺家治丈夫ニ持支ヘ、殊ニ城廻リ五六千町耕作仕リ、大船所々ニ引付、諸方ニ通用ス、其上龍造寺ニ取ツ、キタル城ナレハ、四面鐵壁ノ如ク、何箇年被攻候共、城中ヨハルマシキ躰ト見エ、長陳ハ還テ寄手ノ弱ソト思召シ、○下略、道雪等、高良山ニ陣替ノコトニカ、ル、十月三日ノ條ニ收ム、

〔九州治亂記〕 八 筑後所々合戰事

ソレヨリ山下ノ城ニ取懸ケリ、城主蒲池兵庫鎮運、元來大友方ニ内通アリシ事ナレハ、異儀

宗像掃部
入ル下城ニ

良寛道雪
等ニ高良
山在陣ヲ

道雪山門
郡ノ村々
ヲ火ク種
田尻鑑種
垂見ヨリ
移

天正十二年九月十一日

一九〇

ニ及ハス隨身ス、サレトモ城ヲ請取、宗像掃部ヲ入ヲカル、サアリテ下筑後エ打テ出、高尾ノ城ヲ乗破リ、悉ク放火ス、城主田尾鎮種(筑後)ハ其比肥前ニアリシニ依テ、此城抱エサリケリ、道雪、紹運、豊後衆又相談シテ、築川城ヲ攻ヘキカトアリシニ、龍造寺家治(備前)多年在城也、其上近日加勢トシテ、神代、熊代多勢籠リヌレハ、タヤスク落マシ、イカ、スヘキトアリシ處ニ、同國三井郡高良山ノ良寛僧都ハ、元ヨリ大友方ニ志アリシ人ナリシカ、使者ヲ以申シケルハ、當山者要害ヨキ處ナリ、其上大友殿弘治、永祿ノ亂ニ二度マテ御在陣アリテ、豊筑肥ヲ治メラレシ吉例也、是エ御陣ヲ移サレ候エトアリシカハ、大友衆築川ヲ攻スシテ、坂東寺ニ勢ヲタテ、龍造寺人數籠タル西牟田ノ城ヲ押散シ、夫ヨリ城島ノ城ニ取カケ、江嶋、江上等ヲ追拂ヒ、惣シテ其近邊大略焼拂ヒ、○上下略、道雪、紹運、黒木實久ヲ降スコト及ビ高良山ニ陣ヲ移スコトニカ、ル、本月一日ノ條及ビ十月三日ノ條ニ收ム、ナホ戸次軍談殆ンド同ジ、

〔北肥戰誌〕

九

大友勢筑後國亂入所々軍ノ衰

一〇中略、猫尾落城夫ヨリ道雪山門郡ニ來テ、(九月)同月九日、瀬高近邊ノ村々ニ打入テ、所々ヲ焼拂フ、此時海津ヘ在ケル田尻鑑種、鍋嶋信生ノ下知ニ依テ、大友勢ヲ防カンタメ、同九日、海津ヨリ垂見村ヘ陣更シ、則爰ニ要害ヲ取搆ヘテ差籠リケリ、此日大友勢白鳥表エ打入ニ付テ、田尻則馳向ヒ、是ヲ追返ス、然ル處ニ、豊後衆又鷹尾ヘ相働ク由聞ヘシニ依テ、田尻早速取掛シカトモ、其衰虚説ナリシ故、頓テ垂見ヘ陣ヲ返シケリ、

築河ノ防備

築河ノ端城

百武志摩
守ノ後家
船圓久尼
津ヲ守

一同月十五日、戸次入道道雪、山門郡ノ内所々ヘ相働キ、高橋入道ト勢ヲ合セ、坂東寺ヘ陣ヲ替、豊後勢ノ一將田原六郎親家ニ參會シ、軍談ヲ決シテ、先西牟田村、酒見村、榎木津ノ在家數百軒悉ク焼拂ヒ、偕龍造寺上總介家晴カ守タル築河ノ城ヲ攻ントシケリ、サレトモ當城ハ無双ノ要害ト云、其上城主家晴兼テ用意シケレハ、空閑、内田、犬塚以下ノ加番人ヲ初メ、草野左右門尉家清モ當城ヘ來テ、彼是數千騎ヲ以テ楯籠リ、其兵糧ノ料トノ、城ノ四維六千餘町ノ稻ヲ悉ク刈採、城内ヘ籠置、海手ニハ數十艘ノ番船ヲ繫キテ、敵ヲ不近付、所所ニ端城ヲ取搆ヘ、佐賀ヘノ通用ヲ自由ニス、其端城ト云、先ツ城ヨリ凡五十町北ノ方、酒見ノ城ニ大田右衛門太夫家豊、乾ノ方榎木津ノ要害ニ中野式部少輔清明、東ノ方蒲船津ノ城ニ百武志摩カ後家圓久尼、カ、南ノ方蒲池ノ要害ニ重松四右衛門範幸、此外垂見ニ田尻丹後守鑑種、各其武備ヲ堅フシケレハ、道雪、紹運ヲ初メ、豊後ノ輩卒忽ニ築河ヘ取カケ得ス、先ツ輕卒ヲ進メテ、道々ヲ放火シ、中野式部カ榎木津ノ要害ヲ攻サセケル、中野聞ユル者也シカハ、更ニ哀トモセス、城中ヲ驅廻テ、士卒ヲ下知シ、鐵炮ヲ打セ、矢ヲ放チテ、身命ヲ不惜防キシ間、戸次、高橋カ軍兵トモ、爰ヲ左右ナク破リ不得、夫ヨリ百武カ後家圓久比丘尼カ籠タル蒲船津ノ城ヘ取掛ル、彼圓久ト云シハ、無比類剛ノ者ニテ、長高ク髮長ク、大力ノ荒馬乗也、過ヌル三月、夫ト志摩守嶋原ニテ戰死ノ後、信生ノ命ニ依テ、女ナレトモ

天正十二年九月十一日

一九一

三池親基
中野兵庫
助大友氏
ニ降ル

龍造寺政
家鍋島信
生ト守備
ヲ議ス

志摩守ニ不替、當城ヲ守リ、元ヨリ男子アラサリシカハ、家人等ヲ從ヘ居タリシカ、大友勢ノ寄ルト聞テ、大長刀ヲ横タヘ、城戸口ニ出、手ノ者ヲ勵マシ防戦ス、斯ル處ニ、中野式部榎木津ヨリ馳來リ、圓久ヲ援フテ相戦フ、斯リシ程ニ、戶次、高橋カ者トモ爰ヲモ打捨テ、又坂東寺ヘ引退ク、斯テ豊後方ノ諸勢相集リ、龍造寺方三池河内守親基カ三池ノ古賀ノ城、中野兵庫助カ江浦ノ城ヲ攻ケルニ、兩人則降參ス、
一斯テ筑後ノ龍造寺方大友勢ニ攻ラレ、多クハ下城ニ及フ由、追々佐嘉ヘ相聞ヘ、角テハ叶ヘカラスト、政家、信生談合セラレ、田尻鑑種カ近日垂見ヘ在村シケルヲ、蒲池ノ城ヘ被差籠、大友勢ヲ可被防ヤ、又鷹尾ノ城ヘ可被置ヤト有ケル處ニ、鷹尾ハ元來彼鑑種カ舊地ナル間、鷹尾ノ城番可然トテ、同九月十八日ヨリ、田尻ハ鷹尾ヘ入城シケリ、然ルニ江浦ノ中野兵庫助、此時大友方ニ成テ、度々打出シニ依テ、田尻日夜ノ弓斷ナク、其境ヲ守テ勤番ス、

〔普聞集〕

七（九月）

同五日、道雪、紹運山崎ニ陣替シ、山下ノ蒲池（龍造）鑑廣心通ス、肥後ニハ島津義弘、分國ノ兵三萬ヲ督シ、八代ヲ發メ隈本ニイタリ、筑前、筑後、肥前ノ城曹ヲ催ラス、來服スル者多シ、○島津氏ノ兵、隈本ニ抵ルコト、九月十日ノ條ニ見ユ、

信生垂見

信生計ラヒニ依テ垂見城ヲカマヘ、田尻鑑種ヲ守ラシム、コノ時白鳥表ニ豊後勢相働ク、

城ヲ構ヘ
鑑種ヲシ
テ守ラシ
ム
龍造寺家
晴築河ヲ
守ル

信生鑑種
ヲシテ鷹
尾ヲ守ラ
シム
堀切ノ地
下人ノ一
起ス

鑑種行向ヒ、追拂テ首數級ヲ討取、垂見ニカヘル、

九日、道雪、紹運陣ヲ山門郡ニウツシ、所々放火ス、十五日、兩士坂東寺ニ陣シ、柳川城ヲ攻ントス、柳川ニハ龍造寺家晴數千兵ニテ楯籠リ、防拆ノ術堅固也、浦々ニ大船ヲツナキ、數ヶ所ノ端城ヲ構ヘ、榎津ヨリ佐賀ニ取ツナキ、援兵ノ通路ヲ自由ナラシム、且酒見城ニハ大田生左衛門茂連、榎津ハ中野甚右衛門清明守之、蒲舟津ヲ百武志摩守カ後室圓久尼相守ル、コノ尼タケ高ク大カニテヒケ生タリ、田尻鑑種武威ツヨク、勢ヲヒ國中ニハビコリ、道雪、紹運柳川ヲ攻ルコトアタハス、一日道雪カ兵、蒲舟津ノ咎ヲ攻、城主中野甚右衛門苦戦メ追ハラフ、
十八日、信生ノ下知ニテ、田尻鑑種ニ高尾城ヲ守ラシム、是鑑種カ本城也、ソノ親族家士悦フ、立花道雪柳川ヲ攻ルコトツイニ不果メ、高良山ヘ歸ル、同日、堀切ノ地下人一揆ヲ起シ、城内ニ豊後勢ヲ引入、田尻鑑種是ヲ攻テ不克、

〔鍋嶋直茂譜考補〕

五上

筑後御出馬

一九月十五日、道雪、紹雲（道）坂東寺ヘ陣ヲトリ、柳河ノ城ヲ攻ント議ス、然レトモ當城ハ究竟ノ要害ニテ、龍造寺ノ軍兵數千騎籠リ居、浦々ニ數艘ノ番船ヲ繫キ、所々ニ端城ヲ構ヘテ、佐嘉ノ通路ヲ自由ニシケレハ、卒忽ニ攻ル事不相叶、其端城ト云ニハ、先ツ酒見ニ大田正左衛門家豐アリ、榎津ニ中野式部少輔清明、蒲船津ニ百武志摩守賢兼カ後家圓久尼、蒲池ニ

天正十二年九月十一日

一九四

重松四右衛門範幸、貝津ニ田尻丹後守鑑種、各楯籠テ武威ヲ逞フス、斯テ道雪蒲船津ノ城ヲ攻シカトモ、圓久尼稠シク防テ追拂フ、此圓久ト申スハ、大剛無双ノ女姓（性）ニテ、平生ニ乘馬ヲ好ミ、髮長ク大鬚左右ニ分レリ、サレトモ又容貌美麗ニ色白ク、合戦ノ出立ニハ、大長刀ヲ得物ニス、去ル三月廿四日、夫ノ志摩守隆信公ノ御供シ、島原ニテ討死ノ後、即ニ成リ、法名圓久ト號ス、戸次、高橋カ兵、彼圓久ニ防カレテ、蒲船津ヲ指置、中野式部カ榎津ノ城ヲ取圍ム、中野鐵鉋（鉋）ヲ打掛ケ、大ニ相戦フ、寄手不叶引退キ、坂東寺ヘ陣ヲ取ル、（中略）

圓久夫志摩守出陣ノ時ハ、常ニ從行、志摩守島原出陣ノ跡、蒲船津ニ在テ、留守堅固ナリ、隆信公御生害ノ由相聞ヘ、志摩守死生ハ未相知ス、サレトモ内室兼テ夫ノ心底ヲ察シ、必討死タルヘシト量リ、乃筑後ヲ出、佐嘉ニ趣キ、淨土寺ニ入、髮ヲ薙テ尼ト成、圓久ト號ス、時ニ志摩守殉死ノ由注進アリ、圓久小時佐嘉ニ在、既ニシテ公ノ御勸ニヨリ、再ヒ筑後ニ赴キ、死殘レル家人等ヲ集メテ、蒲船津ヲ守ル、其後圓久長刀ヲ横ヘ、馬ヲ乘出シ、佐嘉ニ歸リ、尼ノ身ヲ以テ城番不相似合ノ旨、公ヘ相斷リ、其儘與賀郷西八田ノ居宅ニ住スト、（百武戰功記）

○道雪、紹運、黒木實久ヲ筑後猫尾ニ攻ムルコト、七月二十日ノ條ニ、同國縮、坂東寺、西牟田等ヲ侵スコト、八月二十八日ノ條ニ、實久ヲ降スコト、九月一日ノ條ニ、軍ヲ同國

高良山ニ移シ、龍造寺政家、秋月種實ノ領邑ヲ侵スコト、十月三日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔葉隱〕

十一

（下高之）
鑿連御征伐の時、百武志摩守不能出候事、付女房働の事

辻ノ堂邊にて鑿連御成敗の由騒立候處、志摩起も上り不申候に付て、女房物具を投懸、是ほどの騒に御出無之ば、御をくれ候やと申し候、志摩申され候は、今度鑿連御成敗、御家御運の末に成たると存じ候得ば、頻に落涙し、打向へき氣色無之と申し候て、終に出合申されず候、又或時女房恪氣にて、一家朝食を喰せ申さず候處、御出陣と申來り、早速駈出で候跡にて、女房後悔いたし、飯を焼き、水樽に入、男出立にて、自身荷ひ、下女どもにも持たせ、陣所に持越申し候由、又島原御一戰以後、筑後へ薩摩方懸り候時分、蒲池城に志摩女房罷在り候が、小勢と見られ候へば成べからずとて、俄に旗指物を數多こしらへ立並べ、堅固に城を持堅め、敵を追散し、後日旗指物は諸用事に遣ひ申し候由、志摩初の屋敷西の丸奥、今の傳兵衛屋敷の由なり、女房は大力にて候なり、

〔筑後將士軍談〕

四十六

（上妻郡）
城館第宅部二

山下國見嶽城跡

（明覽、蒲池物語作人見城云、蒲池親廣永正中始構館於山下而移之、至鑑廣築此城、）

蒲池兵庫頭鑑廣、蒲池城ヲ引テ此山ニ移ス、東ニ大山アリ、北ハ國見嶽ヨリ男山ニ續テ、松柏峯谷ニ鬱蒼タリ、西ニハ大河手付淵、四緒淵等ノ要害アリ、無双ノ名城ナルカ故、龍造寺數來

天正十二年九月十一日

一九五

天正十二年九月十一日

一九六

攻レトモ、遂ニ拔コト能ハス、鎮運卒シテ、其子彌六太僅ニ五歳、城ヲ守ルコト能ハス、遂ニ以テ没落云々、家記南筑明覽云、鑑廣、鎮運相續保之、秀吉征西ノ後、所領沒收セラル、陰徳記云、天正十五年、秀吉山下ノ城ヲ筑紫廣門ニ賜フ、

山崎村城跡

天正ノ始、上妻越前守居城也、同十二年道雪、紹運當郡平治ノ爲メ、暫當城ニ陣ス、明覽

大友義統、立花道雪、鑑高橋紹運、種摩下ノ將立花鎮實、十時惟直等ノ、筑後ニ於ケル戰功ヲ褒ス、

〔立花右衛門大夫同兵庫助宛感狀寫〕

去月^{十九}、道雪以同心凌敵中、到黒木表著陣以來、於在々所々軍勞、殊其方被官山崎彌衛門尉分捕高名之由、感入候、彌可勵馳走事肝要候、恐々謹言、

九月十一日

義統 在御判

立花右衛門 太夫殿○大友家文書録六及立花家舊臣文書所收文書同ジ

本書立花七郎兵衛尉所ニ在、

〔十時文書〕○筑後

去月^{十九}、以道雪同心凌敵中、至黒木表著陣已來、於在々所々軍勞、殊分捕高名之由、忠儀無比

十時惟直

類之條、染筆候、彌可勵馳走事肝要候、恐々謹言、

九月十一日

義統(花押)

十時刑部丞殿

〔由布文書〕○筑後

去月^{十九}、以道雪同心凌敵中、至黒木表著陣已來、於在々所々軍勞、殊其方僕從彌介分捕之由、感入候、彌可勵馳走事肝要候、恐々謹言、

九月十一日

義統(花押)

由布美作入道殿

〔佐田文書〕○筑後

去月^{十九}、道雪以同心凌敵中、至黒木表著陣已來、於在々所々軍勞、殊其方被官實藤市介分捕高名之由、忠儀感入候、彌可勵馳走事肝要候、恐々謹言、

九月十一日

義統(花押)

新田掃部助殿

〔竹迫文書〕○筑後

去月^{十九}、道雪以同心凌敵中、至黒木表著陣已來、於在々所々軍勞、殊分捕^三、高名之由、忠儀無

天正十二年九月十一日

一九七

竹迫鑑種

新田鎮實

由布雪下

天正十二年九月十一日

比類候條染筆候、彌可勵馳走事肝要候、恐々謹言、

九月十一日

竹迫日向守殿

義統御判

一九八

竹迫虎種

去月^{十九}、以道雪同心凌敵中、至黒木表著陣已來、於在々所々軍勞、殊其方僕從堅^(鳥取)充分捕之由、感入候、彌可勵馳走事肝要候、恐々謹言、

九月十一日

竹迫龍壽

義統御判

〔横大路文書〕^{○筑前}

去月^{十九}、以道雪同心凌敵中、至黒木表著陣已來、於在々所々軍勞、殊分捕高名之由、忠儀無比類之條染筆候、彌可勵馳走事專一候、恐々謹言、

九月十一日

横大路伊賀守殿

義統(花押)

横大路伊賀守

〔兒玉韞採集文書〕^{○筑前}

去月^{十九}、以道雪同心凌敵中、至黒木表著陣已來、於在々所々軍勞、殊分捕高名之由、忠儀無比類之條染筆候、彌可勵馳走事專一候、恐々謹言、

九月十一日

横大路伊賀守殿

義統(花押)

是松中務丞

名之由、忠儀無比類之^{○歴世古文書三所收}條、染筆候、^{○同上、候ナシ}彌可勵馳走事專一候、恐々謹言、

九月十一日

是松中務丞殿

義統

去月^{十九}、至黒木表道雪越山之刻、以同心著陣以來、於其表在々所々被勵軍忠之由感入候、彌可被抽馳走事肝要候、必追而一段可賀之候、恐々謹言、

九月廿八日

是松中務丞殿

義統

〔田村文書〕^{○徳富猪一郎氏所藏}

先書如申候、長々之在陣軍勞令推察候、殊下筑後屬案中之由、寔感悅候、彌可被勵馳走事可爲祝著候、必取鎮、一稜可顯其志候、猶重々可申候、恐々謹言、

九月十一日

田村作進殿

義統(花押)

〔田原文書〕^{○筑後}

天正十二年九月十一日

一九九

田村統幸

福有親久

天正十二年九月十一日

〔福有備後守殿〕

義統

1100

去月十九、道雪以同心凌敵中、至黒木表著陣已來、於在々所々軍勞、殊其方被官富岡宮内丞、高木甚四郎分捕高名之由、忠儀感入候、彌可勵馳走事肝要候、恐々謹言、

九月十一日

義統(花押)

福有備後守殿

〔立花家舊臣文書〕

○筑後

去月十九、道雪以同心凌敵中、至黒木表著陣以來、於在々所々軍勞、殊分捕高名之由、忠儀無比類之條、染筆候、彌可勵馳走事肝要候、恐々謹言、

九月十一日

義統(花押)

櫻井中務少輔殿

櫻井中務少輔殿

義統

〔薦野家譜〕

三 豊後勢筑後國出張 道雪、紹運黒木出陣所々働の事

去月十九、以道雪同心凌敵中、至黒木表著陣已來、於在々所々軍勞、殊其方被官安部六彌太分捕二、高名之由、忠儀感入候、彌可勵馳走事肝要候、恐々謹言、

薦野増時被官安部六彌太

櫻井中務少輔

〔福有備後守殿〕

義統

1100

去月十九、道雪以同心凌敵中、至黒木表著陣已來、於在々所々軍勞、殊其方被官富岡宮内丞、高木甚四郎分捕高名之由、忠儀感入候、彌可勵馳走事肝要候、恐々謹言、

九月十一日

義統(花押)

福有備後守殿

〔立花家舊臣文書〕

○筑後

去月十九、道雪以同心凌敵中、至黒木表著陣以來、於在々所々軍勞、殊分捕高名之由、忠儀無比類之條、染筆候、彌可勵馳走事肝要候、恐々謹言、

九月十一日

義統(花押)

櫻井中務少輔殿

櫻井中務少輔殿

義統

〔薦野家譜〕

三 豊後勢筑後國出張 道雪、紹運黒木出陣所々働の事

去月十九、以道雪同心凌敵中、至黒木表著陣已來、於在々所々軍勞、殊其方被官安部六彌太分捕二、高名之由、忠儀感入候、彌可勵馳走事肝要候、恐々謹言、

薦野増時被官安部六彌太

櫻井中務少輔

九月十一日

義統御判

薦野三河守殿

道雪、黒木出陣の時、増時ハ統虎の後見として、立花城に残し置給ふ、此番面は成家勘解由丞出陣の供せしを、増時も出陣せしと豊府へ聞へし故、増時へ感書賜りし也、

〔碩田叢史〕

三

去月十九日、紹運同心凌敵中、到黒木表以來、在々所々軍勞、殊分捕高名之由、忠儀無比類候條、保筆候、彌可勵馳走事肝要候、恐々謹言、

九月十一日

義統(花押) ○コノ花押ノ形態ハ、書寫ノ誤ナリ、

中村助兵衛殿

〔歷世古文書〕

二

去月十九日、紹運同心凌敵中、至黒木表以來、於在々所々軍勞、殊分捕ノ間ニ高橋記所收文書、コノ高名之由、忠儀無比類候條、染筆○大友家文書録六及ビ高橋記所收文書、コノ間ニ候ノ字アリ、彌可勵馳走事肝要候、恐々謹言、

天正十二年 申 九月十一日

義統判

光行助右衛門大友家文書録六及ビ高橋記所收文書、コノ間ニ尉ノ字アリ、殿

○道雪、紹運等、筑後ニ入り、猫尾ノ攻圍ニ参加スルコト、八月十九日ノ條ニ見ユ、

天正十二年九月十一日

1101

中村助兵衛

光行助右衛門尉

天正十二年九月十二日

二〇二

十二日、^乙羽柴秀吉、河内金剛寺ニ、沒收セル寺領還付ヲ約シテ、功ヲ勵マサシム、

〔金剛寺文書〕

彼調略於相調者、去年召上候三百石可令寄進候、成其意、粉骨肝要候也、

筑前守

秀吉 (朱印)

天正拾貳

九月十二日

天野惣中

天野惣中

○秀吉、金剛寺ヲシテ、寺領ヲ安堵セシムルコト、十一年九月一日ノ條ニ見ユ、

羽柴秀長、^長美濃西順寺ニ禁制ヲ下ス、

〔西順寺文書〕 ○美濃

禁制

濃州北方寺内西順寺

北方寺

一當手軍勢、甲乙入亂妨狼籍之事、

一陣取放火之事、

一代採竹木、付對地下人非分懸申事、

右條々堅令停止 畢、若於在違背輩之者、速可處嚴科者也、仍下地如件、

美濃守

秀長(花押)

天正拾二九月十二日

○神戸信孝、西順寺ニ禁制ヲ下スコト、十一年閏正月是月ノ條ニ見ユ、

十三日、^丙徳川家康、紀伊金剛峰寺惣分中ニ、恩賞ヲ約シテ、忠信ヲ勵マサシム、

〔御判物留〕 高野一山

今度鷹山鶴左衛門尉相談、鐵炮五百丁被持之、於被勵忠信者、和州内貳万斛之所可渡置之、然者當山聖以下廻國不可有異儀之狀如件、

天正十二年

御諱 (家康) 御書判

九月十三日

高野山

惣分中

御上卷

金剛峯寺惣分中

御諱

天正十二年九月十三日

二〇三

鷹山鶴左衛門尉
大和石ヲテ
二萬石ニテ
與ヘンテ
高野聖ノ
廻國ヲ許ス

遊佐某ト
議リテ河
内ニ兵ヲ
出サシム

天正十二年九月十四日

二〇四

一章令啓達候、仍河内表行之儀、遊佐と被申合、此節御馳走肝要候、將又爰元之様子能々得見聞之條、不能巨細候、旁期後音之時候、恐々謹言、

九月廿四日

御諱 御書判

金剛峯寺

惣分中

○家康、紀伊高野山清淨心院ニ書ヲ遣リテ、米田愛俊、越智家政ニ、家康ニ應ゼンコトヲ説カシムルコト、七月一日ノ條ニ見ユ、

十四日、^丁佐々成政ノ屬將越中守山ノ神保氏張、能登ヲ侵サントシ、同國七尾ノ守將前田安勝等ト、荒山、勝山ニ戰フ、是日、前田利家、同國石動山ノ守將大屋勝重、青木善四郎ニ、末森ノ戰捷ヲ報ジ、氏張ニ對シテ、堅ク備ヘシム、

〔奥村氏所藏文書〕

賀○加

其競を以[○]利家、末森ニ成政^(安勝)ヲ破ルコトヲ指ス、七尾ニ有之同名五郎兵へ、中川清六、越中内境目之荒山城へ取懸責崩、城主之事ハ不及申、悉刎首候付而、勝山同前落居候條、越中國中へ付入候、[○]上下略、九月十三日附、秀吉宛利家書狀、全文ハ本月十一日ノ條ニ收ム、一日ノ條ニ收ム、

中川清六
モ荒山ヲ
攻ム

〔松雲公採集遺編類纂〕

百四十四
古文書部四十五

今度於末守被及合戰切崩、野々村主水初而數多被討捕、被得大利之由申越候、心知能御手柄無申計候、殊自七尾罷出、是又荒山、勝山乘取、首數多討取之由、何之口も首尾揃、目出度珍重候、[○]上下略、九月十六日附、利家宛秀吉書狀、全文ハ本月十一日ノ條ニ收ム、

牧長六右
衛門

御狀披見候、仍今度ハ末森城取卷、端城令放火、本城計相殘候由申來候コ付、則又左衛門、我等懸付、即時追崩、大將分十一人^(二九)、其外首千餘討捕候、手負死人數多有之事、於様躰ハ可御心易候、其元彌丈夫コ被仰付候由尤候、萬端御氣遣肝要候、將又牧長六右衛門書狀到來候間、則遣之候、猶從是可申候、恐々謹言、

(天正十二年下同シ)
九月十四日

利勝(花押)

青木善四郎殿
御返報

右青木善四郎ハ能登國鹿島郡石動山之砦コ被置也、

爰元爲見廻書狀祝著候、今度於末森悉討果候、其元在番機遣も少之間候、彌不可有油斷候、^(氏張)神保も歸候よし申候間、卒爾之働なと無用候、最前申遣候、其心得專一候、謹言、

天正十二年九月十四日

二〇五

氏張能登
ヨリ越中
ニ退ク

天正十二年九月十四日

二〇六

九月十四日

又左

利家(花押)

青木善四郎殿御返事

返々、越中にて人数を持候ほとものものを討捕候、ひとりみひに成候間、れうしのはたらき有へからず候、以上、

態令申候、依越中へ神保安藝、甚助、牛之助を返し遣し候由申越候、れうしこ城を出事無用候、物別其元無人にて働候事、一切有間敷候、働候而よき時分、此方より人数を遣候、同前可被申付候、指出たる儀無用候、爲御心得令申候、其元不可有油斷候、恐々謹言、

九月十四日

利家(花押)

青木善四郎殿

大屋助兵衛殿

岡本系圖云、元祖大屋助兵衛勝重、越中國佐々内藏助取合之節、能州石動山之城被預、一冬立籠處、氷見庄阿尾之城主菊池入道降參之時罷越、入道一所在城、其後三千俵賜之、越中國今石動城被預之云々、

敵荒山
退散セバ
權現ニ烽
火ヲ上グ
ベシ上グ
利家勝山
口ニ高鼻
織部ヲ陣
セシム

〔相川豊男氏所藏文書〕

賀加

今日は度々注進令祝著候、仍あら山の敵今夜いたりとりのかきかと存候、人を付置、若のく事候ハ、こんけんこ火をたて可申候、即それまで人数をつかハし、てつはうはなしを出しはなさせ可申候、かつ山の口へハ織部(高鼻)と陣取申候而、人を付置、やうたいきかせ申候、いづれも火をあひつに人数を可遣候、無由斷荒山口こ人を付置尤候、火をあけ次第人数を可遣候、謹言、

又左

利家

黒印

十月廿六日

青木善四郎殿

大屋助兵衛殿進之

〔奥村傳書〕

一末守之御陣三十日計以前に、越中森山(守)之城主神保安藝守氏治能州羽喰郡七

十五ヶ村一揆どもと申合、能州志雄邊の氏治人数を出し申由、金澤へ相聞、高鼻石見守被仰付、一騎懸に仕候ところ、志雄の岸田次左衛門一番に鑓を合申候、然所越中勢金澤より御入數參申を見候て引返申候處、細井忠右衛門溝を一つ隔、鑓とゞき不申に付而、なげ突に仕候、其後岸田は從大納言様御感狀被下候御事、(前田利家)上下略、十月二十二日附、今枝民部宛奥村因幡守覺書、十三年四月八日及、本年九月十一日ノ條ニ

天正十二年九月十四日

二〇七

氏張利家
ノ授兵到
退ルト見テ

天正十二年九月十四日

二〇八

〔加能越古文叢〕^{四十}

元和五年笠間儀兵衛高名書

一先年大納言様と佐々内藏介殿と御取合之刻、能州勝山を越中衆神保あきのかみ内、袋隼人取出て持被申候處こ、前田播磨守七尾（分磨）手遣被仕、双方立合、ふもとにて鑓合、其よりてき入數引取、城中へ入可申と仕候處こ、播磨與力の者とも取付申候て、付入こ本丸木戸きわまてつき申候、然處こ、大手門口（鑓カ）を二三間計下てて、き壹人こ遣付申候處こ、其仁返し、山の平に腰をかけ、我等と鑓合申内に、つゝいててきあまた返し申候て、我等ハ一人こ而御座候故、鑓手二ヶ所をいつき被伏候内こ、てき本丸へ取入申候事こ候、其後承候へハ、我等と鑓合申仁ハ、加野々孫介と申者の由こ御座候、其刻石黒（宋平同シ）宋女方も勝山こ籠候て、大手口にて返し被申衆之内こて御座候由承候へ共、直こ石黒口をハ不承候、籠被申義必定こ候て、其時勝山こ而かせきの次第ハ、宋女方へ御たつね可被成候、能々可被存候御事、外數條略寫之、

元和五年

三月三日

九里覺右衛門尉殿まいる

笠間儀兵衛

笠間儀兵衛ノ戦功

太閤記ノ事ニ對スル批判

今度太閤記出來仕由こ御座候、然者私義も御座候由承候處、存之外相違仕候間、長々敷書付指上申候儀、如何こ奉存候へ共、前後之義不申上候へハ、私手前相違の所相聞へ不申候間、乍恐一書を以申上候、

一先年大納言様と佐々内藏助殿と御取合之刻、七尾之城前田五郎兵衛殿御預候て御座候、然者能州勝山ヲ越中へ取出て袋隼人持被申候處こ、其刻七尾こ御入候衆、中川宗半、小塚權大夫、伊藤長意などにて御座候間、此衆と播磨守相談被申、勝山（手遣）可仕と被申候處こ、宗半御人數ハ、石動通（荒山）口へ被遣候間、殘る三人小塚權大夫、伊藤長意、播磨守勝山（手遣）手遣被仕候、日ハ失念仕候、月ハ其年之九月かと奉存候、双方ふもとこ而立合鑓合申候、其かてき入數引取、城中（入可）申と仕候處、此方へ取付申候て、付入こ本丸木戸きわまて付申候、然處こ、大手門口（二三間）許下てて、き壹人私鑓付申候處こ、其仁返し、山の平こ腰ヲかけ、私と鑓合申候内こ、つゝいててきあまた返し、我等ハ壹人こ而御座候故、鑓手二ヶ所（いつき）ふせられ候處こ、又立上りか、り可申と仕候内こ、てき本丸（取入）申候、其後承候へハ、我等と鑓合申候てきひろの孫助と申者之由こ御座候、其以後長如庵御代こ、越中へ右孫助被召寄御拘置候て、今こ九郎左衛門殿こ罷有候由こ御座候間、孫助只今こ而

天正十二年九月十四日

二〇九

天正十二年九月十四日

二一〇

も被召出御尋爲成候者、其刻私はたらきの躰、又主手前之かせき、一ノ可申上と奉存候、其時此孫助返し不申候者、無異儀勝山のりこみ申はつこ御座候、孫助返し申刻、右こ如申上候、つゝいて返し申候内、石黒宋女、皆川傳内など、申者之由、近年承申候、其後右傳内ハ、越中富山之町に引籠居申候ヲ、殿様は石黒宋女勝山之次第御物語申上候へハ、右之傳内被召出、高岡御多屋之御番など被仰付候様こ承及申候、か様こ私と鍵合申候てき方相手共、御家中へ罷越存命こ罷有申候、か様こ慥成義などハ、太閤記こ書入不申候、石動山一ヶ所之義を手おいのくびなと取申と書入申候義、ふしんこ奉存候間、たれやの口ヲ以書入申候ヲ、太閤記作り申候仁こ被爲成御尋被下候者忝可奉存候、加州之義ハ不存候、能州こ而大納言様御手遣之分、私不存候所ハ、一ヶ所も無御座候、右勝山ふもとにて、播磨守家來之内長崎藤藏、宇野勝右衛門、平井彌六など、申者、いつれもと申ながら、手前よく御座候、右彌六ハ則打死仕候、此外三頭之内こ、手おい打死御座候へ共、左様之儀共書しるし申候へハ、彌事長ク罷成申候間、先あらかた申上候御事、

寛永拾四年

壬三月廿六日

笠間儀兵衛判

奥村因幡守様

右祕笈叢書載之、

按に、前顯九月十六日付秀吉公の親簡に、○中略、九月十六日附、利家宛秀吉書狀、殊自七尾罷出、荒山勝山乗取、首數多討取之由と載給へるハ、右高名書に載たる勝山合戦の事也、三州志鞆鑿餘考にも、七尾諸將勝山堡を攻取日諸書に記さす、末森役の後とあれハ、十三日歟、秀吉公十六日の書中こ、末森の戦を賞し、次に荒山、勝山乗取、首數多討取とあれハ、十三日に非れハ合すと注せり、

一小瀬太閤記云、石動山の巻と末森との間にも、又利家卿手柄なる戦有て、越中勢利を失ひし事有し也、是こ依て各へ問しかとも、其場こ合さる人ハ、其節若ふして知らすといひて、語りも侍らす、又其場にあふて、能く働き有し人たちハ、古風やらん辭しあひて、定かにもあらざりし故、是を略すと、

右の如く載たれハ、勝山の事なども記載せざりしと聞ゆ、

〔前田創業記〕

量 ○上略、朝日山ノ戦ノコトニカ（八月）、同月、神保氏春受成政命、卒三千人、出張能易

荒山邊、侵徳善河原惱人民、先是長連龍聞氏春出師、而令鈴木因幡將兵守窪田館、氏春欲擊破之、而遣畑甚左衛門於斥候、窺館邊、鈴木因幡回計略、先是以河水湛沃館邊田中瀦其地、使須賀文次郎跪于水中、而示瀆瀆於敵、亦因林藪飄旌旗於風、爲援兵之粧劫敵軍、亦令飯坂源左衛

天正十二年九月十四日

二一一

龍氏長連
因幡將
木守窪田
守攻メ
トス

鋒ヲ轉ジ
テ荒山ニ
向フ

門爲斥候、時相遭敵斥候畑甚左衛門、是兄弟也、相與握手歡拂積懷流淚、眨飯坂以爲、氏春進兵攻則殆危者矣、故詐言曰、氏春旋軍夫然乎、勿敢以圍、難輒拔焉、高壘深溝、且兵士惟多、強攻之則溺死泥水、亦停滯則連龍援之、七尾大兵襲來共戮力夾擊乎、然則氏春何得勝、嗟呼不危哉、頗鸚鵡之啄驚耳、告攻塞之難成、畑曰、實夫然、吾能勸班軍乎、相共謝回轡、畑馳歸告之、氏春可之、命應先鋒於荒山、眨鈴木因幡發館指揮兵士、令步卒熏火繩、結之於林藪、爲伏覆而追敵、取首級免危矣、氏春築壘於勝山、俾袋井隼人守之、歸越中、自是越兵三出此處剽掠村里屢矣、使田畝就荒蕪也、前田良繼及高畠織部定吉、中川清六郎光重、發七尾襲攻勝山、不得急下之、城主袋井拒之、城兵師源七郎後號孫介、與笠間儀兵衛交鎗、鏘笠間右眼、田邊將監傷師之右股、亦城兵林三丞與田邊相接遂殞命、城壁未完、因兵士苦無依憑遁匿于山林、聚檢其兵、師源七郎、年十山崎喜左衛門、石黑宋女等僅十三人、城已危、因轉大春、或以木石投之、當者摧焉、因是數辟易而解圍、日既晡、故良繼定吉班師、○中略、末森ノ戰ニカ、ル、能初七尾城主前田安勝及前田良繼、中川清六郎光重、高畠織部定吉聞公救末森擊越兵大破之、長連龍以小兵進末森、受公之深感、而且怒且悔曰、吾屬雖爲可救末森之鴻命、狐疑猶豫不果最所恥也、不如卒兵拔勝山也、發七尾卒軍攻勝山、城主袋井隼人及將士多歸越中、因守兵遽騷皆遁走、城遂陷之、墮壞郭郭而歸七尾、或曰、天正十三年四月、石動山僧徒等、開城兵多赴越中、告之於七尾、因諸將急發陷之矣、以秀吉之檄書、考聞一老人所言、則此說不齊矣、○下略、末森ノ戰ニカ、ル、本月十一日ノ條ニ收ム、ナホ、加賀前田家譜異事ナシ、

○利家、能登石動山ノ守將青木善四郎ニ、兵糧料所トシテ、同國多根村ノ地ヲ與フルコト、八月二十八日ノ條ニ、成政、氏張等、能登末森城ヲ圍ミ、利家、之ニ赴援シテ、成政ヲ破ルコト、本月十一日ノ條ニ、氏張、能登ヲ侵サントシ、同國七尾ノ守將前田安勝等ト荒山、勝山ニ戰フコト、同月十四日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔越登加三州志〕

續纂餘考十

前田良繼君等攻勝山

九月上旬、一作八月、廿四日成政前月旭山ノ役ニ酬ント、諸老將ヲ集メテ、守寨ノ將ヲ定ム、俱利加羅ニ新塞ヲ構、佐々平左衛門、野々村主水ヲ守將トシ、其兵二千、同國礪波堡障、一作伊二、前野小兵衛守將トシ、其兵二千、同國阿尾城ハ菊池右衛門入道、其子伊豆守手兵千餘ヲ以テ守ル、同國森山城ハ、神保氏春、其子清十郎手兵四千ヲ以テ守ル、又能越ノ界ニ新寨ヲナシ、丹羽權平、伊太郡、成政ニ屬シ、二、石、越中境ノ城、魚津ノ城ニ所等ノ兵ヲシ、是ヲ守テ、能州七尾城ヲ鎮ユ、按ルニ、是下文ノ勝山カ、然ラハ袋井隼人等守ル也、丹羽モ、其中ノ一人ナラン、一書ニ、泊城ニハ、丹羽權平トアリ、可追考、此外此時同國城ヶ端ニ河地才右衛門、河地才右衛門ハ、今ノ松之助祖也、成政ノ家老ニテ、於古石ノ中流木、松浦所ノ城ヲ預リ、天正十門子波石出、才右衛門ト名付ラレ、四百石下、松根ノ岩ニ杉山主計吉祖、又增山ノ岩ニ輪兵各是ヲ置ト云云、此時長連龍ハ能州徳丸城、鹿島郡徳丸村、山ニ在テ、越中森山城、森一作寺、在射水郡、ヨリ神保氏春ノ襲フヘキヲ察シ、手將鈴木因幡、傳既在天正六年、ヲ守ラシム、因幡頓智ヲ以テ、館外ノ田間ヘ河水ヲ激入テ要害トス、果ノ氏春ノ越兵三千、荒山邊、鹿島郡、ニ出張シ、德善河原ノ岷屋、按ルニ、是今燒却ス、因テ因幡ハ疑旌ヲ樹テ、徳丸ヨリ後援有ヘキ形勢ヲ見スレハ、神保モ猶豫ノ軍ヲ却

ソケ、此トキ神保ヨリ畑甚右衛門等塘報トシ、畑セケルニ、因幡ヨリモ飯坂源右衛門ヲ斥候トシ、中途ニ行途、畑ト飯坂ハ兄弟也、擊ニ忍ヒス、飯坂ハ畑ヲ欺キテ、氏春此地ニ滞留アラハ、賀州ノ諸將四面ヨリ環擊セント

ノ計策アリト伴リ語ル、畑歸テ、氏春ニ告、氏春驚キ、軍ヲ擧テ却ツ、勝山在鹿島郡、註ニ要害ヲ構ヘ、袋井隼人ヲ天正十年、
 寘テ、森山城へ旋旆ス、此旨前田安勝君號五郎兵衛、國祖貴兄也、聞テ、急ニ勝山ヲ拔ント、前田良
 繼君號孫左衛門、景周按譜、安勝君男利好孫左衛門トアリ、時在七尾城、采地二萬石、聞テ、急ニ勝山ヲ拔ント、前田良
 繼君居七尾、後一萬三千七百七十石ヲ領ス、良繼ハ初名也、高島定吉、號織部、一萬七千石ヲ賜ヒ、石見中川光重號
 六郎、後二萬三千石賜ヒ、武藏ヲ首將トノ介士ヲ發シ、勝山ニ薄ツテ鳥銃ヲ連放ス、然レトモ堡主袋
 井能防キ能戰フ、良繼君、定吉等甲卒ヲ厲マシ、箭羽銃丸雨霰ノ若シトイヘトモ、寸歩モ却
 ソカス、既ニ城門ニ蟻結ス、守兵禦防ニ堪ス、城門ヲ開テ、突出奮鬪ス、況ヤ城將師源七時二十
 先進ノ、笠間義兵衛既見天、ト接鎗血戰ス、笠間右眼ヲ破ラレ、既ニ殺サルヘキヲ、田邊將監
 藩臣五郎左衛門祖、鎗ヲ捫ノ援來リ、源七ノ右眼ヲ刺、源七茫乎トノ進退ヲ失ヒシカ、又林三丞源七ヲ
 援來リ、將監ト苦撃シ、交搏ノ林殺サル、其卻ヲ得テ、源七城ニ引去ト也、斯テ越兵死力ヲ盡
 ノ距捍ストイヘトモ、氣ヲ得タル攻軍猛鋒當ル可カラサレハ罷弊レ、宗兵若干討レテ、堡中
 ニ引入、是ヨリ堡兵連遁多ク、僅ニ袋井、師暨ヒ山崎喜左衛門、石黒采女前註「采女以下十三人
 ノミ也、然レトモ敢死ノ義節ヲ守レハ、一以テ千ニ當リ、防撃愈ヨ切ニ、木石ヲ連投ノ止マ
 ス、時ニ星ヲ見ニ及ヘハ、良繼君解圍ノ七尾へ旋旆ス、

七尾諸將再圍勝山

九月同月、諸書日ヲ記サス、景周按スルニ、末森ノ役ノ後トアレハ十三日カ、秀吉公十六日ノ書中ニ、末森ノ戰ヲ賞シ、次ニ
 荒山、勝山乘取、首數多ク討取トアレハ、十三日ニ非レハ合ス、但シ首數多討取トアル書文ハ、當月上旬安勝君等

石動山ノ
僧安勝ニ
内通ス

勝山岩

荒山岩

コノ堡ヲ攻メシ時ノコトヲ
 結ヒ書シ玉フナルヘシ、嚮ニ勝山堡ヲ七尾ノ諸將攻ルニ、袋井隼人等固守ノ陷ス、然ルニ七尾
 ノ良繼君等、此タヒ末森ノ役ニ怠リシ恥辱ヲ雪カント議スル所ニ、石動山ノ内應僧ヨリ、勝
 山ノ守兵守山へ強半歸リ、堡中寡兵ナル旨七尾へ告ルニヨリ、安勝君及ヒ中川光重、高島定
 吉等兵子(七)ヲ率テ、再ヒ勝山ヲ攻ルニ、堡守袋井以下守山へ引取テ、此時殘卒僅カニ留リ守ル
 ユヘ、容易ニ攻取ト也、景周按スルニ、是ヨリ勝山ハ七尾ヨリ兼守スルカ、古傳ニ堡守ノコト見ヘズ、秀吉公ヨリ我
 〔越登加三州志〕三十三 能登鹿島郡故墟考五

勝山 勝山岩跡、蓋シ勝山トハ山名ニテ、芹川村領ニアリ、山上ニ本丸、二丸ノ遺跡僅ニ存在ス、荒山トハ別也、勿洞維、
高コト山麓ヨリ一町一間アリ、淺井庄井田村、二宮村トノ間ナリ、本城表可十四五間、亘可十間、二郭表可十六間、
可八間也、此山下ノ芹川村、天正十二年九月上旬、神保氏春勝山ニ要害ヲ構エ、其將袋井隼人ヲ
垣内ニモ勝山ト云名アリ置ヲ、安勝君父子等、七尾ヲ發メ是ヲ攻トイエトモ、袋井等ヨク防戰ノ陷チス、我諸將七尾
 エ歸ル、此後安勝君等、末森ノ役ニ怠リシ恥辱ヲ雪カント胥議ス、時ニ石動山ノ僧徒ヨリ、
 勝山守兵過半守山エ引取ト告ルヲ以テ、同月中旬、再ヒ安勝君等勝山ヲ攻ルニ、殘卒僅カ
 ニ守ルユヘ、容易ニ之ヲ取トナリ、按ルニ、此後七尾ヨリ勝山ヲ兼戍スルカ、一說ニ、天正十三
年六月、荒山岩エ、

越兵又來攻、城中寡兵、輒スタ攻取リ、首五六十ヲ
 得、燒城トアリ、按ルニ、是勝山岩ノ誤リナラン、
 荒山 荒山岩跡、蓋シ荒山ト云モ山名也、勝山トハ別ナリ、坊間印行ノ書ニ、荒山ノ勝山ナト、一堡ニ書タリ、非也、又
新山トモ書ス、天正十年八月十六日、佐久間盛政ノ書札ノ文ニ、石動山退治ノトキ、新山ト云古城温井、三宅取上候
トモ呼也、二方ハ射水郡小瀧村領也、此山ノ腰通リ芹川村ヨリ越中道是ヲ荒山越ト云、此荒山ヨリ北ノ方へ高低卅町

天正十二年九月十四日

二一六

計登レハ、石動山也、芝峠ト云モ、此間也、荒山城跡山麓ヨリ高コト五町卅一間アリ、官道ノ東二十六町廿間ニアリ、一説ニ、縦可十八間、横可十二間トアリ、能登越中ノ境ニテ高嶺也、又城廿間四方ト云、時代ニヨリ崩壞等モアリテ、遺墟變形アルヘシ、乙亥邑長書上ル處、遺迹鹿島郡ノ芹川、蟻ヶ原、射水郡ノ小瀧三村領トアリ、此三村ノ路又相合テ小瀧ニ越ル路アリト、此談最正シ、

天正五年、謙信能州エ亂入ノ時、七尾ノ畠山氏ヨリ、此荒山ニ要害ヲ構エ、鎮ノ兵ヲ置ト云、十年、石動山ノ衆徒等、國祖ニ敵シ、此堡ヲ興造シ、其未タ不全内ニ攻屠ラル事、詳本記、案ニ、此山事ニ臨テ敵ヲ拒ユル、自然ノ地勢アリ、平日居城トスヘキ地利ニハ非ス、

東馬場 淺井庄、今有東馬場村、堡跡今不詳、本朝三國志ニ作東番場、富山本ニ新川郡池田ノ古城ヲ一名東馬場ト云トナシテ當之、尤牽強ニ非也、或云、窪田館ハ尾崎村ニ在ト、可參考、東馬場、尾崎ハ驛村也、又此隣村水白村ニ甲塚アリ、

天正十二年、長連龍德丸城ニ在トキ、神保氏春ノ襲ヘキヲ察シ、鈴木因幡ヲノ、窪田館ヲ守ラストアリ、此窪田館ハ、東馬場ニ在ト、長氏家傳也、然レハ此館成ヘシ、

紀伊根來寺杉坊聖算、土佐長宗我部元親ノ弟香宗我部親泰ニ答ヘテ、尾張ノ形勢ヲ報ジ、之ト好ヲ通ズ、

〔土佐國古文叢〕七十

上書 根來寺杉之坊

以上

如芳翰之、未申付候處、預御音問、喜悅候、尤早々御報可申入之處、兎角打過候事、非本意候、

仍東國殿様、家康猶以御勝手之旨候、於時宜者可御心安候、爰許似合○香宗我部家證文、之儀被仰合ヲ相ニ作ル、

越、向後每事於御入魂者、可爲快然候、委曲空鏡之外、口上申渡候、恐々謹言、

九月十四日

聖笑(花押)

香宗我部左近太夫殿 御返報

右一通高知中山五郎太夫藏ス、凡テ廿二通ノ第廿二紙、

○元親、書ヲ紀伊根來寺ニ遺リテ、兵ヲ淡路ニ出サンコトヲ約シ、之ニ太刀、馬ヲ贈ルコト、六月十八日ノ條ニ見ユ、

十五日、子德川家康、河内國見山ノ保田安政佐久間ノ戦功ヲ褒ス、尋テ、織田信雄モ亦之ニ書ヲ與ヘテ、和泉出兵ヲ促ス、

〔譜牒餘錄後編〕九 諸旗本之三 一天正十二甲申年、長久手御陣之刻、保田久六郎織田信雄

卿被頼、紀州ヨリ人數を集、河州ヨリ出、國見山之城を築楯籠候、秀吉方ヨリ中村式部少輔一氏を泉州岸和田城ヨリ遣、三月ヨリ十月迄及合戦候、此時節從權現様被下候御書、於今私方ニ御座候、

右之寫

對神原小平太來札令披見候、仍河州表被打出、度々之一戰被得勝利之旨、無比類候、彌盡

天正十二年九月十五日

二一七

安政中村
一氏ト戦

神原康政

天正十二年九月十五日

二一八

粉骨、於被相稼候者、信雄御前之儀、聊も不可存疎略候、猶小平太可申候、恐々謹言、

九月十五日

家康公御判

保田久六郎殿○諸家感狀録、佐久間軍記所收ノ文書同ジ、

〔佐久間軍記〕 國見山戰場 附 長久手

追而染筆候、羽柴此中無事之儀、色々雖懇望候、一切無許容、此節可遂本意覺悟無二候間、其表之事、彌無油斷可被相勵儀專一候、北國表佐々内藏助一味至賀能及行、七尾城取巻、所々任存分候、於此様子不可有其隱、根來與雜賀奥郡自其方被申届、泉州表出勢肝要候、猶三浦駿河守方ヨリ可申候、恐々謹言、

九月廿三日

信雄

保田久右衛門殿

四月九日、家康公、長久手ノ合戦ニ打カタセ給フ間、秀吉、兵ヲ帥テ退給、家康公モ、大須賀康高、榊原康政ヲ小牧ニ留、遠州ニ還御ノ所ニ、秀吉ヨリ手ヲ入、秀吉公、信雄公和睦アリテ、十月廿日、伊勢國ニテ對面也、保田久右衛門安政ハ、國見山ノ城ヲ燒、亦根來ニ引籠、佐々内藏助成政ニシタカイ越中ニ行、

○家康、紀伊名草郡ノ諸氏及ビ根來ノ僧徒ヲ招キ、和泉、河内ヲ襲ハシムルコト、三月二

三浦駿河守

安政越中
頼ル
成政ニ
赴キ佐

十一月ノ條ニ、信雄、家康等、安政ニ書ヲ與ヘテ、紀伊根來衆ト事ヲ計ラシムルコト、四月四日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔武家事紀〕十四續集 中村式部少輔一氏

天正十二年春ヨリ秋ノ末ニ至マテ、紀州勢出張シテ、一氏カ兵ト相戦、ソノ頃佐久間久右衛門尉安次政、雜賀根來寺ノ衆徒ニタノマレ、紀州ニ居、根來ノ奥野大藏コミツチャ、其外勇名ノ士多引卒シ出張ノ、同年八月四日、河内國錦部郡天野山ノ上國見ト云處ニテ、一氏ト一戦ヲ遂也、其後關白秀次江州ヲ領シ、八幡山ニ在城天正十三年閏八月ノ時、江州水口城ヲ一氏ニ賜テ、秀次ニ屬ス、下略

〔前橋舊藏聞書〕三

一天正十二年八月、河内國天野山ニテ、佐久間備前ソノ比ハ久右衛門ト云テ、根來ノ奥野大藏ト云コミツチャ○紀州根來由緒書ニ、小道者トアリ、ナトヲ引ツレ、エホシ方ノ三人衆、中村式部少

トセリ合ノ時、○秀吉、河内烏帽子形城ヲ修築ス敵味方人衆ヲ立テ、カイモチ坂ト云所ニコミツチャ居タリ、エホシ方ヨリ杉ノ原三平、江川次右衛門ト云モノ先ニアリ、間三十間計ニテ、コミツチャ少シ高所ニ上テ名乗カケ、唯今カ、リ可申條、引トリ申ス不可ト云、中々引間布ト兩方申シ合ス、江川ハ、タラセ鐵之助ト云モノヲ師ニシ、鐵炮ヲナライ覺ヘケルカ、コミツチャヲ可打トテ、鐵炮ヲウツ、アヤマタス彼カ左ノ眉先ニアタリ、高キ所ヨリ打タラ

天正十二年九月十五日

二一九

根來ノ小道者

江川次右衛門鐵砲習フ
鐵之助ニ

天正十二年九月十五日

二二〇

シ、此方ヨリマイツタノト申ス、カ、ルコミツチャ立物ハ、五畿内紀ノ國ニカクレナキ
鯖ノ尾ヲ黒クヌリタルナリ、其マ、其胃ヲ内ノ者ニキセ、本ノコミツチャ居ノ處へ上ケタ
リ、扱ハ只今ノ鐵炮アタラサルト思イ、三平、次右衛門ヒカスルノ内ニ、コミツチャヲレヨ
リ右ニ少ノ谷合アル所へ立ノキ、三町計ノキテ、又道へアカレリトソ、功者ナルイタシヤ
ウナリトテ、ソノ比五畿内ニ沙汰アリシト也、

〔別續武家閑談〕

六

〔天正〕

紀州より柴田勝家が甥佐久間久右衛門、後備前守根來寺の衆徒、紀州邊の溢れ者共相催し出張

溢レ者

退却ト鐵
砲ノ利用

し、烏帽子形の三人衆、中村式部など、合戦の時、根來の小道者足輕六十人召連、先をい
たしけるが、退口に烏帽子形の衆喰付たり、敵味方の間三十間計有けるに、こみつちや申
けるハ、我等が退やうを若き衆見玉へとて、六十挺の鐵炮を二十挺ならべ、二十挺ハ三十
間計跡へしさりて立、又廿挺も三十間程しさらせて、以上三段に立、自身ハ眞先の廿挺を
下知して、貳段目迄引取、其所に自身計加わり残り居、鐵炮ハ三段目の跡へ備へさせ、二段
めを引取て、又四段めの跡へ足輕を遣し、自身ハ残りて三段めを引とらせ、順々に如斯な
しければ、敵したふ事ならず無異義ぞ引取ける、其比上方にて無類の退口と沙汰す、
○紀州
根來由

緒書、異
事ナシ、

蒲生賦秀、伊勢木造ノ木造具政ノ兵ト、同國菅瀨ニ戦フ、

〔勢州軍記〕

下

秀吉治世

一菅瀨合戦事 其後北畠具親扱戸木城、木造家不用之、其侍等時々打出蒨田、氏郷置軍兵於
諸所防之、若木造於出張者、可放相圖之鐵炮、自身出向可決勝負云云、同九月十五夜、木造
家侍田中仁左衛門尉、畑作兵衛尉、金子十助、中川勝藏、天花寺勘太郎、畑千次郎以下諸侍
下蔭合四五百人打出於小川表蒨田、下蔭蒨之、侍驚固之、氏郷衆在合其近邊諸侍地下人見
付之、打懸弓鐵炮、呼叫防之、木造勢同射弓放鐵炮、暫立黑烟、後亂合合鑓打太刀、戸木衆震
猛威追崩氏郷勢、討捕外池長吉以下之士卒、作勝鬨納勢於菅瀨也、氏郷在松嶋城、聞相圖之
鐵炮、即打出於門外、只吹螺不揃人數、纔卒小姓七八騎、諸勢者追々馳向也、外池孫左衛門
尉出向於小川、言上敵早退菅瀨、氏郷不聞敢直攻懸菅瀨、作鬨採合挑戰、岩田市右衛門尉、
舍弟平藏、岡儀太夫、舍弟半兵衛尉、小村彌五兵衛尉、菅沼助右衛門尉、野田龜進等、各提鑓
突懸、木造勢呼叫放弓鐵炮、氏郷鯨尾甲當鐵炮三也、外池駈塞矢面云云、其後木造勢見大將
欲討之、畑中、金子、中川以下聲々名乗、提鑓馳向、菱々合鑓、立炎打太刀、氏郷之鑓有鑓
疵數多云々、中川勝藏生年十八歳、與氏郷打太刀蒙疵也、雖然氏郷勢次第懸合爲七八十騎、
遂木造勢敗北矣、氏郷諸侍追討之、各究高名也、木造侍畑作兵衛尉、天花寺勘太郎、畑覺兵

天正十二年九月十五日

二二一

具政ノ兵
小川表ニ
刈田ス
賦秀ノ兵
之ヲ撃ツ
賦秀松ケ
鳥ヨリ出
撃ス

中川勝藏
賦秀ト太
刀打ス

具政出擊
賦秀既ス
兵ヲ撤ス

秀吉北畠
朝親ヲ賦
長野左京
亮八幡山

左京亮家
所殺次郎
信包八幡
山城ヲ守
岡金助ニ
與フ病死
ス

弟助進賦
秀ニ仕フ

天正十二年九月十五日

二二三

衛尉以下侍三十六人、都合百計討死、氏郷侍黒川西并田中新平以下討死、木造具康聞之、卒金子十郎左衛門尉、柘植左京進以下之諸勢、出向野邊之時、氏郷早依納勢無合戦云云、氏郷輕大將也、有運則勝敵、若失利則不大將之難也、

一木造小倭事 (天正十二年) 同十月下旬、依信雄和睦、木造家渡城越尾州也、依之木造分、小倭分屬信兼也、又秀吉以北畠具親被預氏郷、給有企 ○勢陽雜記ニハ、有無程早世矣、岡村修理亮、長野左京亮兩人被預信兼、給小倭也、長野 ○同書、山田野村に住シトアリ、作城於八幡山云云、岡村後改家所死去、其子清次郎亦任家所修理亮、外戚福田山帶刀 ○同書、眞見村に住シけるカトアリ、與長野左京亮不快也、故家所與長野亦不快、或時家所與長野於津往還之時、兩人逢半田神戸、互其鎧掛合、家所過之拔打斬長野也、郎等共防戰、長野之鎧持討家所也、長野雖剛者、數度企不義、依其報、今爲若武者之家所被討也、 ○同書、修理は半田村に入て切腹ストアリ、 其後信兼以八幡山城給守岡金助也、守岡無程病死、其弟守岡助進者在松嶋、兄金助病時、祈小倭權現、金助死後燒權現宮也、不知因果無道如此、雖然有艷心、元來守岡伊賀之者也、爲流牢往瀧川家望奉公、不濟往筒井家、是不濟守岡助進、瀧川ヲ頼ミテ行ド扶持モナシ筒井ノ水モクレヌ哀サ

其後行播磨、出羽柴家之故、被預氏郷云云、

〔勢州兵亂之記〕

一氏郷方々に軍兵を置、若木造出張せられ者、打果さんと支度す、折節

戸木ノ夜
合戦

九月十五夜、木造勢小河表へ苅田に出、其大將者田中仁左衛門尉、畑作兵へ、金子十介、中河庄藏等也、氏郷衆馳向攻戰て、外池長吉等討死す、此時相圖之鐵炮松ヶ嶋へ打續しか (はカ) 氏郷一騎懸こ馳向、木造勢菅瀬こ引 (取カ) 居たる時、氏郷付懸り合戦有、氏郷之侍外池孫左衛門尉、岩田市右衛門尉、同平藏、岡儀太夫、同半兵へ、菅沼介右衛門尉、野田龜進、小村彌五兵へ等直先を懸、各高名す、氏郷之甲にも鐵炮三ツ當るとなり、扱氏郷の勢次第に重りしかへ、終に木造勢破軍也、是戸木夜合戦とて無隱義也、同十月下旬、木造家無事こ成、尾州ニ退る、也、角て木造分、小山戸分、(伊後) 上野殿へ付也、

〔木造記〕

一其後北畠具親戸木之城を扱るといへとも、具康父子是を承引せず、猶在々を苅田して、城堅固楯籠、かくて氏郷松ヶ島道筋に軍兵を置、若木造勢出張せば、自身馳向、勝負を決すへき間、告知すへきとて、相圖之鐵炮、貝を置せける、然るに、九月十五夜、木造勢小川表の苅田に出ける、其大將には、田中仁左衛門、畑作兵衛、金子十助、中川庄藏にて、雑兵こ苅せて侍是を警固す、氏郷之侍其近邊こ有合せる者共、地下人を催、弓鐵炮を打掛ケ、是を防ぐ内、木造事も弓を射、鐵炮を放テ、暫黒煙を立て相戦ける、後こは亂れ合、鎧を合せ、太刀うちし、木造勢猛威をふるひ、氏郷勢を追崩し、外池長吉以下侍を數多討取、勝鬨を作り、勢を須ヶ瀬に納る也、氏郷松ヶ嶋之城にて、相圖之鐵炮、貝之音を聞て、人數を揃

天正十二年九月十五日

二二三

へて、若侍七八騎を卒、揉みにもんて馳來給ひける、諸勢ハ追々に馳來る也、外池孫左衛門尉出向ひ、小川こゝゐて、敵引退しよし言上す、氏郷聞もあへず、直に須ヶ瀬に攻掛り、関を作りける、氏郷之侍には、岩田市右衛門、舍弟平藏、岡儀大夫、舍弟半兵衛、小村彌五兵衛、菅沼助右衛門、野田龜之進等各鎗を提ケ、木造勢こ突掛り、呼叫ひ相戦ふ、木造勢畑、金子、田中、中川以下真丸こ成て、大將を目がけて、一足も不引退、鎗を合せて相戦ふ、氏郷鯨尾之甲こも鐵炮言當り、鎧丸鏝疵數多也、中川庄藏、氏郷と渡し合せて、太刀打し、疵を蒙るとなり、氏郷之助太刀田中新平と名乗て、庄藏と渡し合せて戦ひけるか、新平如何したりける、嘩と跪きけるを、頓て首を討取ける、されとも氏郷之勢次第こ掛合せ、竟に木造勢破れ軍に成にける、田中仁左衛門は、馬乘にて相戦ける、不叶と見て、畑作兵衛を我か馬之前こ乗せ、仁左衛門尻馬こ乗て手綱を取る、落合之淵を乗越、無難に引取なり、木造侍地原善五郎、遠山助左衛門、遠藤右衛門、大塚彌三郎、島貫作左衛門以下之侍、雜兵合三拾六人討死なり、氏郷之侍には、外池長吉、田中新平、黒川西弁以下數多討死なり、戸木之城とも此事を追々告來りしかは、柘植、海津、奥田、佐藤、河原田、朴木等一騎掛ケて馳向ひけれとも、氏郷勢を納により、合戦なし、木造方こも戸木之城引退也、

一奄藝郡一身田高田山專修寺御門跡大僧正堯慧上人戸木に來り給ひて、木造父子を宥めら

專修寺堯
慧ノ扱ニ

依リ木造
家無事

れ、扱を入給ふこより、木造家無事になり、同十月下旬に、左衛門佐具康父子戸木之城を退
出あり、織田信雄卿之御義、尾州清洲引被退也、かくて木造分、小倭分ハ上野介信兼引付
也、

一同十月廿日、足立清左衛門假初なから差出し、和睦之扱を取給ふ、信雄卿何之子細もなく
御同心也、秀吉公桑名表にて御對面あり、重て疎意有べからず之よし仰合され、秀吉公勢
を上方に納めたまふ、尾州表取出之城各引取之、又秀吉北畠具親を氏郷に預ケ給ふ、謀叛
之企有けれとも、無程卒去なり、

〔木造左衛門佐戸木籠城次第〕

○木造記 一 木造 戸木

一〇中 かくて九月十五日之夜こもなるに、城中より田中仁左衛門、畑作兵衛、金子十助、堀内
金右衛門、中川少藏など、小川表引田出、思ふ儘にかりとり、雜人ともにもたせ、只も不
退、鯨波舉、心靜に歸りけるか、道筋に兼て置ける相圖之鐵炮を松ヶ嶋引打續しかば、氏郷
只壹騎馳來り、木造勢須ヶ瀬迄引取居たりける所へ、氏郷耳入戦たまふ、近々等氏郷之者
とも馳かりけるほとに、木造勢度々返し合て戦ひ、寄手々々之透間を見て、行退んとしけ
る、氏郷之侍外池孫左衛門、岩田市右衛門、同平藏、岡儀大夫、岡半兵衛、菅沼助右衛門、野
田彦三を、小村彌五兵衛等眞先に進んで、高名仕けり、外池長吉ハ討死ス、中川少藏ハ寄立

朝親卒ス

にて有ける、見永前にて氏郷に渡し合、氏郷之馬のしり脇をきりけるところを、田中新平と名乗て、二人之間こ乗入、少藏と戦ひ、新平終申被討取り、又須ヶ瀬之内高橋と云所にて、氏郷と少藏出合、馬上よりなくりたまふに、少藏ハ手へんを少切たまふ、少藏きられながら、透間なく切て懸りける所に、黒川と名乗て、二人の間に乗入し程に、少藏頓而取て押へ、首をとり、二ツの首を捨もやらず、心靜に退きけるが、堀内金右衛門か下人こ行合、此首をことごとく持せけり、庄村之前にて又氏郷こ渡し合しかは、少藏頻に切て懸り、既に危くみへしか、氏郷いか、思われけん、鎧打上けて還りたまふ、少藏歩行武者にて可追付様も無し、立歸り首持せたる下人を尋けれとも、敵方へ被生捕行かたなし、是のみならず、氏郷之甲に鐵炮三ツあたり、千死一生之働、誠輕々敷大將にておしける、木造勢も爰かしこより、やう／＼引取ければ、具康安堵し、心地よけにうち見ぬ、城中堅固こ成にける、扱明てハ松ヶ嶋にて首持たる生捕之者を穿鑿しければ、黒川、田中の首なり、取たるものは何者そと生捕に尋は、中川庄藏と言ものなりと答けり、互にたれともしらすりけるか、扱ハ過夜、氏郷之三度まで渡し合たるハ、中川庄藏にてありけるよと、氏郷仰られしとなり、依て生捕之ものも、此趣を正藏にしらせよとて、たすけて戻し侍るほとに、木造方にもかくとはしらす、かゝる働は希代之高名とそ、敵も味方も感しけり、其後もせり合之戰有

て、木造之長臣大塚彌三郎も、庄村前て鐵炮にて被討けり、かくて寄手之大將談合して、いつまでかくはあるべくそと、諸手一度可攻とて、日限を極ける所こ、一身田之門跡變給ひ、十月下旬こ城を渡し、左衛門佐ハ此方之高一倍にて尾州に退かれけり、かくて木造分、小倭分は、上野介殿ノ旗下こ成にけり、

〔蒲生文武記〕

二 ○上略、賦秀、佐田城ヲ攻ムルコトニカ、ル、八月十四日ノ條ニ收ム、爰に五月十五日夜、木造か勢兵に、田中仁左

衛門、畑作兵衛、金子十助を大將として、小河表へ荻田に出ける氏郷家子に外池長吉郎と云者、鷹野場に行逢けれハ、追拂んとて馳向ひ、散々に攻戦けれ共、多勢に無勢なれハ、遂に打負、其身も討死しける、松賀嶋よりハ隔たりければ、其義を不知、鐵炮の音の聞けれハ、氏郷いかさま木造押寄來りつらんとて、鎧取て打掛馬に飛乘て馳出給へハ、木造勢ハ芳瀬に引取て息をつき居ける處、氏郷突懸戦ける、其内に氏郷の侍外池孫左衛門、岡山源内、菅根助右衛門、岡義太夫、岡嶋宗吉郎、野田龜之丞等一番に馳來り、主を討せしと立塞て戦ける、氏郷甲にも鐵炮二ツ三ツ當りけれ共、裏をハ不通、其間に次第に氏郷勢兵馳來り重て、木造か兵不殘討取けれハ、さらハ此威に木造を夜討せんとして押寄けれハ、不思寄衰なれハ、木造も一防もさへす、悉く敗北しける、木戸の夜合戦とて、今に無其隱と也、

〔蒲生軍記〕

三 木造軍之事

具政ノ兵
鶴飼ト號
シテ賦秀
ノ虛ヲ窺

賦秀月見
ノ宴席ヨ
リ直ニ出
馬ス

賦秀ハ常
ニ先懸ラ
好ム

天正十二年九月十五日

二二八

略^上八月十五日ノ事ナルニ、^(會カ)冨原ノ塞ヲ守レル上坂左門ガ方へ、木造左衛門佐ヨリ使者ヲ以テ、今日逍遙ノタメ河邊ニ出テ、鶴ヲ遣度候、其御心得有ベシトゾ云遣シケル、左門此由ヲ氏郷ニ告ケレバ、手ノ者二人遣シテ、木造ガ體ヲ窺セケルニ、戸木ノ士ドモ百餘人、嶋鶴ノ逸物二三十ヲ瀬々ニ放入テ、川ヲ上リニ遣ヒ、其日取タル魚ドモヲ、氏郷へモ賜ラレケリ、加様ニ外ニハ心ヲ寬シテ、内ニハ隙ヲ求ケレバ、敵今寄ベシト思ハジト、木造ガ兵二三百人松ケ嶋ノ領分小河ニ夜討シ、菅瀬ト云處ニ圓形ニ備ヘテ控タリ、常ニ氏郷下知シケルハ、木造若出張セバ、相圖ノ鐵炮三ツ放テト、兼テ定ラル、依之鐵炮三ツ放ツ、折節氏郷松ケ嶋ノ城ニ在テ、今宵ハ名ニヲフ月ナレバ、歌ヲ詠ジ情ヲ述バヤトテ、盃ヲ廻シ、一興ヲ催フサル、處ニ、相圖ノ鐵炮聞ヘケレバ、例ノ木造コソ出タレトテ、氏郷便殿ニツト入テ、鎧ヲ肩ニ掛、鎧提ケ走出、馬ヲ牽寄、乗ト均ク法螺ヲ吹立サセ、人數ヲモ聚メズ、軍到ヲモ整ズ、眞先ニ馳ラレケル、法螺ヲ聞テ、漸七八騎懸出ツ、キタリ、木造方ノ者ドモハ、氏郷常ニ先掛ヲ好メルナレバ、我撃ン人討取ント云處ニ、案ノゴトク、氏郷人衆ヲ離レテ進レタリ、敵是ヲ見テ、スハ大將ヨ、而モ小勢ナルゾ、此ニテ打洩シナバ、何ノ時ヲカスセント、眞中ニ取籠テ、追儼ノ豆ヲ飛スガゴトク、鐵炮ヲ放チ掛タレバ、氏郷ノ冑ニ鉛玉三ツマデ中リタレドモ、透ラザレバ手モ負ハズ、馬ハ名譽ノ逸足ナリ、乗手ハ希代ノ猛將タリシカバ、向敵ヲ突伏蹈倒シ、縱横自在

ニ相當ラル、外池長吉ハ深入シテ討死シ、外池孫左衛門良重ハ組討シテ、其首ヲ取テ見參ニ入ル、又木造ガ家人ニ隱ナキ金子十郎左衛門、中川左衛門ト云者ナリト、高聲ニ名乗テ、二人ナガラ鎧ヲ横へ、大將ヲ目ニ掛一文字ニ進來、氏郷是ト鋒ヲ合セ、左右ヲ拂テ突立レバ、金子、中川手弱成テ言葉ニモ似ズ引退ク、野田龜之丞、岩田市右衛門モ鎧合、味方追崩セバ、敵馬ヲ引返シ、是ヲ破レバ味方又備ヲ立直シ、兩方入亂テ戰ヒケルニ、味方ノ兵黒川、西田、大門等一處ニテ鬪死ス、赤佐隼人^佐、吉村助左衛門、結解駒之丞ナト云兵士、骨ヲ粉ニシテカヲ盡シ、各首數ヲ得タリ、岡半七^{後改半兵衛}、其比ハ、扈從タリシガ、能首取テ馳來ル、兄源八^{後改儀太夫}、十八歳ニテ畑作兵衛ト引組デ、上ヲ下ヘト返シケルガ、畑ハ聞ユル大力ニテ、源八ヲ取テ押付、既ニ首ヲ搔ントス、時ニ半七走來テ、助太刀打ゾト詞ヲ掛ル、源八下ニ伏ナガラ、此敵ノ首汝^カニセバ、無用ナリトゾ留メケル、後ニ聞人其壯志ヲ感シ、大膽者ト稱ス、半七畑ヲ一太刀切ト均ク、源八下ヨリ刎返シ、畑ガ首ヲ取タリケル、其隙ニ、味方ノ軍勢追々ニ馳加ハツテ、彌勇ミ戰ヒケリ、木造ガ從兵ハ、多ク死傷シテ疲レケレバ、遂ニ切靡ケラレ敗北スルヲ、追討ニ伐ホドニ、木造ガ頼ミ切タル兵ドモ四十餘人伐ニケリ、雜卒ハ數ヲ知ラズ、是ヨリ左衛門佐身ヲ護テ手痛キ戰モセザリケリ、

小山戸軍之事

天正十二年九月十五日

二二九

天正十二年九月十五日

二三〇

○上略、賦秀、口佐田ヲ攻ムルコト、又伊賀國ニ信雄一味ノ者有テ、賊徒等ヲ聚メ、壘ニ道路ヲ塞ト聞ニカ、ル、八月十四日ノ條ニ收ム、頃刻ノ間ニ一城ヲ屠リ、松ヶ嶋ヘゾ歸ラレケル、戸木ノ木造ト貞親トハ、叔父甥ニテアリケレバ、其後貞親又木造ヲモ説テ、和ヲ請ハント謀ラレケレトモ、一向返事ニモ及バズ、然ルニ戸木ハ、十月下旬マデハ、敵地ノ中ニ獨立シテ、屈スル氣色モ無リケルガ、伊賀、伊勢兩國ヲ氏郷ノ武功ニ依テ、一遍ニ靡從ヒケレバ、木造行末如何ナラント思處ニ、松ヶ嶋安濃津ヨリ和ヲ入ラル、ヲ幸トシテ、遂ニ同心シ、城ヲ避テ尾張國ヘ引退ク、木造今マテ援色ナク、孤城ヲ守テ、軍兵大敵ニ對ス、此度モ我ヨリ降ズシテ、名ヲ高シ、峻節ヲ全ス、貞親ハ武藝才覺有人ナレバ、氏郷當分酒茶ノ資用トテ、祿千石ヲ昇ラル、ニ、貞親隨分忠義ヲ盡シタルヨシ、秀吉ニモ達セラレ、領地ヲモ申賜ベキカト存ゼシニ思ノ外ナル哀カナトテ、辭シテ浪士トナリヌ、

〔多氣大正庵法會名帳〕○伊勢

蒲生飛驒守氏郷一味スル、天正十二年九月十五日、勢州松島ニ而死、

田中氏俊

田中仁左衛門尉氏俊 順道居士

清和源氏、新田末葉、木造勢ト攻合戰討死ス、

○賦秀、具政ト菅瀬ニ戰フコト、月日未ダ詳ナラズ、姑ク勢州軍記、勢州兵亂之記等ニ據

リテ、茲ニ掲グ、ナホ賦秀、岡村修理等ト伊勢口佐田、奥佐田ヲ攻ムルコト、八月十四日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔武家事紀〕二十二 續集 戰略 蒲生氏郷勢州戸木夜戰

コノ時氏郷兵士多戰功ノ者アリ、シカレハ小倭表無爲ニ屬ス、シカレトモ木造具康戸木ノ城ヲ堅守テ、度々苅田ニ出、足輕セリ合ヲカケテ、氏郷、信兼カ兵トセリ合テ、更ニ不屈、氏郷カネテ所々ニ足輕ヲ配リ、相圖ノ鐵炮ヲ置テ、敵出タランニハ、相圖ノ鐵炮ヲ可用、其音次第ニ、松島ヨリ出馬スベシト相定ム、木造具康ハ、氏郷勇ニ過テ、イットテモ諸卒ニ先立テ、一陣ニ乗出セハ、コレヲエリ打ニ可仕ト、約束ヲ定メ、九月十五日夜、木造カ兵田中仁左衛門、畑作兵衛、金子十助、中川庄藏、天花寺勘太郎、畑千次郎以下苅田ノ足輕大勢ヲ卒シ、警固ノ武士ヲ近所ニフセ置テ、月ノサヤカナルニ、曾原表ヘ苅田ノ働ヲイタス、相圖ノコトク、鐵炮ノ音キコヘケレハ、氏郷ノ兵我先ニト進來リ、苅田ノ兵ヲ追崩ス處ヲ、伏兵ヲキアカリ、大ニ力戰セシカハ、外池長吉、黒川、西、田中新平ナト云氏郷ノ勇士戰死ス、戸木ノ兵利ヲ得テ、菅瀬マテ引取ノ處、氏郷眞先ニカケ付、ハツカ手廻七人、敵菅瀬ヘ引取トキイテ、直ニ菅瀬ヘ押ヨセ力戰ス、岩田市右衛門群ヲ拔テカケ付、弟平藏、外池孫左衛門、後改信濃守岡儀太夫、同弟半兵

天正十二年九月十五日

二三一

衛、野田龜之進、菅沼助右衛門以下ノリツ、ケ來テ力戰ス、木造兵甚ハゲミ戰フ、外池孫左衛門、氏郷ノ矢表ニ立拒テ相戰、氏郷ノ冑銀尾、鐵炮三ヶ所アタリ、氏郷モ疵ヲ蒙トイヘトモ事トモセス、カケ立ノ戰ケレハ、木造兵ツイニ敗北ス、中川庄藏十八、氏郷ト太刀打ス、ソノ間ニ、松島勢大勢カケ付、同勢多ケレハ、木造方畑作兵衛、天花寺勘太郎、畑覺兵衛等合兵士三十六人ウタル、雜兵都合一百餘ウタレケレハ、早々戸木城ニ引取ル、此イキヲイニ直ニ戸木ノ城ヲ可責ナト、氏郷ノ若手ノ者トモイサミケレトモ、木造不廻時刻打可出、イソキ引トレト、功者トモ并氏郷下知ニヨツテ、早松島ヘ凱旋スル、如案、木造具康此戰ヲ聞テ、金子十郎左衛門、柘植左京進以下數十騎ヲ卒シ、松島宿城マテ押ツメ來ルト云ヘトモ、軍散シケレハ、不及力引退也、其後信雄、秀吉和睦アリケレハ、木造乃戸木ノ城ヲアケワタシ尾州ヘ越ト也、氏郷此比祕藏ノ馬稻妻、小雲雀ト云テ二疋アリ、小雲雀ヲハ、篠田勘介預リ、其夜勘介氏郷ノ前ニ居タリシニ、相圖ノ鐵炮鳴ケレハ、氏郷具足ヲ著スル内、小雲雀ニ鞍ヲキテ引出ス、氏郷稻妻ニ可乗ヲトイヘレハ、篠田キイテ、御目ノキカサルユヘ、腰拔ニアツケ置玉フユヘ、急用ニ不立ト云、アサ笑、若此時氏郷稻妻ニノラレンニハ、必定打死タルヘシトソ、コノトキ供イタセル者僅七人也、岩田市右衛門、同弟平藏ハ、松島ヨリ一里ワキ西ノ庄ト云所ニアリキ、傍輩菅沼助右衛門、小橋六左衛門、今村彌藏ナト來テ咄アリ、市右衛門ハ、奥

馬 賦秀ノ乘

ノ間ニウタ、ネ致有之、口ノ間ニ平藏トモニ四人ヨリフシ、平藏尺八ニテ、海道クダリヲ吹、今村其コウタヲウタフ、菅沼、小橋ハコレヲキ、居ケルニ、夜半比、カスカニ玉ノ音キコユ、口ノ間ニテハキ、不付ニ、奥ノ間ニテキ、付、只今キ、シハ鐵炮カトテ、早速具足ヲ著、馬ヲ引出サシメ乗ル、口ノ間ノ四人、今一度聞届可然ト云ヘトモ、市右衛門半途マテ出テ、可聞合トテ乗出ス、四人ノ者トモモアトヨリ出ル、市右衛門松島ヘハ不行、直ニ日比鷹ツカイアロキ、行ヲホヘタル道ヲノリ出シ、先ヘ出ケレハ、人ミヘス、サテハ我一番ナリト心易ヲモフ處ニ、銀ノ鯨尾冑先ニテヒラメクユヘ、氏郷ハトクニ出ラレタリト乃ノリ付、先ニテヲリ敷、氏郷モ、八幡我モヲリシクト云ヘリシヲ、岩田馬ノ口ニトリ付、如此時分アマリカブキ過玉フテハ、大事出來スルモノナリト、シイテ諷諫シテコレヲト、ム、氏郷敵ヲヲイ打、直ニ其場ニヲイテ、首實檢可有トイヘルヲ、岩田コレヲ諫メテ、急松島ニ凱旋セシム、此戰ニ外池甚五左衛門弓ヲ以テ敵ヲ多射スクメケル、鞍ノ前輪ヲ射ヌキ、殿ヲ鞍ニ射トチタル矢ヲ、木造方ヨリ送レリトソ、或云、此時、安田作兵衛モ岩田ト同功アリシト也、安田勘介カ事也、○上略、本書十、蒲生氏郷與木造具康戰于菅瀨ノ條、同十三、

蒲生飛騨守氏郷ノ條異事ナシ

〔武德編年集成〕

三十

○上略、八月十四日ノ記事ニカ、ル、

爰ニ於テ、戸木ノ城ヨリ葛原(會カ)ノ若蒲生家ノ上坂左方ヘ使ヲ立、今日ヨリ雲出川ニテ鵜ヲ遣ヒ、鮎ヲ取由ヲ斷ル、左文此事ヲ氏郷ニ達シ、問者一

兩人ヲ以テ、其虚實ヲ窺フ處、戸木ノ侍トモ並ニノ鶴功者トモ二百餘人、鶴二三十羽ヲ携へ、雲出川ヲ上リニ鶴ヲ遣フ事明日ニ至ル、

(八月)十五日、木造長正敵氏郷へ、鮎魚ヲ贈ル、斯ノ如ク、緩々タル形勢ヲ顯シテ、其夜城兵田中仁左衛門、畑作兵衛、金子十助、堀金右衛門、中川少藏、天華寺勘太郎、畑千次郎等小川表ニ至リ、思フマ、刈田引取處、近邊ノ地下入馳合ケレトモ、却テ散々ニ敗亡ス、兼テ氏郷、敵來ラハ速ニ火炮ヲ發スヘシ、炮聲ヲ聞ハ、忽松カ島ヨリ出張シ、一舉ニ鬪ヲ決スヘシト堅ク教令シ、今宵松カ島ニ於テ、氏郷名月ニ對ノ和歌ヲ詠吟スル所、小川ノ方ニ砲聲三箇度響キケレハ、忽鎧一縮シ、城門ニ臨テ螺ヲ吹セ、唯一騎出レハ、門外ニテ近習七八騎相繼ク、木造勢兼テ兵ヲ分テ、菅瀬口ニ伏置故、風ノ如ニ發ス、毎度氏郷群ニ超テ先登スル由ヲ知テ、火炮ヲ放ツ事兩脚ノ如シ、氏郷鯨尾ノ冑ニ玉中ル事三ツ、然レトモ良冑タル故、肌ヲ傷ハス、殊ニ氏郷ハ中堀氏ノ槍術ノ奥儀ヲ究メ、大坪流ノ馭法ニ達ス、是ニ依テ、駿蹄ニ策打テ、八方へ馳廻リ、或ハ鎧ヲ以テ當倒シ、或ハ鎌槍ヲ以テ突殪シ、殆ト勇銳凜々トノ向フ敵ナシ、深田六兵衛頻ニ諫レトモ聽ス、木造カ士中川少藏^{十八}、歩立ニ成、薙刀ヲ以テ氏郷ノ馬ノ平首ヲ斬ントス、時ニ氏郷ノ臣田中新平ハ、氏郷ト轡ヲ並へ働キシカ、中川ト戰テ遂ニ討ル、氏郷又菅瀬ノ高橋ニテ少藏ト出向ヒ、槍ヲ以テ少藏カ冑ヲ薙ト雖、猶頻ニ切蒐ル、黒川某立隔リ、是亦

賦流ハ中
堀流ノ槍
術大坪
ノ馬術ヲ
極ム

少藏カ爲ニ命ヲ失フ、庄村邊ニテ、少藏重テ氏郷ニ斬蒐ル所、氏郷駿馬ヲ飛ス、中川歩立ナル故、遂ニ至ル事能ハス、蒲生方外池惣左衛門良重強兵ヲ組討ニス、野田龜之進、岩田市左衛門、岡平藏、吉村彌五兵衛功ヲ勵ミ、外池長吉等戰死シ、菅沼助右衛門、結解孫之丞、赤座四郎兵衛^{後蒲生}、首級ヲ得ル、岡源八郎^{時二十八歳、後義大夫ト改ム}、畑作兵衛ト組テ危キ處、其弟半七重政^{後半兵衛ト改ム}、幼弱ニメ、能首ヲ取テ馳歸シカ、是ヲ見テ、畑ヲ一太刀斬ト均ク、源八郎勿返ノ、作兵衛カ首ヲ得ル、庄村邊ニテ、木造方大塚彌三郎、天華寺勘太郎等モ討レ、其外甲士四十餘命ヲ殞ス、然ル所ニ、彼刈田セシ者トモ馳集リ、殘兵悉ク城中ニ引入、死傷スル者ヲ算フルニ、雜兵二百餘ト云、

十六日、昨夜中川少藏カ得ル田中、黒川カ首ヲ、堀金右衛門カ奴僕ニ持スル所、渠ヲ味方へ擒ニセシカ、氏郷彼首級ヲ持セ、奴僕ヲ木造カ方へ返シ、中川カ功ヲ稱美スル事、敵ナカラモ甚厚シ、氏郷桑名郡繩生ノ砦ニ入テ衛護ス、

十六日、^己賀茂社、^丑羽柴秀吉ニ卷數并ニ青銅三百疋ヲ贈ル、是日、秀吉、之ニ答フ、

〔賀茂別雷神社文書〕^三 ○山城

就在陣祈禱之卷數并青銅三百疋到來、懇情祝著候、尙片桐^(真隆)加兵衛可申候、恐々謹言、

天正十二年九月十六日

天正十二年九月十七日

二三六

筑前守

秀吉 朱印

九月十六日

賀茂社

縫殿頭殿

兵庫助殿

○秀吉、賀茂社々家ノ物ヲ贈レルニ答フルコト、七月九日ノ條ニ見ユ、

十七日、庚寅羽柴秀吉、軍ヲ尾張ヨリ美濃ニ納メントシ、兵ヲ引カシム、尋デ、

織田信雄、徳川家康モ亦清洲ニ歸ル、

〔松雲公採集遺編類纂〕

百四十四
古文書部四十五

然者、此表尾州之内取出、下(奈良)下(梨)一宮後、桑田(河田)三ヶ所普請丈夫申付、は

や過半出來候、二三日中ニ兵糧米(同上)、玉藥以下并人數等四五千(同上)、宛入置、廿四五

六(同上)、日比(同上)岐阜迄令開陣、敵之様子見合、可隨其旨條、(同上)、於時宜者、可御心易

候、(同上)、九月十六日附、前田利家宛、羽柴

秀吉書狀、全文ハ本月十一日ノ條ニ收ム、

〔家忠日記〕(三) 九月十七日、(庚寅)敵陣くつろけ、ひきのき候、

廿七日、(己亥)家康清須迄御馬取入候、

秀吉下奈
良宮後河
田ニ岩ヲ
築ク

撤兵ヲ始

秀吉河田
ニ在リ

〔吉村文書〕

一肥前

書狀委曲披見候、此方不及見廻候、其地無由斷氣遣專要候、筑前未(尾張栗原郡)かう田(河)令居陣候、此表彌

丈夫ニ申付候、可心易候、猶追々可申聞候、謹言、

九月十八日

信雄(花押)

吉村又吉郎殿

〔譜牒餘錄後編〕

四十處民之下
大塚三郎右衛門書上

(附箋)
權現様御書寫、大塚三郎右衛門所持

來章披見候、仍此表之様子、替子細無之候、筑前者河田ニ陣取候、其元無由斷之由、肝要候、恐

々謹言、

九月十八日

御名乗御書判

吉村又吉郎殿

〔土橋文書〕

陸

芳墨披見、仍此表無事相究之旨、粗申成之通、依遠路定可爲其分候、依種々此中羽柴雖申理、

終不能承引候、外ニ取曖筋目も候ける、其段者計謀之子細歟、勿論於相卜者、如右約諾可爲惣

和睦候、依之從此方急度染筆候間、定可爲參著候、就中北國之儀以外令蜂起、兩度之合戦味方

天正十二年九月十七日

二三七

信雄ニ和
ヲ提議ス
佐々成政
兵ヲ擧ゲ

天正十二年九月十七日

二三八

得大利、前田失手候故、俄羽柴此表引取候、○佐々成政、前田利家ノ屬城能登末森、本月十一日ノ條ニ見ユ、然上其表行之儀不可有由斷候、此旨趣諸方ニ可被申觸候、猶使僧口上ニ相達候、恐々謹言、

九月晦日

信雄(花押)

土橋種治

土橋平丞殿

〔多聞院日記〕三十一 九月廿九日、

秀吉大坂ニ歸ルト云フ

一東國ヨリ國中彼勢唯今引了、筑州大坂へ歸了、

〔春日社司祐國記〕○春日神社所藏 九月廿八日、辛、

一今日和國衆陳ヨリ引之也、

〔當代記〕三 ○上略、秀吉、尾張下奈良ニ出テ、家康、清洲ヨリ重吉、應而秀吉令歸陣給間、家康モ清須エ入馬給、此度秀吉公人數八万六千ノ著致云々、又見及躰モ如此、信雄、家康ノ衆、纔一万ノ不

秀吉ノ兵八萬六千ノ衆ニ足ラズ

足ニ見エタリ、

○秀吉、美濃ヨリ尾張ニ入り、家康モ亦清洲ヨリ岩倉ニ出ヅルコト、八月二十八日ノ條秀吉、京都ヨリ大坂ニ歸ルコト、十月五日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔武德編年集成〕三十 (九月) 十七日、神君ノ御陣所ヨリ、大久保治右衛門忠佐斥候ニ出テ敵中

家康茂吉ニ陣ス

ニ乗入、輕兵ヲ蹴倒シテ、奴僕ニ其首ヲ取シム、今日神君八千ヲ帥テ、敵陳ヲ巡視シ玉フ、金ノ扇ノ御馬標鮮然タリ、是ヲ見テ、秀吉勢四萬五千餘何トナク混亂シ、崩レ靡ク、秀吉且怒リ、且勝難キヲ察シ、今夜陣ヲ退事數里、神君ハ敵ノ返リ討事ヲ慮リ玉ヒ、尙茂吉ニ堂々ト陣ヲ設ケ玉フ、

廿五日、秀吉上奈良村、大野村、川田村ノ三砦ヲ築キ終リ、軍卒ヲ入置、數日在陳ノ功ナク、軍ヲ大垣ニ收ム、

廿七日、神君、信雄トトモニ、清洲ニシハラク兵ヲ納メラル、

〔藩翰譜〕四中 治右衛門藤原忠佐は、平右衛門忠員か次男にて、七郎右衛門忠世の弟也、

○中 長湫の戦に、御使を承り、先陣にまじわりて敵をうち、頓て秀吉朝臣、僞て北畠殿と中直りし、又みつから四萬五千の軍勢を引卒して、樂田の邊に發向あり、徳川殿清洲の城にて、此由を聞し召、鞭鐙を合せて馳向ひ給ひ、先忠佐して敵の様を見せらる、忠佐一騎多勢の中にはせ入て、足輕の兵共、馬にてかけ倒し、下部等に首ひろひするを見て、敵大に亂れ立、徳川殿の御幟金、既に間近く見へ來れハ、一支もさへす、散々に成て逃走る、秀吉朝臣も、其夜のうち三里か程引退き、終に信雄と中直りをこそなされける、○下

蘆名盛隆、岩代示現寺嘯月院二年貢十駄ノ地ヲ寄進ス、

天正十二年九月十七日

二三九

天正十二年九月十八日

〔示現寺文書〕

○岩

朱印 (花押)

右那摩之郡下柴之内高松寺分七百廿疇、案樂寺分五百疇、白山めん田六百五十疇、天神めん田百卅疇、合而仁千疇之所年具八駄、河沼之庄よ田之内阿彌陀めん田年貢仁駄、兩所合而十駄之所、永代示現寺之内嘯月院に令寄進所也、於向後爲不可有相違、御判形申請所進也、仍如件、

富田能登守

天正十二年九月十七日

嘯月院に參

○盛隆、其臣大場三左衛門ニ弑セラル、コト、十月六日ノ條ニ見ユ、

十八日、^{卯、辛}上杉景勝、前田利家ト呼應シ、須田滿親等ヲシテ、佐々成政ノ屬城越中境ヲ攻メシム、是日、滿親、景勝ノ近ク越中ニ出馬スベキコトヲ、利家ニ報ズ、

〔青木文書〕

○越前

追而、任見來初雁^貳、進覽候、寔不顧左道躰候、已上、

二千疇ノ年貢八駄

富田能登守

成政俱利加羅ニ兵ヲ出ス

河口定左衛門尉

雖未申通候、一輪令馳候、仍佐々内藏助企逆心、^(俱利加羅)栗柄、小原口相働之由候之條、兼而被申合首尾、爲後詰越中向境之要害押詰、在々令放火候、從景勝以直書被申入候、近日此口へ可爲進發候、今般能加兩州堅固之御備、誠以御勇力不淺故、貴國當方被申談上者、佐々内藏可討果事不可廻踵候、從此方被差上候飛脚下向、才覺分を尾劔表秀吉公思召儀由、目出珍重候、尙巨細河口定左衛門尉可令演說候、恐々謹言、

九月十八日

滿親(花押)

前田又左衛門尉殿 御宿所

〔前田家所藏文書〕

古蹟文 徵六

雖未申通候、令啓達候、仍而佐々内藏助栗柄、小原口相働由候之條、當方被仰合首尾、爲御後詰須田相模守初而隨分衆數多令同心、越中向境之要害被押寄、在々令放火候、近日可爲出馬候、今般能加兩州堅固之御備、誠以御勇力難述昏面存候、貴國當方被仰談上者、佐々内藏滅亡眼前候、隨而前田又左衛門尉殿各以書狀申入候之條、可然様御取成奉憑存候、彌爰元時宜可御心安候、猶重而可申宣候間、不能巨細候、恐々謹言、

士肥美作守

九月十八日

政繁(花押)

天正十二年九月十八日

士肥政繁

唐人親廣

寺嶋信鎮

齋藤信言

神保昌國

成政ノ家
堀覺左衛門

成政ノ家
堀覺左衛門
與八郎堀
木中務増
境城ニ遣

天正十二年九月十八日

唐人式部大輔

親廣(花押)

寺嶋平九郎

信鎮(花押)

齋藤五郎次郎

信言(花押)

神保宗次郎

昌國(花押)

前田五郎兵衛尉殿 參御宿所

〔加能越古文叢〕

堀覺左衛門高名覺書

乍恐以書付申上候、

○中略、三ヶ條、末森合戦ノコトニ
カ、ル、九月十一日ノ條ニ收ム、

一其年之暮、下口ノ景勝働申付而、さかいの城加勢として、兄與八郎、ますき中務此兩人遣
し申候、小丸をハ與八郎請取申候、其下松の丸と申ハ、ますき請取申候、然處ニ、景勝せめ
申付て、ことく丸共とられ申候、去共與八郎小丸をハ持かため申付、ます木小丸

六日目ニ
開城ス

へつほみ申候時、ますき馬驗敵方へとられ申候、敵彼馬印ヲ指上色々わるくち申候付
て、とかく討死可仕と、我等共へ相斷申付而、兄堀三郎兵衛、私、ますきしうく三人、
以上五人突て出候へハ、ことく崩申候、去とも七八人こたへ申付、我等共三人彼者
共と戦申内ニ、ます木ハ馬印取返し、小丸へ引申候、我等共も引入候へハ、彼戦申者共つき
申付て、三度迄返し、せり合、小丸門ニ引入申候へハ、敵つよくつき、門の戸ひら互こ
し合申候、去共門を立きかせ候へハ、いひとへにことくつきせめ申候、其時迄ハ、
三百餘城の内に候へとも、其夜の内に、ことく落、上下二十七人にて、五日之間持候へ
共、終に後巻も無之故、六日めにわだんにいたし、城相渡申候、則くるべ中嶋にて、人しち
返しあい申候、其時之敵方壹人有澤采女と申仁、今以御家中ニ居被申候、御尋可被成候事、
以下數條今略寫之、

右如申上候、兄弟共餘多御用ニ相立申義候へハ、我等も御ふたい同事之者ニ御座候條、御
前可然様ニ被仰上、於被召出者、難有可奉存候、以上、

元和五年八月十六日

松平伯耆殿

右祕笈叢書載之、

天正十二年九月十八日

天正十二年九月十八日

二四四

三州志鞆囊餘考云、吾藩士堀與八郎ノ系譜ヲ按スルニ、與八郎父ハ、堀江源左衛門勝定ト云、與八郎ニ至テ、越中ニ行テ、成政ニ仕フ、成政、景勝ト迫合ノ時、境ノ城加勢トシテ、増木中務及ヒ堀與八郎、其弟三郎兵衛、同覺左衛門ト馳向ヒ、境ノ城ヲ固守シ、主從二十八騎ニ至ルマテ、四五日防戦ストイヘトモ、後援ナキユヘ、外郭ヲアケ退クトアリ、其後吾國祖ヘ仕ヘ、五百石ヲ賜リ、八王寺城ニテ戦死ト云、

平次按に、三州志所載の本文、全く右堀覺左衛門か元和五年の高名覺書と異ならず、此覺書及ひ堀系譜に據て、本條の文段を建たりしと聞ゆ、高名覺書ハ、實に證據とするに足れり、

政繁ノ家
臣舟喜治
部左衛門

本多安房守家士舟喜治部左衛門高名書

一土肥美作方(政繁)罷有候時分、越中ますやま上和田ヲ謙信(上杉)御破被成候時、下和田ノ川中ニ而、石井城助と名乗申者と鑓爲合申候、吉田助六郎と申者見申候事、

一越中境ノ城ハ景勝働之時、町曲輪之塀壹番ニ乗籠申候處ニ、敵待懸組申候、良久組合候ヘ共、終勝負付不申候時、唐人式部大輔内鑓中村と申者參、我等弟ニ而候間、くれ候へと申こ付て、中村出し申候、其ハ先懸仕、權平曲輪廣間之前ニ而高名仕、罷出候ヘハ、其ハ門ヲ立、

權平曲輪

久敷持申候、我等ハ首を持罷下、町外ニ而景勝之懸御目候ヘハ、一番首之由御意被成候而、御盃被下候儀、有澤委被存候事、

右ハ元和二年十二月の書面也、

按に、權平曲輪ハ、丹羽權平か守れる郭也、前田創業記に、成政令丹羽權平等五百人守境城とあり、三州志古墟考ニ、權平ハ長田三十郎ノ子也といへり、

山崎長門家士野上甚五左衛門高名書

一私生國越中、先主齋藤(信利)二郎右衛門城尾ニ有之時、飛驒越中ノ堺猪ノ谷と申所ヘ、敵しほやと申仁大將仕罷出有之時、二郎右衛門はせむかい合戦仕候時、一番鑓を合申、則しほや責ほろほし申候、其時之仕合、彼所(高橋カ)の共并齋藤喜左衛門と申もの、于今越中ニ有之、能存申候御事、

一其後國中内藏助殿悉御手こ入申時、私主ノ二郎右衛門ニ、能登越中ノ堺内山と申所の城ヲ御預ケ被成候、其時内藏助殿被仰候ハ、野上甚五左衛門義、二郎右衛門所ニ有之も、御扶持同前ニ候ヘ共、自今以後ハ、内藏助殿御手まはりニ可被召置候、則二郎右衛門かたへも、其通被仰遣候間、罷出候やうこと、我等かたヘ被仰下候、自然私異義申こゐてハ、我等親并

野上甚五
左衛門
齋藤信利
ニ仕フ

天正十二年九月十八日

二四五

成政甚五
左衛門津
シテ小守
シム

越後落定
網秋山水
ノ城ヲ攻
ム

天正十二年九月十八日

二四六

妻子御とらへ候て、御せいはい可被成候由被仰出こ付て、二郎右衛門此上之義ハ無是非事
候間、内藏助殿、私ヲ進上申し、其方内藏助殿へ被召出、津田與兵衛と申仁こ被指添、小
津ノ城被遣候、其時者堺ノ城越後より持候て有之こ付て、夜込こ押懸一番首ヲ討取申候
御事、

一其後堺ノ城内藏助かたゞ持候て有之時、越後(番)おつる水の城主秋山(定綱)と申仁、堺へ夜こみに押
懸申時、さかい町口こおゐて、兩三度之合戦之時、大將の秋山ヲ馬上かつき落し申候、然共
味方負軍こ付て、悉ク城ヲ明、或は狭間をくゞりかけおち申候へとも、私兄弟三人、今井傳
五と申者、上松大膳主從四人、以上八人ハ、堺上口ノ木戸ヲ開き、しつくと罷退申候、右
之せうこ長谷川宗左衛門、藤卷三右衛門と申者、于今さかいこ有之、能々存申候事、
右ハ寛永八年五月の書付也、

按に、右野上甚五左衛門の書付こハ、越中堺ノ城佐々成政方こ持けるを、越後より攻け
るにより、明渡したる事を載たるも、天正十二年の九月、景勝取巻けるこより、城兵ハ夜
中悉く落行、僅に上下廿七人相殘、遂和談をなし明渡すと、堀覺左衛門か書付に載たる
時の事にて、野上甚五左衛門兄弟以下八人、堺上口の木戸を開き、しつくと罷退くと
いへれと、是も彼堀覺左衛門か書付に載たる、三百餘の城兵夜の内に悉く落行とある城

境ノ關所

境記

兵の中なるへし、さて右堺上口の木戸とあるハ、今いふ境村の事にて、上口の木戸とハ、
所謂國境の柵門にて、後にハ境の關所と稱する關門ならんか、右之せうこ長谷川宗左衛
門、藤卷三右衛門と申者、于今さかいに有之能々存申と、彼書付に載たる長谷川宗左衛
門ハ、即ち堺關守の元祖也、藤卷三右衛門か子孫ハ、今境村に御坊三右衛門と字する者、
即その後孫也といへり、抑境村の關門ハ、此地越中、越後兩國の境界なるにより、いと上
代より、國界の關塞ありたる事、古今の軍防令などにて知られける、さて中古の事ハ詳
ならずといへとも、此地に持傳へる境記といへる一冊あり、此記を見るに、昔亂世の頃、
此地に關門を建置、國界の縮とす、其比越後國府竹内庄の浪人長谷川宗左衛門と云者、
諸國武者修行に出、此地に來りけるに、關門の爲にかくまひ置、境村に客分と成、寓居し
ける、然るに慶長年中、利長卿富山御在城中、境村の長百姓を召さるこ付、長谷川宗左衛
門ハ武勇といひ、才發者なるか故に、名代に遣しける、宗左衛門富山へ伺公せしに、西尾
隼人を以御尋こハ、境の地に、從來關門を建置義ハ如何、委く可申上との事也、宗左衛門
承り、境關塞ハ、往古より在來候處、近く天正十三年に御改之後、彌關所と相唱、往來の
歷々方へも押立、關所と申事こ相成旨、明白に御答申上罷歸處、其年の秋、再び富山へ被
召、先達而の答方委曲被聞召候、依て宗左衛門(義)、則關守こ被命、家録賜り、其子宗兵衛

天正十二年九月十八日

二四七

成政越中
國境宮
崎城宮
景勝城
黒部兵
上流ノ
出

宮崎ノ城
下篠川ニ
戦フ

天正十二年九月十八日

二四八

も關守相勤處、利常卿薨逝後、萬治三年八月十日、宗兵衛及息男宗左衛門、伊左衛門金澤
こ割腹被命、五歳の末子壹人境こ於て殺害被命、長谷川氏斷絶す、

〔景勝一代略記〕

一越中國佐々内藏助天下の御下知を背、能登、加々へ罷向、此由相聞へ、
能登、加賀御助こ、越中へ御出馬被成、然處彼國境宮崎と云城有、内藏助入念拵、海表甘間
計石垣付出、海道を門の中へ仕入たる間通用ならず、城の後大山を三千餘被遣、兩方も可
被責との儀也、大山を越入々々、安田上總、藤田能登、村山安藝、須田相模、山浦源五殿、山
本寺殿、河田攝津守、長尾平太、吉江與太郎、齊藤三郎兵衛、柿崎彌二郎、高梨薩摩、本庄豊
後、松本左馬、山岸右衛門、竹俣筑後、秋山伊賀、須加修理、此外御簀本衆よこ目として卅
騎、都合三千餘大山に分入、彼所嶮難の間馬足不叶、皆かちたちにて馬をハ引せ、馬をハに
なふ様こノ通、山の中四十里計引過、黒邊川(部下同シ)の水よなみ山崎と云所へ下、其所人皆逃一
人もなし、折節洪水して、敵來事思もよらす、一日野陣也、在々放火して、十月廿七日、濱の
手へ廻、扱宮崎城へ推寄、城より取下、麓の篠川前こ當、爰を專と戰、てつ炮雨のふるこ
く也、然處、上總介、長尾平太、河田攝津守眞先に川をのり渡、味方つゝいて責入、敵不叶山
をのほるに、逃上ル山さかしけれハ、引おとし討ほとに、纒こなりて城へ入、味方つゝけ共
本城計こノ、へい一重にとり詰、又御本陣も御馬を寄られたる、其夜寅卯刻も新手入かへ

伊賀須賀山
修理等ヲ
シテ宮崎
シニ在番
ム

責給ふ、次日已刻落城也、大將三輪權平生捕、在所へかへり、汝か主様にかたり候へとて命
を助、黒邊川迄送ける、扱再興被成、秋山伊賀、須賀修理在番被仰付、御納馬也、
○利家、直江兼續ニ答へテ、境城攻略ヲ賀スルコト、十月五日ノ條ニ見ユ、

〔参考〕

〔越登加三州志〕

十 變餘考十

土肥政繁攻境城

冬十月中旬、日不詳、若クハ、上杉景勝、此時屬、秀吉公、成政ヲ討ント、越中ニ出張、
是今年九月、成政、秀吉
公ニ反スルユヘナリ、土肥

美作守政繁先鋒將トシテ、政繁、此時、境城、在新川郡、佐々ノ、ヲ攻ム、此時土肥ノ手將有澤采女、
今我藩
臣ノ有

澤數馬、朽屋半右衛門、子孫在越前福井、各敵首ヲ取、因テ成政ノ援將眞杉中務、眞杉或作益木、當時藩臣
増木仲平ノ系譜ニ不見、
等ノ祖、朽屋半右衛門、號五大夫ト云、

堀與八郎來テ城ニ入、當時藩臣與八郎ノ祖、系譜ニ、佐々成政越中退ク後、國祖ニ仕へ、五百石ヲ賜リ、八王寺城ニ
テ戰死ト云、(實註)別本注文ニ云、當時藩臣與八郎系譜ヲ按スルニ、父ハ堀江源左衛門勝
定ト云、與八郎ニ至テ、越中ニ行テ、成政ニ仕フ、成政、景勝ト迫合ノ時、境ノ城加勢トシ、増木中務及ヒ堀與八郎、ソノ弟

三郎兵衛、同覺左衛門ト馳迎ヒ、境ノ城ヲ固守シ、主從二十八騎ニ至ルマテ、四五日防戦ストイヘトモ、後援ナキユヘ、外
郭ヲアケ退クトアリ、但シ此文ニ所謂ル戰時ナルヘシ、然レトモ政繁猛攻ノ矢石ヲ避ス、外城ヲ破テ、牙
其後國祖ヘ仕へ、五百石ヲ賜リ、八王寺城ニテ戰死ト云、

城ノミ存ス、故ニ守兵三百一夜ニ散シ、義兵僅カニ二十七人殘テ、守防スルコト五日、然レト
モ成政ノ援兵踵到ラスノ支持叶ハス、竟ニ城中ヨリ人質ヲ出ノ和ヲ乞ヒ、城ヲ去、黒部川ノ
中島ニテ、質ヲ相返ノ退ソクト也、此事見土肥家記、景周、藩翰譜ヲ讀ニ、天正十二年景勝八千人ニテ、十月廿
國太平記ニ、今年九月廿六日、景勝越中へ發旌、佐々ノ幕下益木中務丞ノ宮崎城ヲ攻ム、時ニ、益木ハ城ヲ守リ、三輪權平
出門奮撃シ、河田攝津ニ討ル、然レトモ固守ノ城陥ス、藤田能登守上杉、益木ノ女婿タルヲ以テ、景勝即チ藤田ヲ益木ヲ

天正十二年九月十八日

二四九

宮崎泊及
ノレモ境ハ何
地トモ一

天正十二年九月十八日

諭シ、城ヲ退去セシメ、景勝近郷ヲ放火シ、越後へ歸旗ストアリ、今之ヲ考ルニ、諸書ノ載スル者、月日及ヒ其它小異アリトイヘトモ、三亥皆一事ナラン、宮崎城、境城ハ一城ノ異名也、泊城ト云モ亦同域也、是ヲ以テ愈ヨ此コト各條別段ニアラサルコトヲシル也、

〔越登加三州志〕

越中新川郡 故墟考二 宮崎 或作宮崎、或作荒山、境 但シ境巴岩ト云ハ是

景周按、三名一趾也、在三位郷、狹見ノ輩各名ヲ立テ、別址ト分出ノ書記アリ、譌レリ、予多年ノ考訂ヲ以テ刊定ス、今本丸ト呼所方可十間、自是九尺許卑ノ廿間ニ廿間許ノ平地アリ、之ヲ土人本丸ノ外郭ト呼フ、此所ニ方二間ノ矢倉臺トミヘテ、四五尺高キ石垣存ス、又此外郭ヨリ六尺卑ク東へ押回シ平地アリ、此所ニ古ヘ有井ト、今ハナシ、此東南皆百間許ノ深壑也、自東北間臨境町、境浦、又本丸ノ西北間ニ、二九跡トテ、本丸ヨリ二壇低ク、十四五間ニ十七八間ノ平地西南へ押回ヲアリ、此南ハ亦斷壑二百尋ト云、是ヨリ脚下ニ泊驛ヲ下臨ス、又二丸ノ西續キニ、三四尺卑ノ十五間ニ五間許ノ平地アリ、自是又三尺許高ク、廣式趾トテ、廿間ニ十間ノ平地アリ、其西ニ篠川流ル、宮崎村鹿島神社ハ、北西ノ北ヨリニ當ル、自泊驛北城山マテ可五十町、城山ノ後ヲ鷲尾平ト云、此古城ハ、文化七年四月、長屋左近ニ内囑ノ正之者也、越中古城記ニハ、本丸東西十八間、南北廿間、二丸方十四間、三丸廿六間、三方絶壑高コト八十間許、後ハ篠川尾ニ至ルト云、○越中古城記以下別トアリ、北越太平記ニ、境川巴岩迹載ス、是ハ境ノ切通邊ノ小山ト方人傳言ヌ、今此處ヲ丸山トモ云、今ハ岩跡トモミヘス、○中略 天正十二年、土肥美作守

境城ヲ攻ユヘ、成政、丹羽權平へ眞木中務、堀與八郎ヲ加フレトモ、攻衆強ク本城一堀トナ

リ、其後援兵ナケレハ、守兵離散スルヲ以テ、和ノ退城ノ事、土肥家記ニ見ユ、此事北國太

平記ニモ載出ス、又成政、丹羽權平ニ五百人ヲ副テ守ラスト、驛路記ニ見ユ、此記ハ、淺加通郷

見開集、權平ハ長田三十郎子也、信長公ニ仕フ、尾州犬山ニテ、父三十郎討死ノ時、幼稚ナレハ、母ト共ニ成政ニ屬

シ、母方ノ丹羽ヲ姓トシ、境魚津ノ城ヲ守ル、天正十六年ヨリ國祖ニ任ヘ、百口ノ秩ヲ賜ヒ、慶長十一年卒スルナリ、又

前野小兵衛ヲ置トモ云、○此事以下別本ニヨリ補入セリ、我封内ト成テハ、高島織部ヲ置セラル、一説、本丸ニ小塚

〔北國太平記〕

十 秀吉使者來越後事

木村作左衛門ヲ置、又説、中川八郎右衛門ヲ置ト云、○以上三十四字別

爰ニ上杉彈正少弼景勝ハ、勇威盛シニ、謀略勝レタル大將ナレバ、羽柴筑前守秀吉モ、何トゾ

和睦ヲナサント、年來思慮ヲ様々ニ巡ラサレケル、然ルニ、越後ノ國柏崎ノ妙樂寺ハ、日蓮

宗ニテ、大智識ノ聞ヘ世ニタカシ、左ルニヨツテ、大守景勝ニ遇セラレ、出陣ノ時モ、六具ヲ

シ、日蓮上人ノ自筆ノ曼荼羅ヲ差物ニシテ、供セラレシコト數度ニ及ビ、武道モカタノ如ク

功者ニテ、斥候ノ見積リナンドニテ、譽レアリシコト二三度ニ及ベリ、殊更言語明ラカニシ

テ、理ニ昧カラザル僧ナリケリ、是ニヨツテ、景勝他國ヘノ使者ナドニ、數度指遣ハサレシト

カヤ、羽柴秀吉此コトヲ傳ヘ聞、妙樂寺ニ和睦ノ儀ヲ頼マレケル、其ユヘ近年妙樂寺和睦

ノ儀ヲ取ハカラレシカドモ、景勝ハ、故謙信逝去ノ比マデ切從ヘ玉ヒタル國々、既ニ十ヶ國ニ

及プト云ヘドモ、入道謙信逝去ノ後ハ、或ハ織田方ニ屬シ、又ハ叛逆ノ輩ガタメニ押領セラ

レ、未ダ五分一モ景勝ノ手ニ屬セザルニ、當時天下ニ威名ヲ發セル秀吉ニ對シ、和睦ヲナシ

入魂シテ、其後隣國ヲ始メノ如ク切從ユルトモ、世人景勝ガ武略ニテトハ云ハズシテ、秀吉

ノ威ヲカリテ、景勝ガ隣國ヲ伐治メタリナンド、ゾ云ハンズラン、是後代マデノ恥辱ナリト

テ、曾テ許容シ玉ハズ、然ル處ニ、秀吉又妙樂寺ニ木村彌一右衛門尉ヲ差添テ、上杉家へ遣ハ

サル、兩人天正十二年九月上旬、春日山へ來テ申ケルハ、内々申入候儀、是非トモ御同心候ヘ

カシ、猶モ秀吉ガ心中ヲ疑ハシク思召レ候ハ、自ラ其地へ罷リ越候テナリトモ、心事ヲ申

天正十二年九月十八日

木村清久
妙樂寺ト
共ニ使ス

秀吉妙樂
寺ヲシテ
景勝ニ和
ヲ講ゼシ

述ベク候、秀吉ニ於テハ、聊カ疎意ニ存ゼズ、無ニ申合セタキ心中ニ候、今ヨリ水魚ノ思ヒ
 ヲナシ玉ハラハ、大慶何ゴトカ是ニシカン、心中僞ラザル處ハ、熊野ノ牛王ニ起請文ヲ書遣
 ハシ候旨、申越シ候トテ、起請文ヲ出シケル、木村重ネテ申ケルハ、隨ツテ御隣國ニ罷アル
 佐々内藏助成政ハ、故信長公ノ厚恩ヲ受ナガラ、明智誅伐ノ弔ヒ合戦ニモ上洛仕ラズ、其上
 秀吉西國ヨリ馳登リ、光秀ヲ攻滅シ候ヘドモ、某ニ對シ、一往ノ禮儀モ候ハズ、其ハ兎モ角モ
 候ヘ、主君信長ノ息男數多候ヘバ、早速上洛仕ルベキ處ニ、信長生害ヲ却テ悦ビ、或ハ三七信
 孝、柴田勝家、瀧川一益等ニ與シ、又ハ信雄ト心ヲ合セ、秀吉ヲ失ント相議リ候ナリ、去年天
 正十一未ノ正月、勢州ニ發向シ、瀧川ガ武威ヲ碎キ、長嶋一城ニ追込候處ニ、柴田勝家江州へ
 出張仕リ候ヒシ故、賤ヶ嶽へ馳向ヒ、一戰ヲ遂勝利ヲ得、直チニ柴田ガ居城越前ノ北庄ニ押
 寄、誅戮ヲ加ヘ畢ヌ、佐々モ罪科同ジケレバ、討伐仕ラント存候、成政定メテ隣國ヲ便リニ、
 御加勢ナドヲ乞候ハンカ、御同心是ナキヤウニ、一向頼存候トノ哀ニテ候ト演説ス、景勝聞
 玉ヒ、越中へ援兵ヲ出サンコトハ、秀吉ノ宣フマデモナシ、其子細ハ、去々年ノ夏、景勝ガ家
 人共、魚津ニ於テ自害セシコト、秀吉ニモ聞及ビ玉フベシ、佐々モ其寄手ノ内ナリシ、然レバ
 其弔合戦ノタメ、早々越中へモ發向スベキ處ニ、信州へ出馬シテ、北條ニ對陣シ、或ハ新發田
 へ相働キ、又ハ佐渡へノ出勢、是等ノ哀共ニ計會シ、斯遅々ニ及ブノ段、心外ノ至リナリ、願

ハクハ、景勝ガ武略ヲ以テ討從ヘタク思フナリ、其故如何ントナレバ、元來越中ハ父謙信入
 道ノ切取レタル國ナレバナリ、然レドモ佐々ガ不義委ク仰越レ候上ハ、秀吉ノ働ヲ抑ヘ申サ
 ンモ如何ナリ、左アリトテ、景勝ガ越中へノ發向ヲ止メンモ難儀ナリ、其故ハ景勝ガ越中へ
 討手ヲダニモ差向ズ、秀吉ニ渡シタリト、諸人ノ舌頭ニカ、ランコトモ口惜シ、所詮此上ハ、
 越中へ進馬セシメ、當家ノ弓箭ヲモ木村ニ見物セサセ、上方へノ土産トナサシメ、其上ニテ、
 羽柴殿ニ渡スベシト宣ヒテ、越中發向ノ陣觸ヲゾナシ玉ヒケリ、

上杉景勝越中發向、附南部尾井庄邊合戦事

斯テ上杉景勝ハ、越中へ發向アルベキタメ、藤田能登守信吉ヲモ、佐渡ノ國ヨリ呼取レヌ、藤
 田ガ此時ノ合備ハ、越後組ニテ松本、中城、齋藤、垣崎、新津ナリ、檢使ハ大石播磨守トゾ聞ヘ
 シ、此度ハ諸陣トモニ、越後組計リヲ以テ備定メアツテ、同キ十月二十三日、都合八千餘騎ノ
 軍勢ヲ帥ヒテ、春日山ヲ首途セラレ、越中へ發向アル、長濱、有馬川ヲ過テ、名達へ移リ、浦本
 へ取リツキ、隋水ヨリ左ノ山ノ手ヘツキ、往還ノ切所ヲバ妻手ニ見テ押通シ、同キ二十六日
 ノ巳ノ尅内藏助成政ガ幕下益木中務丞ガ宮崎ノ城へ押寄ラル、大將上杉景勝ハ十町計北ノ
 方ニ境川ヲ前ニ當テ備ヲ立、此所ニ牀机ヲ居玉フ、先鋒藤田ガ備ニテ、東ノ山ノ壇ヲ抑ヘサ
 セ、河田攝津守カ一備ヲ以テ、藤田ガ陣ノ後ヲ廻リ、南部尾井ノ庄マデ、民屋ヲ放火シ相働

景勝越中
 フ征セン
 トシテ藤
 田信吉ヲ
 佐渡ヨリ
 召還ス

ク、是ハ敵定メテ味方ノ勢不知案内ニシテ、敵地深ク相働クダニアルニ、剩ヘ微勢ナリト見
 謾リ、士卒ヲ出スベキハ治定ナリ、其時多覆々々ト僞引出シ、手強ク合戦ヲ挑ムベシ、然ラバ
 城ヨリ加勢ヲ出スカ、引取カ、二ツノ内ヲバ泄ベカラズ、引取ラバ頓テ付入ニスベシ、若又加
 勢ヲ出サバ、藤田カ勢ヲ以テ本丸ヲ乗取ベシトノ術ナリ、河田攝津守ガ備ノ檢使ハ、大石源
 之允ニ下知セラル、去程ニ河田二百餘ノ士卒ヲ從ヘ、宮崎ノ東ノ山ヲ打越テ、南部尾井庄ニ
 亂入シ、民屋ニ火ヲ放ツ、是ヲ見テ、案ノ如ク宮崎ノ城中ヨリ、益木中務丞ヲ本丸ニ殘シ置、
 三輪權平八百餘ノ士卒ヲ將ヒテ突テ出、河田ガ勢ヲ追カクル、河田ハ兼テ七百餘ヲ三段ニ備
 ヘ、五百餘ヲ山ノ手ノ松柏生ヒ繁リタル陰ニ隱シ、態ト河田ハ喰留ラレタル躰ニモテナシ、
 取テ返シ、越中勢ト相戦フ、城兵ハ勝ニ乗テ、前後ヲモ辨ヘズ、左右ヲモ考ヘズ、一人モ殘サ
 ズ討取レト、入替々々戦フタリ、山ノ手ニ隱レ居タル越後勢、時分ハヨキゾト云フマ、ニ、越
 中勢ノ後ヘ廻リ、三輪權平ガ旗本ヘ切カ、ル、流石ニ越中勢モ物馴タル者共ナレバ、暫ク踏
 泳ヘ、軍勢ヲ兩方ヘ押分テ、曳ヤ〜ト喚キニ喚イテ戦ヒシカドモ、敵ノ勇氣ニ碎カレ、聚散
 離合ノ變術モ、今ハ既ニ叶ヒガタク、辟易シテ見ユル處ヲ、河田攝津守采牌ヲ打振、士卒ヲ蹴
 立、勝利ハ偏ヘニ此時ナリト、味方ヲ勇メテ、三輪ガ備ヘ突テ入、千變万化シテ相戦フ、河田
 大剛ノ勇士ナレバ、西ヨリ東ヘ馳通り、北ヨリ南ヘ驅靡ケテ戦ヒシカ、三輪權平ト互ニ馬上

ニテ渡シ合セ、暫シガ程戦ヒシガ、終ニ權平ヲ馬ヨリ下ニ突落シ、郎等ニ首ヲ取セケリ、隊將
 既ニ討レシ上ハ、越中勢ナジカハ一タマリモ泳フベキ、咄ト崩レテ、我先ニト八方ニ敗北ス、

越中國宮崎落城、附益木中務丞事

河田ガ勢ハ、諸方ニ亂レ靡イテ、逃行勢ニハ目モカケズ、宮崎ノ城ヲ志シ、引行敵ヲ遁サジ
 ト、追カケ追詰、附入ニシテ、二ノ曲輪マデ乗移ル、爰ニ藤田能登守信吉ハ、己レガ抑ヘ居タ
 ル陣所ト、河田ガ合戦ノ場又ハ搦手ノ虎口トハ、其間ニ茂林多クアツテ、其様子ノ見ヘザル
 ユヘ、士卒ヲ出セシヤ否ヤ、其躰ヲ知ンガタメ、合備ノ新津丹波守ヲ南ノ方ノ山ノ尾崎ヘ登
 セテ見セシムル、此時河田既ニ二ノ曲輪マデ乗込ミシカバ、其様子ヲ藤田ガ陣ヘ相圖ノ太鼓
 ヲ以テ告シカバ、藤田ガ勢是ヲ聞、河田ニ越レケルコソ安カラネ、倡ヤ本丸ヲ乗取テ、高名セ
 ントゾヒシメキケル、係ル處ニ、河田ガ備ノ檢使大石源之允ハ、此趣ヲ大將ニ注進センガタ
 メ、本陣ヘ馳歸リシガ、本道ヲ行バ二里餘リノ所ユヘ、敵ノ圍ノ中ヲ馳通り、海邊ニソフテ浪
 打際ヲ傳ヒ、或ヒハ海ヘ乗入、又ハ陸ヘ乗上テ、二十餘町ノ道ヲ難ナク馳歸ツテ、大將景勝ノ
 旗本ニ參リ、合戦ノ次第ヲ申上、河田ガ軍士手負多ク出來仕リ、其上大ニ疲レテ候ヘバ、御勢
 ヲ入替ラレ然ルベク候ハント申ス、景勝此由ヲ聞召、然ラバ勢ヲ入替ベシ、日既ニ黄昏ニ及
 ベリ、明早且ニ本丸ヲ乗取ベシ、急ギ藤田ガ勢ヲ以テ、河田ト入替サセヨトゾ下知セラレケ

天正十二年九月十八日

二五六

ル、去程ニ藤田能登守己レガ抑へ居タル陣所ヲ打立バ、安田上總介早速跡へ入替ツテ、其所ヲ請取ケリ、斯テ藤田ガ一手ノ勢ニ丸へ押入レバ、河田一手ヲ繰出ス、此ノ如ク段々ニシテゾ入替ケル、今日河田ガ働キハ、武功秀デタル舉動ニシテ、希代ノ高名ナリシカドモ、此度ハサノミ賞感モナカリケリ、其ノユヘヲ委ク尋ヌレバ、兼テ景勝其内意ヲ河田ニ云含メラレ、此術ヲナシ玉ヒシトゾ聞ヘシ、是ニヨツテ凱陣ノ以後越後ニテ感狀ニ引出物多ク添テゾ出サレケル、然ルニ藤田能登守信吉ハ、益木中務丞ガ聳ナルユヘ、本丸へ使ヲ遣ハシテ云セケルハ、元來上杉家ノ幕下ニ坐マセシ御身ナレトモ、今止コトヲ得玉ハズシテ、佐々ニ與シ玉ヒシコト、是非ニ及バザル次第ニ候、大將ノ御前ハ、信吉宜シク執シ申ベシ、武士ノ義理今ハ是マデニテコソ候ベケレ、城ヲ開渡サレ候ヘカシト、様々其理ヲ云含メテ遣ハシケレバ、益木理ニ服シ、此上ハ如何様トモ藤田殿ノ御計ヒニ任セ候ベシトゾ返事シケル、此益木中務丞ト申ハ、元越中ノ國高岡ノ城主ニテアリケルガ、勇謀勝レタル男ニテ、サシモ武威盛シナリシ、故輝虎入道謙信ニダニ一年敵シタル勇士ナリ、然リト云ヘドモ、謙信ノ威光淺カラズシテ、越中ノ諸士殘ラズ上杉家ノ履下ニ馬ヲ繫グ、其中ニ此益木計リ謙信ニ降セズシテ、己レガ一孤ノ勢ヲ以テ、高岡ノ城ニ楯籠レリ、謙信却ツテ其至剛ナルコトヲ感ジ玉ヒ、如何ニモシテ益木ヲ味方ニナサント、謀ヲ巡ラサレケルガ、其比益木カ息女一人同國堅山ノ邊リニ

信吉ハ増
木中務ノ
聳

信吉増木
勸ム開城ヲ

忍ビ居シヲ、謙信是ヲ幸ヒト悦ビ玉ヒ、彼娘ヲ尋ネ出サセ、其後中務丞ガ方へ種々云遣ハサレケレバ、益木モ流石恩愛ノ捨ガタサニ、是ヨリシテ上杉家ノ脚下ニ屬ス、彼息女ハ吉江喜四郎ニ下サレテ、妻女トソナサレケル、然ルニ去ヌル天正十年、越中騒亂ノ時、益木中務丞己レガ母ヲ佐々内藏助ニ奪ハレシカバ、是ヨリ是非ナク佐々ニゾ從ヒケル、聳ノ吉江喜四郎討死ノ後ハ、彼女房ヲ景勝、藤田能登守ニ下サレテ、妻女トゾナサレケル、左ルニヨツテ、信吉大將景勝ノ陣所ニ參リ、右ノ次第ヲ申上、助命ノ儀ヲ歎キシカバ、景勝許容アツテ、益木ガ一命ヲ助ケ送り遣ハサレ、其夜ニ城ヲ請取、本陣ヲゾ移サレケル、斯テ其翌二十七日ニハ、藤田能登守、安田上總介、泉澤河内守、此三備ヲ以テ攻寄ル程ニ、黒部川ノ四十八ヶ瀬トテ、同シ流レヲ四十八度ニ渡ツテ、門川、品著川ヲ打越テ、佐々ガ居城富山ヨリ四里此方滑川マデ推詰テ、民屋ヲ放火シテ、其燒跡ニ陣ヲ取、明ル二十九日ニハ、宮崎ニ引返ス、佐々内藏助成政ハ、上杉家ノ武威敵シガタシトヤ思ヒケン、富山ノ城ニ引籠リ、一人モ勢ヲ出ザレバ、其餘ノ國中ノ諸士モ、皆己レ己レガ居館ニ引入テ、頭ヲ指出ス者モナカリケレバ、景勝モ軍勢ヲ相從ガへ、越後ニ歸陣シ玉ヒケリ、斯テ景勝ハ春日山ニ歸陣アツテ、秀吉ノ使者木村彌一右衛門尉ヲ召レ、此度木村見物ノ如ク、越中表ノ儀佐々ヲ形ノ如ク仕詰候上ハ、攻滅サンコトハイト安ク候ヘドモ、理ヲ盡シテノ御所望ニテ候ヘバ渡シ申ニ候、早々佐々ヲ退治ナサル

天正十二年九月十八日

二五七

天正十二年九月十九日

二五八

ベシ、和睦ノ儀ハ追テ思慮仕、返事ヲ申上ベシトテ、木村ヲゾ歸サレケル、
伊豫湯月ノ河野通直、金尊坊ヲ同國石手寺地藏院住持職ニ補ス、

〔石手寺文書〕豫 ○伊

石手寺地蔵 □□院住持職之事、所申付也、

右任先例之旨、進退領掌、可被全寺務等之狀如件、

天正拾貳年

九月十八日

河野 通直(花押)

金尊坊

十九日、辰、壬毛利輝元、舊ニ依リ、出雲一畑寺ヲシテ、本堂上葺ノ費ヲ同國秋
鹿郡ニ徵セシム、

〔一畑寺文書〕出 ○出

御捻令披見候、仍一畑寺本堂上葺之儀、從前秋鹿郡申付候哉、近年無其調之由、甚以不可然
候、爲國家之にて候間、堅固可被仰付候、委細從奉行共所可申遣候、此由彼僧可被仰聞候、
恐惶謹言、

天正十貳 九月十九日

輝元 書判

富田元秋

右馬頭

輝元

書判 元秋 御返かし

當寺本堂上葺之事、古往以來從秋鹿郡雖申付候、近年依無其調、及太破之通、有參上言上之
趣、進披寄之處、任先例對彼郡被仰付之、得其心、堅固可被申付事、肝要之旨候、恐々謹言、

國司右京亮

元武 書判

兒玉三郎右衛門尉

元良 書判

栗屋掃部助

元眞 書判

桂左衛門太夫

就言 書判

一畑寺

天正十二年九月十九日

二五九

天正十二年九月十九日

當山御藥師本堂上葺之事、往古以來從秋鹿郡、三年一度宛葺替來之儀候處、近年就有難澁之村、至藝州被申窺候處、先例ト云、國家御祈念ト云、無相違可相調之由、御直書并奉書等如此候條、尤可然候、然上者、三年一度宛被相催、可被葺調事肝要候、恐々謹言、

九月三日

富田形部大輔

元秋書判

一畑寺壽慶侍者禪師

〔附錄〕

〔一畑寺文書〕

雲〇出

勸進米

一畑寺觀進米之覺

一銀子壹枚

前田丹破殿（波カ）

一米 四表（後下同之）納

堀尾頼母殿ヨリ

一同 壹表 同

神保清十殿ヨリ

一同 壹表 同

堀尾九十郎殿カ

一銀子五匁

野村孫太郎殿カ

一米 壹表 納

大原正右衛門殿カ

一米 壹表 同

三宅加兵衛殿カ

一同 拾表 同

堀尾但馬殿カ

一銀子拾匁

吉川谷扶殿カ

一同 拾匁

堀尾左兵衛殿カ

一同 三匁

長谷川加兵衛殿カ

一同 三匁

宇津尾九左衛門殿カ

二十日、巳、癸筑前立花ノ立花統虎、立花鎮實等ニ書ヲ遺リテ、筑後在陣ヲ勞

〔立花右衛門大夫同兵庫助宛感狀寫〕

先書如申候、長々在陳各辛勞之段不及申候、其表之儀（百次道等ノ高橋親運）雪、運御參陳之以後者、万方御安利之段、尤目出候、殊下田罷著、其元陳中之様躰濃々承、浦山敷難盡筆紙候、此翰者其表被召調候ハ、到上筑後表可爲御陳易之條、其刻者何様從此方も可遂出張之間、以面多日之物語可申候、急大方恐々謹言、

天正十二年
九月廿日

（立花）
統虎在御判

淡路入道殿

天正十二年九月二十日

上筑後陣
替ノ時ハ
統虎出陣
フセント云

天正十二年九月二十一日

二六二

次郎兵衛尉殿

勘右衛門尉殿

與三左衛門尉殿

右衛門太夫殿

上包右衛門太夫、二郎兵衛兩人ニ當、本書山本勘右衛門所ニ在、

○戸次道雪、高橋紹運、筑後山下ニ蒲池鎮運ヲ攻ムルコト、本月十一日ノ條ニ、道雪等、軍ヲ筑後高良山ニ移スコト、十月三日ノ條ニ見ユ、

二十一日、甲午織田信雄、尾張熱田ノ加藤景延、同順政ニ命ジテ、牡蠣殻ヲ同國清洲ニ運バシム、

〔加藤景美氏文書〕○尾張

先度申付候かきから早々清須迄可相届候、石はいの用所候間、其元いかほと成共有次第可相調候、無實際事候條、可成其意者也、

九月廿一日

〔花押〕

加藤集人とのへ

同又八郎とのへ○張州雜誌抄ニ「右包紙ニ宮中浦々ニ有之分可相調候、」トアリ、

石灰ノ用

宮中浦ニシテ採取セ

○徳川家康、景延、順政ノ人質ヲ出セルヲ褒スルコト、三月十九日ノ條ニ、信雄、家康、清洲ニ歸ルコト、本月十七日ノ條ニ見ユ、
肥後ノ合志、山鹿、三池等ノ諸氏、島津忠平義弘ニ使ヲ致シテ、降ヲ請フ、是日、同國隈府ノ隈部親泰降ル、

〔上井覺兼日記〕十九 九月、

一日、看經等如恒、從伊集院野州使者到來候、隈部殿御奉公申度由被申候、其外諸方角より申來事多々候、○下略、上井覺兼、肥後隈本ニ著スルコトニカ、ル、本月十日ノ條ニ收ム、

一十三日、○中略、肥後吉松ニ陣替ノコト、忠長御宿にて談合也、從山鹿御奉公之由、頻懇望申候、伊野州被聞續候、當時合志ニ被居候本之山鹿殿ニ心置之由申候、然者早々質入さへ指出候而、此方へ一致ニ申上候ハ、合志ニ被居候山鹿方ニ心遣、向後入まじき由之證文認被遣候、吾々在判也、此夜徒然に候間、衆中などに御酒共寄合閑談候、獨居之餘、
月夜よし松に音せよ秋のかせ

如此所の名によせて、發句思案なと候て、軍旅の愁を述候、

一十四日、早朝武庫様御宿ニ參候、それより忠棟宿へ參し候、隈部殿意分一要よりきかれ候て、新武、伊野まで被仰候、當時隈部殿格護三郡にて候、兩郡を指上、山鹿之郡計被下、被召

天正十二年九月二十一日

二六三

隈部親泰等降ヲ請フ

山鹿某降ヲ請フ

親泰降參ノ條件

山鹿某ノ
質人宇藤
伊賀

あがり城

出候する由、尤目出候、併隈府之城進候、領知千町計相添被下候様之御咎之由也、是者各無納得候、先々山鹿より直之申理事等候儘、隈部之分者、追而御談合可有由被仰候て可然之通出合也、(名和顯考)宇土殿、城殿より著陳祝言、自身被來候すれ共、先々繁多たるへく候間、被仰述候由、同名衆にて承候、(鳥津)義虎よりも御使にて承候、御船宗運よりも使書到來候、(親重)從合志殿も使預候、太刀、袷表一預候也、此晚山鹿より質人宇藤伊賀と云者指出候、就其町羽、伊野彼方へ被指遣候也、

一十五日、看經等如恒、各御禮共承候、武庫様於御宿御談合也、其衆忠平様、忠長、忠棟、新武、(上原衛近)上長、(藤新)吉作、伊肥、拙者也、町羽、伊野より書狀到來候、昨晚者漸中途までにて候、今朝山鹿へ懸引候、彼方御陳所之由候へとも、難澁申候、其故者三里四方之事者あかり城仕、女童へ取亂罷居候間、城内之御人數へ成ましく候、(宗方)麓こむなかと申村候、是之御番衆者可召置之由申候、必竟狼藉人こ怖候故と聞得候、此等御成敗肝要之由也、さてハ先々むなかと哉覽こ、兩人被打入、被仰調候て、可然之段返事被成候、武庫様各談合衆へ御振舞也、それ過候て、忠棟宿にて(忠長)麟臺、新武吾々閑談共仕候也、此夜從忠棟捻にて承候、伊野より只今注進候、山鹿之事昨日こ口替候て、不事成候、さてハ御人數被差加候へと被申候間、先々菱刈、七浦、八城まで(代)の衆明日可被遣候、如何之由尋也、尤可然之由申候、此夜典厩於御宿御

閑談共也、拙者御酒持參申候、

小代親泰
白間野宗
郷
内空閑鎮
房

一十六日、如恒、於忠棟宿御談合也、武庫様、麟臺、新武、拙者也、(親泰)小代、(宗郷)白間野なとより御奉公可申之儀共申來候、山鹿之事、猶も然々之儀無之候て、伊野州、町羽州、中途こ被居之由也、彼方より又宇藤彈正と言申、(者力)質人こ指出候、此日内空閑鎮房拙宿へ禮こ被來候、不在合候て參會不申候、木綿五預之由也、此晚吉利(忠澄)總州宿へ各御酒振舞被成、主居麟臺、拙者、總州、客居忠棟、新武、伊集院作州也、此日新武、本田刑部少輔にて城一要へ、隈部之事一要御媒介にて計策被成候、菟角事六ヶ敷被申候内こ、山鹿より與風伊野迄申事候て、無首尾之様に候、乍去御弓箭御爲こ罷成儀、候間、被聞分候て、可然之通被仰述候、納得之由也、然者隈部へも家を御殘候する條指出候て肝要之段、一要又々可被仰理之由也、

一十七日、如常、典厩拙宿へ入御被成候、(親重)織所新介なと被居合候、御閑談共也、御酒數篇參候、此日武庫様御宿にて各打合御談合共也、宇土殿、城殿へ忠平様御禮被成候、伊野、町羽より兩使にて被申候、山鹿之事、番衆申請候する由申候儘、各打立候處こ、相異候て、一圓之御奉公仕間敷通申切候、不及力之由也、從宗運孫にて候兵部太輔出張申候由、使書にて被届候也、

甲斐宗運
孫兵部大
輔ヲ遣ス
赤星統家

一十八日、(統家)觀音へ別而讀經申候、赤星殿被來候、度々禮之御座候へ共、留守にて無面談候、諸

蒲池鎮運
上井覺兼
ヲ訪フ
甲斐教昌
津久禮ス
著陣ス

相良長每
ノ老臣深
水宗方

幸若與十郎

親泰質ヲ
出ス

天正十二年九月二十一日

二六六

篇賴之由共也、并筑後山下蒲池被申儀共承候、其上被表様子繪圖にて被見せ候、從隈庄甲斐上總介、津久禮と言處まで著陳之由、使書にて承候也、城一要禮こ御座候、御酒參會申候也、新武、本刑なと禮こ御座候也、各御酒參會候、此晚麟臺へ武庫様入御也、御座躰、客位忠平様、吉利總州、拙者、松尾與四郎、主居忠長、忠棟、奥之山左近將監也、種々御會尺也、御座中求摩深(宗方)水方被申上候、今日不慮こ隈部境目こ諸所若衆中指出候、然處こ敵懸候間、各辛勞被申、敵十一人被討留也、其外手負數十人有と見え候由也、新納右衛門佐へ即被仰付、頸捨被仕、此間合志へ勘忍候三池殿一昨日三池へ被打入由、註進候之間、祝言、又ハ彼續見せられ候する爲、高山衆、飯野御手之衆五六人被指通候也、山鹿口爲見償之劫者(地)なと餘多被指遣候、彼口にも矢軍なと候つる由也、

一十九日、武庫様御宿にて御談合也、此晚忠棟へ武庫様被申請候、御座躰、中座武庫様、客居城一要、奥之山方、主居忠長、拙者、忠棟、高山進七也、初雁各御賞翫也、伊地知美作守手火矢にて被射候、

一廿日、忠棟拙宿へ禮こ御座候、御酒參會候也、此晚拙宿にて、奥之山方、幸若與十郎なと茶湯會尺仕候、

一廿一日、武庫様御宿にて御談合也、隈部より一要を頼候て、無二御奉公之由申候て、質人木

合志親爲

親泰弟ヲ
質トス

高瀬ニ於
ケル状態
亂舞

狂言舞

場名字之者指上候、隈府之役人也、○下略、龍造寺政家、義久ニ肥後國ヲ致ス
コトニカ、ル、本月二十七日ノ條ニ收ム、

一廿二日、○中略、忠平等、陣替ヲ議スルコトニ
カ、ル、本月二十四日ノ條ニ收ム、從合志方、世上雜説共申時分候間、親にて候宣頼(合志親爲)いつかたへも質人こ指上候する由也、穢所新介、白濱次郎左衛門尉兩人を以、合志へ御禮被成、御神文なと頂戴させられ候、其外條々被仰遣候也、○下略、秋月種實、書ヲ遣リテ、鳥津、龍造寺二氏ノ
和陸成立ヲ謝スルコトニカ、ル、本月二十七日ノ
條ニ收ム、

一廿三日、隈部殿舍弟質人こ被參候、早日各御見參被成、○下略、鳥津忠平、兵ヲ肥後吉松ヨリ高瀬ニ移
スコトニカ、ル、本月二十四日ノ條ニ收ム、十月、

一二日、如常、武庫様於御宿御談合也、此晚宇土殿へ御寄合也、座躰、主居忠平様、忠棟、奥之山左近將監、客居顯孝、拙者、上原長門守也、種々御會尺共也、亂舞也、奥之山大鞞、(鞍平同ジ)松尾與四郎小鞞、笛蓑田甚丞也、御めし已後御着之時、加悅飛驒守御座こ參候て御酒被下候也、

一三日、○中略、戸次道雪、高橋紹運等、使者ヲ送リテ、共ニ龍造寺政家ヲ
撃タンコトヲ勸ムルコトニカ、ル、本月二十七日ノ條ニ收ム、忠棟各へ寄合被成、座躰、客居義虎、赤星殿、(忠元)新武藏守、上原長門守、主居典厩、麟臺、拙者、忠棟、奥之山方也、種々御會尺也、終日亂舞共也、奥之山、松尾鞞也、笛蓑田甚丞也、石原治部右衛門尉狂言舞共申候、幸若與十郎一曲なと申候、從合志備中屋弟子とて笛吹者來候、一番吹候也、即忠棟さしなされたる刀彼者へ被遣候也、

天正十二年九月二十一日

二六七

忠平合志
親重ヲ訪

合志ノ大
夫

名和顯孝
覺兼ヲ訪

親重覺兼
ノ馬ヲ所
望ス

一四日、如常、和仁殿禮こ被來候、白麻廿帖預候也、此朝一要へ御酒振舞候、座躰、客居一要、上原長門守、城外記、主居拙者、長野惟冬、奥之山左近將監、高山進士允、種々會尺共申候、奥之山色々雜談などにて酒宴也、此晚合志殿陳所へ武庫様御禮被成候、麟臺、我々も禮之志候處、能仕合と存御供申候、合志殿陳所川上にて候間、各舟より御出也、船元まで親重出合也、先御三獻也、御座、客居武庫様、拙者、主居麟臺、合志殿也、三獻過候て武庫様合志殿へ被遣候太刀、織物、親重被請取候、忠長、拙者持せ候太刀、織物打續被見候、從夫御湯漬參候、御座躰、客居忠平様、拙者、上原長門守、松尾與四郎、川上大炊助、主居忠長、親重、吉田美作（前考）守、奥之山方也、種々御會尺也、御點心之時、山鹿刑部太輔、又合志殿親類衆一兩人御座こ被參候、親重御酌之時、馬、太刀、鎧甲、織物、此等を三度に武庫様へ進覽也、奥之山、石原なと狂言舞共候、奥之山、松尾、石原こ親重より織物一ツ、被遣候、合志之大夫とて唄共申候、是こ武庫様より織物二被下候、互こ御酌などにて御酒宴也、夜入候て御歸宅也、

一五日、如常、藏岡地頭吉利縫殿助殿依祭禮遲參之由候て被來候也、此朝宇土殿拙宿にて寄合申候、座躰、客居顯孝、新武、松尾與四郎、敷禰越中守、主居拙者、加悅飛驒守、八木越後守（具傳）也、種々酒宴共にて閑談也、此日松尾方、新武なと碁共うたせられ雜談共也、吉田作州にて合志殿承候、拙者所持候春山野之星栗毛被聞及候、乍無心所望之由候、輒之由申候て即進

忠平肝付
兼寬ノ參
陣ヲ止ム

忠長覺兼
等ノ會合

之候也、從肝付驛（兼寬）正忠殿書狀態到來候、趣者去廿九日、加治木へ下著候、早々爰元へ可被馳續之處、遠路之疲勞故無其儀候、併拙者内儀次第、廳而立有へ候、先々武庫様、忠棟なとへ此段可申入事頼被成之由也、即敷禰越中守を以、武庫様、忠棟へ申候、さてハ下著候哉、目出おほされ候、爰元和平こ成行候間、當時人數ハ御用無之候條、しかと被居候て肝要之御返事也、此段返書仕候、此夜（家世）大津山殿禮こ被來候、太刀、織筋一預候、町田出羽守殿（久傳）より案内者被著候、

一六日、如恒、忠長、宇土殿御寄合被成候、參候て、會尺御頼之由候間參候、座躰、客居宇土殿、新武、本郷甲斐守、主居忠長、拙者、山田新介（有傳）、種々御會尺酒宴なと候て閑談共也、從合志殿昨日楚忽こ拙者馬所望之由候處即進之候、祝著至極こおほされ候、爲祝禮鎧甲使節持せ預候也、馬進之候處、遮而御禮珍重候、殊更祝物送預候、乍斟酌召置由申候也、此日同名右衛門尉を以、合志殿へ明朝御酒可參會候、拙宿へ來儀之通申候、明日早々可被來之返事也、從城一要使者預候、明日忠棟へ御酒寄合可有候、拙者も可參之由也、尤可參候へ共、合志殿明朝拙宿へ來儀之由兼約申候、不及是非之段返答申候也、○下略、小代親泰、忠平ヲ訪フコト、ニカ、ル、十月一日ノ條ニ收ム、

一七日、如常、合志殿より兩度使節預候、今朝拙宿へ寄合之由約束候つれとも、夜中よりくさ氣出合候、了簡なき由也、諸神も照覽偽ならさる通被仰述候、さてハ其分に候哉、不及是非

覺兼忠平
ヨリ金齋
醫術ヲ受
ク

新納忠元
池等後三
伊集院忠
棟宿所ノ
茶湯

覺兼忠棟
ト共ニ忠
平ヲ訪フ
高瀬ノ出
家衆ノ老
氏ノ臣ハ
トス

天正十二年九月二十一日

二七〇

候、御懇勤に被仰分之段祝著之通返事申候也、此日麟臺御同前○中略武庫様御宿へ參候、
田尻鑑種、使ヲ忠平ニ遣シテ、二心ナキヲ示スコトニカ、ル、十月七日ノ條ニ收ム、忠長御同前○中略忠平様へ金齋醫術得御意、同醫書など申請候也、此晚武庫様我々御酒御寄合被成、御雜話共也、

一八日、藥師に別而祈念等仕候、宇土殿宿へ各被申請候、座躰、客居典厩、吉利殿、拙者、宇土衆、本郷甲斐守、主居麟臺、顯孝、穰所新介殿也、種々御會尺亂舞など也、御茶など參候て各御立也、此日方角見償之爲、三池へ新武、伊野、山田新介、猿渡越中守被指越候也、忠棟へ珍敷釜到來候、見可申之由候間參之候、編笠之様候て霰之釜にて候、言語道斷無類之由共各御褒美にて候、勿論御茶湯會尺也、（信久）川上上野守殿、麟臺、拙者也、種々珍物共也、御茶無上也、忠棟手前被成候、各及薄暮歸宿仕候也、

一九日、如常、○中略、忠平、戸次道雪ニ使僧ヲ遣スコトニカ、ル、本月二十七日ノ條ニ收ム、忠棟同心申、武庫様御宿へ參候、種々御談合共也、（高瀬）當町五ヶ寺之住持各々へ御目こ懸度由、町田羽州まで被申候、町衆さへ其儘に被召置候する間、殊更出家衆之儀者、御見參くるしかるまじき由定候也、此晚武庫様、典厩御寄合也、座躰主居忠平様、忠棟、町田羽州、白濱次郎左衛門尉、客居征久公、拙者、新納右衛門佐、穰所新介也、種々御會尺也、夜入候て各罷歸候也、此夜善哉坊其外衆中など被來閑談也、御酒など參會、雜談にて慰候、

覺兼忠平
記ヲ讀ム
池忠元等
ルヨリ歸

一十日、於拙宿舍志殿寄合候、座躰、客居親重、穰新、合志對馬守、矢野出雲守、主居伊集院（久美）美作守、拙者、松尾與四郎、種々戲言など酒宴也、座過候て基などにて慰也、伊作州太平記求候として被取寄候、見申候て菟角候處に、麟臺、忠棟爲談合御出也、從夫太平記一卷拙者讀候而各へ聞せ申候、然處三池へ被指越候新武、伊野など歸候由候て被來候、彼方角物語共也、各打合、爰元様子談合也、其衆忠長、忠棟、新武、伊野、伊作州、上原長州、町田羽州、穰新、本田刑部少輔、山田新介、猿渡越中守、此衆也、右之衆へ夕食振舞候、酒宴共也、夜入候て各歸被成候、

〔古今戰〕○舊典類聚 同（天正十年）とし九月上しゆんに、又肥後おもてかうし（合志）とのハさつまかたに參り給へとも、あそけ、くまへなと（阿蘇惟種）のハいまたしたかハす、是ををさめ給へんとて、兵庫頭との御大將にて、くまもとへ打入らせ給ひて、やかてよし松へ御ちんめさるれハ、くまへもはやわい（吉）ふをさしけ、かうさん申候とに、内のこかも、山かのう（宇藤）とうも參りにけり、○上下略、龍造寺隆信戰、死ノコト、並ニ鳥津忠平、

〔諸家由緒〕○舊典類聚 十三所收 吉利家由緒書

一（天正十二年）同八月、肥後阿蘇氏、隈部氏御征伐、大將之内（吉利忠澄）とノ發向、吉松之城責落候、直○中略同國長野氏

吉利忠澄

天正十二年九月二十一日

二七一

退治、諸所相働候事、

〔普聞集〕

七〇上（九月）

同月中旬、薩摩勢肥後國ニハタラクキ、肥前領ヲカスメ略ス、御宇田、藤井、中富、小島、鍛冶屋、古賀等ヲ焼ハラフ、隈部但馬守親永薩州ニ降ル、〇下略

○島津義久ノ兵、肥後隈本ニ集結スルコト、本月十日ノ條ニ、龍造寺政家、義久ト和スルコト、同二十七日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔歴代鎮西志〕

十九

〇上略、大友氏ノ兵、筑後ノ諸所ヲ攻ムルコトニカ、ル、肥後者、島津兵庫頭義弘（此時名忠平、義久之舍弟）、已自薩州出

張、放火、焚御宇田、藤井、中富、小島、鍛冶屋、古賀等邑里、進陣于隈本、郡衆太半應其誘引矣、所謂甲斐、阿蘇、相良、伯耆、玖摩、合志、宇同、菊池、城、赤星、山鹿、小代、大津山以下屬島津者猶衆也、

〔明赫記〕

六

合志隈部宇動等屬旗下事（隈下同シ）

同年八月下旬、肥後表合志藏人親爲ハ、早薩摩方ニソ參ラレケリ、阿蘇家ト隈部ノ親光（隈下同シ）、和井府ノ宗家ナト、未タ御下知ニ從ハス、此等退治トシテ、大將ニハ、兵庫頭忠平公、相從一門宗徒ノ勇士數百人大勢ヲ卒シ、隈本ヘ打入、即吉松ヘ御陣ヲ付ラレケリ、其内ニ和井府ノ松尾城ヲ可攻評定有ケル處ニ、城ヲ明退落失ケリ、暫在陣有ケル程ニ、隈部ノ親光モ、赤星宗家モ降

島津氏ノ兵御宇田、藤井、中富、小島等ヲ

肥後ノ諸衆島津氏ニ屬スルモノ多シ

隈府ノ松尾城ニ降ル赤星宗家

政家利ヲ請フ蒲池草野、筑紫原田、秋月等ノ諸氏降ル

退治、諸所相働候事、

〔三國擾亂記〕

六

救田尻有馬某ヲ事并龍造寺隆信被誅事

馳せ、是よりハ無二の志を存し、薩摩ヘ降參すへき由を申けれハ、比は八月廿八日、兵庫頭忠

〔三州軍鑑〕

〇日

一 同年九月、肥後の國人小代といふ者、薩州の幕下と成、阿蘇氏、隈部氏ハ

猶不順、依之彼等退治として兵庫頭忠平數千の兵を卒し、肥後ヘ進發す、先隈元の城こ入、夫より吉松ヘ著陣す、威風九州に振ふ、熊部氏こらヘ難く、和伊府を捧て降參す、其外内野小嶋、山鹿、熊等皆嶋津家ヘ歸服す、夫より高瀬江陣を移す、三池といへる者、肥前之方入にて有けるか、一家にて嫡庶をあらそひ、先之三池浪人して、其比小代に居たりけるに、今度薩州勢至を悦、高瀬ヘ馳來る、扱嶋津家ヘ相從ひ、當三池を肥前の國ヘ追出し、再ハ本領に任して、無二の味かたと成、又輪荷氏、龍造寺駿河守政家ハ隆信の嫡子成り、嶋津は父雖爲敵、勢ハ盡て、添嶋長門守を入質に獻して、和睦を請ふ、〇龍造寺政家、島津氏ト和スルコト、忠平許諾し肥前の國を薩州之幕下と定而歸陣す、依之筑後之蒲池、草野、筑紫、原田、秋月等皆嶋津の幕下に屬す、然といへ共、肥後の阿蘇氏は猶いまた不順と云々、

〔三國擾亂記〕

六

救田尻有馬某ヲ事并龍造寺隆信被誅事

馳せ、是よりハ無二の志を存し、薩摩ヘ降參すへき由を申けれハ、比は八月廿八日、兵庫頭忠

隈府ノ松尾城ニ降ル赤星宗家

政家利ヲ請フ蒲池草野、筑紫原田、秋月等ノ諸氏降ル

肥後ノ諸
氏島津氏
ニ降ル

天正十二年九月二十二日

二七四

平軍衆を引具し、肥後熊本に發向有て、本陣を吉松に構へ玉へは、割府の城主赤星○赤星氏ハ、舊隈府城主ハ、及ひ三池の某とも悉く降參して、陳を高瀬に換玉へハ、是にをいて白間野、大津山、和仁、邊春、田嶋、鹿ノ子木、東郷、小代等もまた降伏す、かゝる折節なれば、龍造寺肥前守政家も、添嶋長門守を質と成て降しければ、筑紫の秋日種實、原田伊賀守旗を卷て、薩摩に屬しける間、兵庫頭忠平威を九州にふるひ、悦ひ勇て歸陳有しかは、○下略、肥後花山ニ陣スルコトニカ、ル、十三年八月十日ノ條ニ收ム、

二十二日、大和筒井定次、馬借一揆ノ首領ヲ刑戮ス、

〔西山文書〕○但馬

四月ニ一
揆靜謐

此方之事聞度候ハ、郡山へ尋へく候、手前此方こも、何か取紛候、返事も一段大儀候、目出事自是可申遣候、御房へも此趣能々申候へく候、先々一揆靜候て心易候、謹言、○上下略、卯月十日附筒井順慶書狀、全文ハ四月十日ノ條ニ收ム、

〔多聞院日記〕○三十一 五月廿一日、

五月ニ奈
良中一揆
ノ風説ア

一○中略、近畿炎早ノコトニカ、近般ナラ中一揆之口遊在之、
ル、七月二十二日ノ條ニ收ム、

廿四日、○中略、近畿炎早ノコトニカ、一揆ノ口遊不止云々、
ル、七月二十二日ノ條ニ收ム、

十月十六日、
一先段馬借張行曲事トテ、茶六ト、トヤト兩人張本人トテ、○筒井定次前陳ヨリ申越、中坊へ召捕令生害

中坊馬借
捕ノ首領ヲ

辭世ノ歌

了、其時末期ニトヤ一首、惣ノ歌モシラヌ者也シカ、

メコトモヨ跡テ湯水ラムクルナヨ茶六トツレテ道ヲ行ナリ

トヨム、トヤ又一首、

メコトモヨアトニライメハヨモアラシ馬借トツレテ我ハ行ナリ

トヨミ了ト、

〔藥師寺舊記〕○三 中下藤檢斷之引付

一宮中茶屋彌五郎男破借大將ニ仕間、○定次從筒井生害畢、然者曲事人之間、任寺法放火在之也、仍集會如件、

天正十二年甲申九月廿二日

〔藥師寺舊記〕○一 上下公文所要錄

一去十月廿二日馬借ノ人數隨一曲事由被申、宮岡○岡、前掲藥師寺舊記ニハ、中ニ作ル茶屋彌五郎筒井ヨリ致生害畢、寺へも郡山ヨリ蚊助爲使、馬借ニ罷出故、被成敗間、檢斷事爲寺沙汰可有旨ヲ申、依之檢斷、放火等在之、然ハ彌五郎爲百性七條○姓地主瓜生殿之昌被作了、被披露從先規任有來旨、昌ハ當毛半分公文落畢、向後も可被守此旨通一決了、

天正十二年甲申十月三日三輩一決了、

天正十二年九月二十二日

二七五

藥師寺中
下藤檢斷
寺法爲
所刑ノ爲
メ住居ヲ
放火ス

公文當毛
ノ半ヲ沒
收ス
三輩衆ノ
決議

○十月十六日、定次、馬借一揆ノ首領ヲ刑スルコト、便宜合致ス、

〔附録〕

〔多聞院日記〕三十一 正月十九日、

盗人ヲ殺ス

一於今御門邊盗人殺害了、伊勢者カミユキニテアリシト云々、

二月十一日、

一昨日十日、金堂へ盗人入、引出了、殺了、

廿日、

一昨日六方ヨリ寶生院罪科、材木ヤ木買ニ出、屋ノ別供チカ、永禪房、屋ノ別供チカ、良實、(男) 薪能スシウニ、テ頭ヲツ、ム、以上三人罪科了、

籠名唯識講衆ヲ擯出ス

舜善房得業西屋ニ箸尾名字籠置テ私ニ出、曲事既可有罪科之由也、種々佗言ニテ唯識講衆擯出ニテ罪科ハ免了、

三月廿七日、○中 昨日廿六日、寶生院罪科免除了、○下 略

六月五日、

一去廿八日於長谷寺喧嘩在之、繪所宮内卿生害了、相手藤切并智惠光院ヲ秋山ヨリ入數出檢斷、逐電了ト、隨分ノ繪書、長宮ト申セシ仁也、一段惜事也、

繪所檢斷

神人下藹分進發

十五日、

一昨日歟、於高島、山内ノ者ト神人喧嘩在之、今日從下藹分可有進發之通、從筒井後室以成身院被相觸及申事云々、如何、雖入夜申事不止ト、

廿日、

一又、(金) 大峰ノ尺迦ノ御首ニ金子二枚、銀子三枚、アリシヲ、盗人五人シテ盜ミ取ヲ、近所ノ里へ告テ、尺尊ノツケニテ取返、剩五人ナカラ殺害云々、○下 略

九月一日、

一因明講預錢去年當年無沙汰之衆種々被加催促、終ニ不出之躰、西南院、性勝房得業、南座蜂起ニテ昨日罪科了、

十二月三日、

一先段於旅所成敗之仁、イノコ平三トテ伊藤掃部ノヨリコ也、嚴重ノ屈ニテ、衆中ノ貝吹竹坊順良生害了、先代未聞ノ曲事也、

〔學侶引付寫〕五

○内閣文庫所藏

一天正十二年 申 三月日

學侶集會引付

祐榮

天正十二年九月二十二日

伊藤掃部ノ寄子

因明講預錢南座蜂起

興福寺客
坊集會評
定

海河上關
料

春日社上
遷宮

東室邊學
侶集會評
定

西屋談義
田北鄉神人

長川莊唯
識講米

唐院學侶
沙汰人集
會評定

天正十二年九月二十二日

天正十二年 申 三月廿五日、客坊集會評定曰、

一天下泰平、國土安全、寺社繁昌、爲此時之條、珍重之旨評定訖、

一海河上關料、并諸國寺社領、如往代可有運上之旨一諾畢、

一上遷宮頓而可有成滿旨一決畢、

以上

同廿八日、於東室邊學侶集會評定曰、

一今度念劇儀付、寺社惣別祈禱、殊に者、爲天下泰平國中靜謐、於神前信讀大般若經十部、千

座仁王講、深蜜(密)五重講問一廻通、立願狀御神前奉納畢、

西屋談儀(西屋)向下地北鄉神人甚五良令沙汰候處、從納所度々雖被催促候、不能承引、數年無沙

汰候條、於被加成敗之可爲祝著候旨、納所玄禪房擬講披露之間、其通社中方へ、以書狀被申

遣了、

長川唯識講米(去方)七年彼庄以外之水損越常篇條、去年之儀者半宛六斗五升宛可有同心之旨、從

唯識講衆返條候て、然者急速可有支配之旨、源禪房權大僧都方へ書狀を以被申遣畢、

以上

同卯月十八日、於唐院學侶沙汰人集會評定曰、

二七八

春日社造
替
造宮反錢

奈良反錢

群參同音
論
六方へ牒
送

東室邊學
侶集會評
定

一當社御造替之儀付、去年以來不被打置御作事其沙汰雖在之、○春日社造作始ノコト十一、猶以

無油斷遷宮成滿之儀可取趣之旨、兩奉行所へ被下知畢、并御造宮反錢之儀雖被遂催、無究

濟之條、官府邊被申談處、無沙汰之衆於在之者、堅固可被申遣之由返條之間、去年成□、彌

以令交合、堅以可有催促之旨、同被命訖、

一奈良反錢以下之餘剩於在之者、御造宮方22寄相造替、早速之調進可爲珍重之旨、被加下知

訖、

一御造宮之儀付、社頭奉行と而、或御料材以下令才覺、每事無疎略廻計略、職衆以下へ令言

上、可然樣可勵無造作懇意之由、被加下知畢、

一爲寺社惣別之祈禱來下旬初之比、於東室邊群參同音論吉日之事、幸德井邊22被申遣候間、

勘進次第可有執行之條、六方邊へ可有牒送之旨一決訖、

一恆例千部同音論、來月上旬初之比吉日勘進之儀、幸德井邊へ被申遣畢、以其上、六方邊22

可被牒送之旨同決則訖、

以上

五月朔日、於東室邊學侶集會評定曰、

(一脱)供目代(一脱)裝束之事、三ヶ月成滿條、暇之哀披露條、被許可畢、

天正十二年九月二十二日

二七九

四恩院邊學侶集會評定 千部同音論

以上

同九日、於四恩院邊學侶集會評定曰、

一恆例千部同音論一七ヶ日成滿之間、如先規供養事被修之訖、

一咒願松林院家、道師(尋)東北院家被修之條、以使番被申畢、

一使音(音)之躰事、宗恩房權少僧都、圓願房五師、

以上

同十五日、於西室邊學侶集會評定曰、

一恆例仁王講吉日次第可有執行之旨決則也、并吉日之事幸德井邊へ申遣畢、

一吉日勘進次第可有執行之由、六方邊へ令牒送訖、

○一箇條略ス、近畿炎早ノコトニカ、ル、七月二十二日ノ條ニ收ム、

一奈良中座小物座役在之處、恣賣買之條、堅以令停止了、此旨可相觸之由、加下知畢、

一高天市人夫之儀、從官府被相雇付而、別會邊書狀被相付處、此頃觸奈良恣被申懸之由曲事

次第、依之不可相出之旨下知處、不能承引、彼鄉民相出條、譴責其沙汰畢、就懇望て可被相

立旨決畢、

一筑州永々在陣之條、爲音信三種三荷、并順慶法印二荷可被遣之旨、奉行所邊へ被命畢、

西室邊學侶集會評定 幸德井

小物座役

高天市人夫

羽柴秀吉及比筒井順慶等ニ物ヲ贈ル

路次差留

東室邊學侶集會評定

三方入堂衆

東室邊學侶集會評定

香觀房權律師トナ

一西屋談義田山田之原領在之處、數年無沙汰之條、路次被差留、且□可取由、專識房披露之條、從領主被相届於無承引者、可被任評定之旨之由、決則畢、

○一箇條略ス、近畿炎早ノコトニカ、ル、七月二十二日ノ條ニ收ム、

以上

同廿二日、於東室邊學侶集會評定曰、

○二箇條略ス、近畿炎早ノコトニカ、ル、七月二十二日ノ條ニ收ム、

一三方入儀付、堂衆以下書狀之儀、別會五師へ被命畢、

以上

○中略、五月廿六日學侶集會評定、七月二十二日ノ條ニ收ム、

六月廿日、於東室邊學侶集會評定曰、

□西屋之臺所之屋根、築地屋根、同三方之納所修造有之處、秋本房納所公物一向¹²無物之條、

成業、學道積錢被仰催、被相出候之可爲祝著之旨、以書狀從納所披露之條、則學道邊急度可

被相出旨、以書狀被申遣訖、

一香觀房得業可有權律師轉任由條、如先規其通一決畢、

一夏中談儀屋下地山中切山^并室津有之處、度々雖被及催促、無故無沙汰條、彼庄下路次被差

塞候者、可爲祝著之旨、從納所披露一則之通、其通一決畢、

○二箇條略ス、近畿炎旱ノコトニカ、ル、七月二十二日ノ條ニ收ム、

以上

同七月十日、於東室邊學侶集會評定曰、

一圓恩房爲法用僧出仕被其沙汰畢、

一寶壽院成目吐山方無沙汰之儀ニ付、先段被籠名處、無其實之間、猶路次被相留^并庄^{（庫カ）}可被

裁高札之旨一決畢、

一夏中屋第十番布施物從寶藏院支配之所、近年通可有支配旨、雖有披露、去年夏中屋參籠衆

ニ箒子細在之由之條、^{（庫カ）}棟^{（庫カ）}可被相尋旨、供目代邊へ被命畢、

□因明講預錢未進之方々在之由、因明講衆^并納所ヨリ披露條、早々被召出可然旨、無沙汰

之衆へ披露狀相添被申遣畢、

一唯識講米夏季分、七月七日以前可有支配旨等之處、今ニ無支配之條、急度算用方可有籠名

旨、源禪房權大僧都、^并淨恩房邊以書狀被申遣畢、

以上

（庫）
一 天正十二年甲申七月日

東室邊學侶集會評定
圓恩房法用僧トナ

唯識講米

供目代英舜
客坊集會評定

十二大會

東室邊學侶集會評定

移殿ニ血氣附著ス

生馬下莊
點札

學侶集會引付

供目代英舜

天正十二歲^{甲申}七月廿五日、客坊集會評定曰、

一天下泰平、國土豐饒、寺社繁昌、爲此時之條、珍重之由評定畢、

一諸國寺社領、^并海河上五箇關料、如往代運上之條、十二大會如先規可有執行旨一諾畢、

一當社御造營上遷宮年内令其沙汰、速可有滿作之旨評定訖、

以上

同廿九日、於東室邊學侶集會評定曰、

○一箇條略ス、近畿炎旱ノコトニカ、ル、七月二十二日ノ條ニ收ム、

一移殿血氣之儀ニ付、曲事躰被及糺明可注給旨、度々社中へ雖申遣候、仁躰難知之由返條候

條、先以社頭奉行令下知、御敷板之儀則取替被沙汰畢、

一極例群參大般若經、來ル中句之初比於社頭入講屋可有執行旨也、吉日勘進之事、則幸德井

へ申遣了、六方邊へも被得其意、同心可被目出旨、以書狀被申遣畢、

○一箇條略ス、筒井順慶、病ノコトニカ、ル、八月十一日ノ條ニ收ム、

一生馬下庄領^{（庄下同）}識賢房買得之下地有之處、無故無沙汰之條、點札候へハ、被百性押而點札相

天正十二年九月二十二日

常住神人
番主神人
探ヲ以テ
處罰ス

八講屋學
侶集會評
定

桐山莊室
津莊路次
ヲ開ク

上押領條、領主河原山部邊へ以書狀被相屈畢、
 一未季頭納所闕如之儀(旨カ)付、長運房得業可有奉行者一決也、則先納所へ帳面、升等可被相渡
 旨、以書狀被申遣畢、
 一移殿血氣儀(旨カ)付、被經糺明、可注給返條之旨、然上へ常住神人内へ一人、其當日番主神人之
 内一人被相探、可有成敗旨一決畢、
 一因明講預錢無沙汰之仁躰納所邊へ被相尋、來七日以前(旨カ)、於不被相成者、南座被相寄、可有
 成敗旨、一決畢、則納所へ以書狀被申遣畢、
 以上

八月十四日、於八講屋學侶集會評定曰、

一恆例國中御神供反別之儀、如先例、可被懸催旨、奉行所邊へ以書狀被申遣畢、并御造營反
 別之儀も、日損越常篇之條、重而被相談可申催之由、同被申畢、
 一桐山、室津兩庄路次之儀、夏中談儀田樂分(旨カ)付、先段被差塞之所、請乞在之條、先以可被相
 開旨、供目代(旨カ)被命了、
 一移殿血氣之儀(旨カ)付、越度之躰糺明之儀、社中へ度々申遣候之處、難知之旨返條之間、常住并
 當日番衆之内壹人宛、以探可被成敗被決則了、則北郷善八良、北郷善六兩人探相出し候、加

成敗旨書狀ヲ以社中へ被申遣畢、

以上

○中略、八月十八日東室邊學侶集會評定ノ
コトニカ、ル、七月二十二日ノ條ニ收ム、

同廿九日、於東室邊學侶南座蜂記集會評定曰、

一社頭因明講預錢西南院殿御所出分、當年無沙汰之條、任寺法令罪科畢、
 一同預錢與發志院分、去年當年兩年分不被出候條、令罪科畢、
 一西南院殿御知行分、去年松林院殿御修納預錢被相出可然旨、以書狀被申遣畢、
 一北郷神人善五郎、又一、藤七兩三人大佛供庄へ催促(旨カ)入申之處、納所無存知之條、爲糺明、
 兩三人被加成敗畢、
 一移殿血氣之儀(旨カ)付、北郷善八郎、北郷善六兩人成敗之處、預御免除候者、可畏存之由懇望候
 間、被成免除畢、
 一西屋談儀田山田之篠庄百性無沙汰之條、來ル五日已前、於無沙汰上へ、彼庄下路次被差塞
 候者、可畏存候之由、圓成坊披露之條、右之趣、供目代へ被命畢、
 一因明講納所之儀(旨カ)付、從學道條々牒送之間、右之趣納所へ申遣候處、重而返牒(旨カ)之條返牒之
 趣、學道へ以書狀被申遣畢、從納所之書狀被遣畢、

東室邊學
侶集會評
定

大佛供莊

山田ノ篠
莊

天正十二年九月二十二日

二八六

東室邊學
侶集會評
定

一南座峰起集會之儀付、同時具之事被得其意可然旨、衆中へ以書狀被申遣候了、

以上

九月二日、於東室邊學侶集會評定曰、

一供目代(イ、イ)斐速暇之事、三ヶ月成滿間被許可畢、

以上

東室邊學
侶集會評
定

同八日、於東室邊學侶集會評定曰、

○二箇條略ス、尋憲ヲ興福寺法務ニ補シ、大僧正ニ任ズルコトニカ、ル、九月三日ノ條ニ收ム、

一恆例仁王講來下旬初比、可有執行旨條、六方邊并吉日之儀幸德并以、以書狀被申遣畢、

以上

東室邊學
侶集會評
定

同十一月二日、於東室邊學侶集會評定曰、

一今日吉日之間爲法用僧出仕、識春房被出仕畢、

○一箇條略ス、春日若宮祭ノコトニカ、ル、十一月二十七日ノ條ニ收ム、

一學侶沙汰衆淨順房闕跡へ宗禪房可有交旨決則畢、

一香觀房跡式之儀付、遺弟衆豐田方迄申事付、坊領被押置令迷惑條、有様爲學侶衆、仰屈

候而被下候者、可畏入由披露條、度々雖申届、慥返條無之間、無力事様可然旨、猶以書狀被

香觀房跡
式

禪長房得
業律師ト
ナル
伶人

申遣畢、

一禪長房得業律師仁可有轉任旨決則之條、則以書狀被申遣畢、

一伶人播磨、中務兩人借米無沙汰候條、反米可有抑留旨、專識房披露之間、則下行分押置可然

旨、兩奉行へ以書狀被申遣畢、

一五師田壹反地方北庄在之處、近歲無故白土方知行之由、才覺之條、不諾旨雖被申届、菟角

理非難究返條之間、理非爲究決、伯土方可有籠名旨決則畢、

一伶人中務、帶刀、後藤、若兩四人供米無沙汰之條、反米有抑留度之由、供目代披露間、反米不

可有下向旨(行)、兩奉行所へ被申遣畢、

一新唯識會御講米之儀付、被成目以外減少之間、不可然旨、爲學侶龍田方へ被仰届候者、可

畏入之由、從講衆披露間、右之趣、龍田方へ被申届畢、

以上

白土某五
師田ヲ押
領ス

供目代長
慶

(馬) 天正十二年 甲申十一月

學侶集會引付

供目代長慶

天正十二年九月二十二日

二八七

客坊集會
評定

中社御造
替

東室邊學
侶集會評
定

良勲房權
少僧都下
ナル
瓦屋談義
田

北市水納
本地子

天正十二年九月二十二日

天正十二年甲申十一月十六日、客坊集會評定曰、

一天下泰平、國土豐饒、寺社再興、爲此時之條、珍々重々一決畢、

一海河上、并關料以下諸國寺社領、如往代運上之條、十二大會、若宮神夏等可有執行之夏、

一中社御造替早速可有造畢夏、

同廿日、於東室邊學侶集會評定曰、

○一箇條略ス、春日若宮祭ノコトニ
カ、ル、十一月二十七日ノ條ニ收ム、

一良勲房權律師可有轉任權少僧都旨、一決畢、口宣之儀到來次第、可被遣之旨被申遣畢、

一瓦屋談義田給前□_○在之成古市方數年土貢無運上之條、度々以內儀申届處、無承引之間、今

一往申届、於同前儀者可有籠名之由、順禪房五師披露間、於無承引者、可及嚴重之儀之由一
決畢、

一北市水納過分ニ未進之間、本地子之儀從相應被沙汰、未進等運上於有之者、在様可有下行
之由、別會五師□々被命畢、

○一箇條略ス、春日若宮祭ノコトニ
カ、ル、十一月二十七日ノ條ニ收ム、

一岸田方寺門領無故抑領之間、被申届處、無承引不被及返條之間、今一往被申遣、以其上可有
籠名旨一決畢、○以上四箇條錯簡ノ疑ア
ルモ、姑クコ、ニ收ム、

出名

馬長頭役
輕服
除服

新沙汰衆

御廊承仕

○一箇條略ス、春日若宮祭田樂頭ノコト
ニカ、ル、十一月二十七日ノ條ニ收ム、

一西屋談儀田無沙汰ニ付、南郷方先段籠名之處、侘言之始末有之條、於相調候者、可有出名之
旨諾訖、

一淨璃理院知行之内河原方違亂之旨、先段披露之間、申届之處、于今不能返牒恣之間、被成籠

名者可被得意旨、重而披露候間、尙以被相究、於同前之儀者、可有籠名決則畢、名字之儀專

識房、延識房相認旨諷諫畢、

一願淨房得業馬帳頭役之處、被召仕良禪法師輕服之間、除服之儀預御許可者、可畏存之由披

露之間、許可者可畏存之由披露候間、許可之旨決則畢、

一本談義屋談義田古市三介作毛之所未進有之條、被納所□召使以催促之處、押而苅取恣之沙

汰、以之外之儀點札□□之段、自余之傍例不可許間、領主付而可及籠名旨被申遣畢、

一新沙汰衆宗禪房出仕之夏、來月廿二日被□□如先規御出仕可爲珍重之由、長實房僧都₂₂被

申遣畢、

一御廊承仕蓮舜住宅₂₂衆中發向之儀從中坊申懸之間、被仰届者可忝存之由披露之間、以書狀

被申遣畢、

以上

天正十二年九月二十二日

東室邊學
侶集會評
定

天正十二年九月二十二日

二九〇

大佛供布
施物

十三重田

東室集會
評定

室生寺龍
王社修理

同廿二日、於東室邊學侶集會評定曰、

一宗禪房沙汰衆被交こ付、今日吉日之間、則被出仕畢、

一向淵御講米并寺門反錢反米、多田方無沙汰之條、急度被仰付、尙於無沙汰者、令籠名可及調

儀旨、以書狀被申遣畢、

一中院大佛供布施物定使運上之内減少之間、爲學道六方衆へ被問答處、修理方^記可被寄相旨

返條之間、可爲如何旨牒送之條、修造之儀者、與興隆之儀間、被成同心可然之儀旨返、

一若宮移殿血氣被儀清祓之衰、早々被沙汰可然之旨、從社中牒送條、以勘略之儀可有沙汰之

旨返牒畢、

一十三重田中川^仁有之處、數度雖有催促無運上間、彼元下路次差塞之者、可奉存旨、納所披露

之間、供目代^記被命畢、

同十二月五日、於東室集會評定曰、

○一簡條略ス、春日若宮祭後日能ノコト
ニカ、ル、十一月二十七日ノ條ニ收ム、

一顯良房成敗之儀こ付良家中^并御房中披露之間、猥被生害段以外之間、被達御門跡御本意樣

可有御馳走之由、官符邊^記被申遣畢、

一室生寺龍王之御社以外破損付、去十二日於彼在所御詫宜有之、其趣者、御社壇内雨降之條、

早々可有造宮之由、興福寺可令注進由也、前々御修理造宮之條、如此大破之條、以勸進奉加
之儀、先以可奉成下遷宮之旨決則訖、然者長老坊下□□之如何、□□可令馳走之由納所□
可被申付之旨返牒畢、

同廿九日、於東室學侶集會評定曰、

一逆修坊納所闕如之儀、顯禪房得業奉行樣こ從筒井四郎殿披露條、則同心旨返牒被沙汰畢、

同日、客坊集會評定曰、

一本談儀春季納所松賢房得業^記可有奉行旨合點成滿條、則一決旨、以書狀被申遣畢、

一帳面^并印者可被相渡旨先納所跡^記以書狀被申遣畢、

以上

〔藥師寺舊記〕

○三 中下藤檢斷之引付
○大和

甲正月十二日、於七條郷ニ堂坊主處へ、白中ニ盜人伊賀者入了、則出合搦取、寺家へ渡了、

勸賞之義訴訟申處ニ、爲手前^與ヲトシアワセ、搦取ニハ、勸賞之義無之間、當座ニ地下へヒ

タ壹貫文粉糒^合在之者也、彼盜人座ニ同十四日マテ搦被置者也、番衆ハ公人以下地下人、番

衆入ノ夜、白二度ツ、現酒小半ツ、下行了、斷頭可有處、招提寺長老寺中座ノ前迄光儀

在之、詫言之間、宿へ渡、タフサヲキリハナシ了、同宿へ貳十疋、力代下行在之者也、仍中下

天正十二年九月二十二日

二九一

東室學侶
集會評定

筒井定次

客坊集會
評定

藥師寺中
下藤檢斷

鑑

盜人ノ髻
ヲ切ル

天正十二年九月二十二日

藤一決也、如件、

天正十二年甲正月十四日、

一同二月十日、九條鄉九郎五郎ト云男ト、同弟甚六ト云者ト令口論、既九郎五郎當座死去畢、抑言語道斷曲事次第也、然處彼兩家ヤネヲムクリ候間、手前逗留有之、ヤネヲキナヲサセ畢、兩家共ニ致放火畢、於向後ニモ堅固檢斷可有者ニテ、如此沙汰在之也、仍中下藤集會一決如件、

同年二月十一日、

一七條鄉先年甚五郎ト才衛門尉九郎令口論、相方相果了、然處、甚五郎者前被免除也、才衛門尉九郎ハ于今無免除也、然ニ只今令詫言候條被免除者、仍集會一決如件、

同年二月十一日、

一池水松田殿へ被進刻、七條神人源二郎作年預^レコ、五師田へ水盜入由被申、源二郎へ順慶之中間鍵責在之、五師田へ點札被申畢、寺家より被申理付、寺家之有様成敗可有旨被申間、則任寺法罪科可有之旨一決也、但彼源二郎一向無咎之由風聞之間、住屋放火事延慮^レ在之様に^{（松田）}と、松縫へも被申處、同心之間、除住屋代家之通ニテ小屋ヲ放火在之、自餘之儀ハ、任先規檢斷法式コ被沙汰了、今度者源二郎咎コ雖不必定、以權威堅固被申間、無力沙汰在之、依之

五師田ニ
水ヲ盜ミ
引ク

代家也、向後此代家之事ハ、聊以不可成引例旨、三輩一決也、年預五師田點札無事コ相濟畢、
天正十二年甲七月廿一日
一先年九條猶五郎男ト七條甚四郎男トムスメ事付出合、藤五郎カ二郎四郎男刃傷仕ニ付、自他神罰在之、二郎四郎男相果畢、于今免除無之間、只今詫言申間免除也、仍集會如件、

同年同日

〔藥師寺舊記〕

一上下公文所要錄

一天正十二年甲七月十九日、於地藏院集會評定曰、

尾州²²在陣夫錢コ付而、孫三土居之内コ在之兩人家、孫三菟角被申付、屬寺家存分砌者、兩人家壞可取也、其時菟角佗言族雖在之、同心不可有者也、但兩人家^仁善惡在之間、兩家一致コ夫錢於相濟者、其時之任評定、不可有其儀者也、仍集會一決如件、

一十二月八日、於金堂前集會評定曰、

鄉內家壞寺中²²入畢、依之地下公事人夫畢、先年地下ヨリ訴訟之刻ハ、雖入寺中へ、爲追公事、地下直公事可被懸旨一決了、任其旨、寺中入者近年追公事被懸了、然共非用公事ハ被除了、依之于今鄉田家ヲ壞、寺中へ入畢、所詮自今已後義者、雖入寺中へ、地下直コ非用以下大小公事分、皆以可被相懸旨、堅以一決也、若寺中住屋ニテモ、小屋ニテモ、借與仁於在之

天正十二年九月二十二日

地藏院集
會評定
夫錢
土居

金堂前集
會評定
追公事
日備公事

天正十二年九月二十二日

二九四

者、地下直ニ非用公事、向後其家主へ可被仰付、可爲郷内直ニ家之間、堅三輩一決了、則儘以郷内寺中エモ被申觸了、右之趣以來違反、改同、異義不可有旨、三輩任群義、各以連判相定了、仍三輩集會一決旨如件、

下公文

光尊(花押) 光英(花押) 堯秀 長弘(花押) 英弘 長英(花押) 宗忍 祐懷 長懷

賴憲(花押) 英尊(花押) 實弘(花押) 宗弘(花押) 尊弘(花押) 宗榮(花押) 懷善

(花押) 胤昭(花押) 印秀(花押) 尊胤(花押) 興專(花押) 雲英 胤經(花押) 專

胤(花押) 長照(花押) 英胤(花押) 堯宗(花押) 光弘(花押) 高懷(花押) 定懷

(花押) 善慶(花押) 正胤(花押) 胤弘(花押) 英助(花押) 賴嚴(花押)

近江長命寺、羽柴秀吉ニ祈禱札并ニ物ヲ贈ル、是日、秀吉之ヲ謝ス、

〔長命寺文書〕

爲音信祈禱札并 柿一折到來、祝著候、猶増田仁右衛門尉可申候、恐々謹言、

九月廿二日

筑前守 秀吉(朱印)

長命寺

秀吉様御見舞使僧被相越候、殊御祈禱御札并 柿一折御進上候、則披露申候處、以御書被仰出候、將亦我等へ柿一折送給候、御懇之至今祝著候、急候間書中不能巨細候、猶期後音時候、恐々謹言、

増田長盛

九月廿二日

増田仁右衛門尉 長盛(花押)

長命寺 御坊中

爲御音信、柿一折并御祈禱卷數被贈下候、寔遠路御懇情難謝候、猶御使僧へ申渡候、恐惶謹言、

淺野長吉

九月廿一日

長吉(花押)

長命寺 人々御中

○淺野長吉、長命寺ニ同寺領山林、坊屋敷ノ裁判ヲ認ムルコト、十一年九月十四日ノ條(補遺)ニ、長命寺、秀吉ニ祈禱札ヲ贈ルコト、五月十三日ノ條ニ見ユ、

二十三日、羽柴秀吉、姪羽柴秀次ヲ戒飭ス、

〔松雲公採集遺編類纂〕

天正十二年九月二十三日

二九五

秀吉ノ甥
タル覺悟
シテ持ツベ

秀次一頼柳
末安ニ賴
リテ秀吉
ニ津田監
物ヲ懇望

日下ノ如
クナラバ
秀吉自ラ
成敗スベ

秀吉養子
ナレハ病人
次ニ代メ
トセシメ

宮部繼潤
蜂須賀正

天正十二年九月二十三日

二九六

一此日比、秀吉甥子之令覺悟、人にも慮外之躰沙汰之限候、何れの者にもさし下、甥躰をみせ候へても、爲何者も秀吉甥と存、可崇候こ覺悟持專用候事、
一是以後者、秀吉不致許容、如無之こ可仕と存切候へとも、又ハ不便之心出來候之間、此一書を思出、書付候間、心もなをり、人にも人と被呼候こおいてハ、進退之儀右之外より取上可申事、

一今年木下助左衛門、同勘解由相付候處、兩人なからあとに殘討死不便候、兩人之もの殺候事、○助休、勘解由、長久手ニ戰死ス取分迷惑と可存處、其心ハ無之、一柳市助を以、津田監物とやらんをほしき由申候、縦秀吉誰やの者を預ケ候共、今度被成御預候もの一人も不殘、兩人なから討死いたさせ、我者のこり候之間、又御預ケ之儀、外聞迷惑之間、斟酌可申處、申させ候ものハ、中々不及申、取次候もの無分別の大たけと存、既市助めを手打こもいたし度と秀吉存、今迄言葉にも不出、腹中こよりこみ候て加遠慮候、能々致分別、諸事にたしなみ之候て、秀吉甥之されかと被呼候者、何より以可爲満足候間、右之守一書心持已下嗜尤候事、

一覺悟もなをり候者、いつれの國成共可預奉行候、只今之ことく無分別之うつけにて候者、命を助遣候とも、秀吉甥子之沙汰候而、於秀吉非可失面目儀候間、手討こ可致候、人をきり

候事、秀吉きらひにて候へとも、其方を他國させ候へは、はちの恥こて候之間、人手にハ懸申間敷候事、

一此中ハ人にも不云、器用又ハこさかしく物をも申付、武者をも可致と見及候者、御次ハ病者候之條、秀吉代をも可作○河井氏開書、寸錦雜錄、作ヲ爲ニ作ル、致歟とも存候こ、其方之様こ覺悟持仕候ハ、秀吉名字を不可殘と、天道よりのはからひにて候かと不及是非、さとりを構候間、くやみも無之候、

右五ヶ條之通、是以後分別候て嗜於無之者、八幡大菩薩人手こハ懸申間敷候、委細善淨房、蜂須賀彦右衛門尉兩人こ申含遣候間、せかれにて候共、○河井氏開書、せかれにもトアリ、其心得專用候、已上、

九月廿三日

秀吉(花押)

〔参考〕

〔武家事紀〕

續集 譜傳五 秀吉以書責三好秀次

九月廿三日、宮部善淨坊、蜂須賀彦右衛門ヲ以テ、九箇條ヲシルシ、秀次武義ノ覺悟ヲコタリ、秀吉ノ近親ニヨツテ諸人ニ無禮ヲナスコトヲ諷諫シ、且於長久手敗北ノ事ヲ責、○本書三古案、豊臣家上ニ、秀吉ノ書狀ヲ收ム、

大神宮祭主大中臣慶忠ヲシテ、其知行ヲ安堵セシメ給フ、

天正十二年九月二十三日

二九七

豐受皇大神
兩神宮主
等慶忠

〔外宮引付〕^上

○神宮文庫所藏

豐受皇太神宮神主

注進可早被達叡聞於兩宮神領中慶忠非分子細間之事、

右兩宮神稅就慶忠被相構、御供諸祭既及退轉之間、神宮悲歎不過之、然者彼慶忠於神宮難相
用祭主之旨、巨細別以一通所令言上如件、以解、

天正拾貳年正月日

正六位上度會神主久能^上

禰宜從三位度會神主貴彥

禰宜從四位上度會神主匡彥

禰宜從四位上度會神主完彥

禰宜從四位下度會神主朝直

禰宜從四位下度會神主貞德

彌宜從四位下度會神主貞副

彌宜從四位下度會神主辰彦

彌宜正五位下度會神主堯彦

彌宜正五位下度會神主

禰宜正五位下度會神主常晴

〔京都御所東山御文庫記錄〕^{甲百}

祭主知行之事

大神宮領祭主分之事、去年被立勅使、^{○勅使差遣ノコト}諸書所見ナシ、無別儀處、重而兩宮爲禰宜中及違亂之由、

太以曲事之次第也、早可退皮妨之由、^(後)堅可令下知給之由、天氣所候也、

天、

日野大納言所へ出度也、^(後)

天正十二年九月廿三日

サシシユ知行事也、^(イ)

○織田信雄、慶忠ニ替地ヲ與フルコト、十一年十月八日ノ條ニ見ユ、

金森長近、飛驒ニ出馬セントシ、石徹白長澄ニ書ヲ遣リ、同國ノ情勢ヲ報
ゼシム、

〔金森文書〕

○越前

尙以、無油斷注進專要候、將亦先日遣候案文之ことく、秀吉公へ之御返事相調、急々
待入候、飛驒之事窺何様候共、我々儀ハ、善惡郡上迄可出勢候間、右御返事一刻も、早

天正十二年九月二十三日

二九九

禰宜ノ違亂

羽柴秀吉
ヘノ返書
ヲ急ギ
フベシ
調

天正十二年九月二十四日

三〇〇

々相調可被申儀事一候、以上、

昨日之書中今日已刻到來候、其元取沙汰之躰、先注進之趣尤候、

一飛國之事右之分候ハ、早追々可在其聞候、重而之一左右儘ニ無之事不審千萬候、能々

聞届注進待入候、

一白河へ兩人遣候由尤候、飛國之儀河備方へハ、儘可相聞候間、白河方注進候者、是迄又々早

々此方へ可被申越候、

一牢人衆へ、無油斷才覺可在由可被申候、當面廳而開陳にて候間、早々様躰可被申越候、謹

言、

五八

長近(花押)

已刻(天正十二年) 九月廿三日

石徹白彦右衛門殿

○德川家康ノ將石川數正、東美濃ニ出デ、羽柴秀吉ノ兵ト戰フコト、十月十八日ノ條

ニ見ユ、

二十四日、丁酉德川家康ノ將本多廣孝、尾張陰葉印場郷天神社ニ禁制ヲ下ス、

〔朝見眩太郎氏所藏文書〕○尾張

禁制

一陰葉之郷天神社破取事、(東春日井郡)

一植木伐採之事、

一神主屋敷菜蘭執之事、

右條々於違犯輩者、堅可被加御成敗者也、仍如件、

本多豊後守

天正十二年九月廿四日

廣孝(花押)

近江坂本ノ淺野長吉、同國西教寺ヲシテ、惟住長秀及ビ杉原家次寄進ノ寺領ヲ安堵セシム、

〔西教寺文書〕○近江

以上

御札致拜見候、仍爲御音信、昆布百本被懸御意候、遠路御懇情難謝候、次御寺領之事、(惟住長秀)惟五郎

左殿、杉七(杉原家次)左寄進之筋目、今以不可有異儀候條、全可有御寺納候、於向後、不可有相違候、恐惶

謹言、

淺野彌兵衛尉

天正十二年九月二十四日

三〇一

天正十二年九月二十四日

(天正十年下開シ)
九月廿四日

西教寺
御報

長吉(花押)

三〇二

以上

態申遣候、仍西教寺へ惟五郎左殿、杉七左寄進在之分、今以無異儀令寄進候條、彼寺へ可有納所候、則帳面之外之旨候間、可被得其意候、恐々謹言、

彌兵衛尉

九月廿四日

長吉(花押)

志賀郡代

代官中

○長秀、寺領ヲ寄進スルコト、十年十一月三日ノ條(補遺)ニ、家次、寺領ヲ寄進スルコト、十一年八月二十四日ノ條(補遺)ニ見ユ、

島津忠平、義弘、軍ヲ肥後吉松ヨリ、同國高瀬ニ移ス、是日、忠平、高瀬ニ入ル、

〔上井覺兼日記〕 十九 九月、

一廿二日、武庫様御宿にて御談合也、明日御陳替之儀相定候、○下略、合志親重、人質ヲ出サントスルコトニカ、ル、本月二十一日ノ條ニ收ム、

伊集院忠棟上井覺兼高瀬ニ入ル

月待

小代ノ下拵ヲ破却ス

小代氏降ル
三池氏ノ内争

吉利忠澄

一廿三日、○中略、隈部親泰、其弟ヲ人質ニ出スコトニカ、ル、本月二十一日ノ條ニ收ム、從夫御打立也、(伊集院)忠棟、拙者ハ諸軍衆同道申、(玉名郡)高瀬へ打入候、武庫様、(征久)典厩、(龜虎)薩州、(忠孝)麟臺、右之御衆者、(玉名郡)山北へ御著候也、此日も足輕衆山々へ廻責候て、敵七八人討取候、此夜月待候也、

一廿四日、從早旦、諸所之衆堺目へ被指出候て、小代下拵まで破却候、敵少々被討取候也、武庫様を始、山北へ御一宿之諸軍衆、今日高瀬へ打入被成、忠棟拙宿へ御座候て、物語最中、武庫様御著之由候間、同前て武庫様御宿へ參候、良久爰元様子御談合共也、

〔古今戰〕○舊典類聚 十六所收

それより、小代かいま(龍造寺政家)たひせんかた申ほとにとて、すくにたかせへ御ちんかへ給へハ、小代とのもやかてかうさん申されにけり、しかもみけとのも、(三池)そしそうりうみけをあらそい、まつのみけとのをせきいたし給ふ、そのまゝらう入して、かうしにとりうし給ふか、此さつまのくんしゆたかせへ御ちんかへさせ給ふ折ふし、かうしより又みけへ打入て、此比のみけとのおい出し給へハ、ひせんのことくのかれにけり、去程にみけもはや一とも二ともなきさつまかたにそならせ給ふ、(和七)わに、(彦作)へ原、大津山とのもやかてさんちん申されけり、○上下略、合志、隈部、山鹿等、島津氏ニ降ルコト、並ニ龍造寺政家、島津氏ト和スルコトニカ、ル、本月二十一日及ビ二十七日ノ條ニ收ム、

〔諸家由緒〕

○舊典類聚 十三所收 吉利家由緒書

覺

天正十二年九月二十四日

三〇三

天正十二年九月二十四日

三〇四

一同九月、吉松を發、山北に打入、竹生之城被責取候時も、大將之内(吉和忠澄)と勵軍忠候事、

○島津氏ノ兵、隈本ニ集結シ、尋デ、吉松ニ陣替スルコト、本月十日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔明赫記〕 六 合志隈部宇動等屬旗下事

○上略、合志、隈部等ノ諸氏、島津氏ニ降ル。去共勝代未タ肥前方ナル間、高瀬へ御陣替有へシトテ打コトニカ、ル。本月二十一日ノ條ニ收ム。去共勝代未タ肥前方ナル間、高瀬へ御陣替有へシトテ打入、高瀬在番ヲソセラレケル、聽テ勝代降參申サレケレハ、美毛モ即參ラレタリ、美毛殿ハ庶子宗領ノ争ノ、前美毛ヲ追出セハ、窄人トナリ、合志ヲ頼テ居ラレケルカ、薩摩勢高瀬エ打入ノ折節、當美毛ヲ追出ス、肥前ノ如ク立退ケリ、前美毛古郷ヲ安堵ス、無二ノ薩摩方トソ成ニケル、夫ヨリ和仁、江原、大津山モ降參トテ參陣ス、筑後ノ大名ニハ、蒲池鎮宗、富饒鎮連、久留目林慶入道、黒木宗龍入道、同息ノ益種、溝口周防守益家、西牟田左近將監種純、星野、野、尻山執行良觀、筑紫上野守弘門、田原下總守茂種、筑前大名ニハ、秋月筑前守種實、高橋右近(大)大夫種春皆悉ク御旗下トソ申入ラレケル、龍造寺政家モ、薩摩ハ親ノ敵ナレト、身ノ大事ト見ケレハ、江島長門守ヲ入質ニ差出シ、頻ニ降參ノ由ヲソ申ケル、然ニ春野間ト云所ニ、惡黨等要途拵取籠リ、無道ヲ振舞ノ間、足輕トモヲ差遣シ、即追伐セラレケル、從夫高瀬表ノ諸軍歸陣ヲソ申サレケル、如此國ノ勢ヒモ強大トナレハ、諸方ノ大名郡司モ年頭歲暮ノ御祝言國

筑後ノ諸氏島津氏ニ降ル

春野間ノ一揆

々ヨリ申上ラル、其禮式仕合ノ威美事申計ナシ、去程ニ八朔ノ爲禮儀、宇都(上下同ジ)ノ使者罷出、太刀ノ前後ヲ争テ事煩ク成ニケル、宇都ノ使者先キニ立所ヲ、合志ノ使者素袍ノ袖ヲ引留ル、宇都ノ使者腹ヲ立、太刀目錄ヲ差捨テ、上ニ成、下ニ成、相撲ヲ取有サマ、餘リニ笑クソ見ヘタリケリ、

世錄記曰、天正十二年甲申、合志藏人、隈部但馬守、宇動左衛門尉欲屬薩摩、遣使間達太守義久公、由是八月二十八日、兵庫頭忠平公率軍旅、赴肥之後州隈元、而搆陣於吉松、當此時、赤星(隈部)、三池皆屬來、而後搆陣於瀨、則曰間野、大野、大津山、和仁、邊春、田島、鹿子木、東郷、小代來降焉、龍造寺肥前守正家亦以添島長門守爲質也、且筑後蒲池某等、草野宗養、星野九左衛門尉、筑紫ノ秋月種實、原田伊賀守來于麾下也、因茲兵庫頭忠平公歸陣矣、惟新公御記曰、肥後熊本城主菊池之苗裔親政雖豐州之舊好、可候當家由依申、天正十二年甲申、令進發隈本、對面親政、自夫著陣吉松、然ハ合志、赤星、隈部、三池、小代各相從之間、目出度令歸國畢、

二十五日、羽柴秀吉、竹田定加ニ命ジ、丹波龜山ニ赴キテ、養子次勝(秀勝)ノ病ヲ診療セシム、

〔竹田家譜〕 定加(定理三男、幼名松、宮内卿、竹田)、法印、隱居仕、光英と相改申候、

天正十二年九月二十五日

三〇五

天正十二年九月二十六日

三〇六

急度申遣候、御續相煩候間、早々龜山記可相越候、不可有油斷者也、

九月廿五日

御朱印

竹田法印

○次ノ病ニ依リ、内侍所ニ御神樂ヲ奏スルコト、十月十七日ノ條ニ見ユ、

一二十六日己、大乘院門跡尋憲、京都ヨリ奈良ニ歸ル、

〔多聞院日記〕三十一 九月廿二日、備衛召上彼是談合了、京ヨリ來廿六日ニ可有御歸座之

由被仰下了、

廿六日、大雨降了、大門様御下向了、經營申付之、

○尋憲、越前ニ赴クコト、八月十三日ノ條ニ、越前ヨリ歸京スルコト、本月三日尋憲ヲ法

務ニ補シ、大僧正ニ任ズルノ條ニ見ユ、

筑後築川ノ龍造寺家晴、肥前高尾ノ田尻鑑種ニ隔意ナキ旨ヲ誓フ、

〔田尻家譜〕七 田尻丹後守鑑種籠城之袁

一丹後守鑑種天正十二年九月同月廿六日、龍造寺家晴築河ノ城ヨリ神文ヲ送ル、其起請文ニ云、

再拜々々天罰起請文敬白、

一至鑑種老家晴深重可申談事、

鑑種ガ政
別心ニ對シ
家誓約アルハ
別心ニ對シ
家誓約アルハ
無効タルハ

一鑑種家時間龍造寺、讒人於有之者、邪正以糺明可相閉目事、

一龍造寺至政家鑑種老御眞實龍造寺罷成儀存寄候者、御入魂可申入事、但如此雖相定候、至政家御別儀之時者、不可有其實事、

右此旨於有僞者、

（未詳）
「神文有、略之、」

龍造寺上總介

天正十二年 甲申 九月廿六日

家晴 判

鑑種老 參、御返申上候、

○鍋島信生、誓書ヲ鑑種ニ與フルコト、六月九日ノ條ニ見ユ、

島津征久等、龍造寺政家ノ屬將白間野宗郷ヲ肥後小代ニ破ル、

〔上井覺兼日記〕十九 九月、

一廿六日、○中略、忠平等、政家ト和スルコトニ、此日島津征久典厩塚目御一覽とて御打出也、然者所々輕き人

衆多々被打出候、小代城之腰（宗郷）白間野方陳取搆被居候、其陳處破却候、宮崎衆拙者悴者一

番之由也、牆越之合戰共候、宮崎衆和田刑部左衛門尉、志布志衆久富伴五左衛門尉兩人に

て候、立合之衆者吾等悴者など也、數百人被討取候、宮崎衆分捕衆、中村内藏助、永山兵部

少輔、丸田左近將曹、唐仁原藤七兵衛尉、山下急介、海老原外記、指宿大炊權助、永山平内左

天正十二年九月二十六日

三〇七

牆越ノ合
戰

外野伏

合志親重ノ著陳

征久甲斐敦昌等ノ出兵ヲ停

限部親泰ノ質人交替

日置越後守ノ野心

衛門尉、村岡彌介、瀬戸山藤内左衛門尉、弓削治部左衛門尉、是者被手負、刀鏑疵三ヶ處也、拙者悴者分捕仕候衆、加治木治部左衛門尉、谷山仲左衛門尉、鳴海舍人助二人、永峯雅樂助三人、仁田脇伊賀極、安樂三介、山内彦四郎、佐藤二人、此外相討之衆なと多々也、勝土氣新納右衛門佐也、所々分捕之人數書載之餘有者也、此日當町諸口城戸之番、外野伏なと盛被成候、此日麟臺、平田濃州御宿へ御禮申候也、

一廿七日、義虎御宿へ御禮を參候、種々御會尺共也、昨日高名被申候人數召烈、武庫様へ罷出候、即御見參也、從夫終日御談合也、此日合志殿著陳也、武庫様被指出候、即御酒御寄合也、

○下略、忠平等、政家ト和スルコトニカ、ル、本月二十七日ノ條ニ收ム、

一廿八日、荒神へ別而看經申候、從武庫様御使候、隈庄、三舟之人數打立之由聞之候、爰元和平に罷成候之間、御人數へ不入之由候て、被留肝要に被思食之由也、即寄合中書狀にて留候也、此日も忠平様於御宿御談合也、限部質人弟に替合候也、

〔附録〕

〔上井覺兼日記〕 十九 九月、

一廿九日、忠平様より五代右京亮にて承候、日置越後守我々存知申候ことく、先年野心之儀候て、豊州御事も御知行なと過半被召上、御面目被失候、彼人之故候歟、然者水俣御著陣之

刻、喜入殿御申之儀共候哉、就夫太守様御兄弟衆へ彼越御見參も候する哉、如何之由共、御尋被成候、武庫様御返事にて、彼人へ御見參候處ハ乍勿論、御意次第こそ候すれ、豊州御事ハ、其時分御若輩にて何事をも辨させられぬ躰に候、彼越後無了簡迄にて、失面目なされ候上こ、所領等まで相違候、彼人へ深々敷被恨思と聞之候由御申上候、從夫菟角候つる哉、太守様無御覽候而、于今其分候、先日隈本にて伊集院肥前守、新武を頼被申候而、彼越御見參之由候へ共、忠平御事者連々御懇にて候へ共、當時ハ豊州無餘儀御事候、然者豊州へ深々敷無奉公之仁に候を、御見參とハ有かたく候、そと御尋被成、御返事可有之由候、又々爰元にて同篇に被申候間、豊州へ御尋なされ候へハ、彼越に御見參ハ何と様にも御校量次第候、若々豊州へ御見參なと、候ハぬ様こ、其故者、神文にて、彼仁向後御不快之段、鹿兒嶋へ御申上候、又者寂前野心被仰懸候條々如此候由共也、然共武庫様先々御見參被成候、さて豊州御存分等委可承置之由也、さてハ日越へ御見參共候する哉、就夫豊州へ御尋之通共細々被仰聞せ候、委承置候之由御返事申候、從義虎御使也、只今水鳥到來候、可參之由也、廳而參候、座躰、主居義虎、新武、伊肥州、同名伊與守、客居拙者、伊美、猿渡越中守也、種々御會尺共也、此日典厩御宿へ御禮申候、

○政家、肥後ヲ島津義久ニ致シテ降ルコト、本月二十七日ノ條ニ見ユ、

二十七日、庚子是ヨリ先、龍造寺政家、肥後ヲ島津義久ニ致シテ、和ヲ請フ、又大友義統ノ將戸次道雪、高橋紹運、使者ヲ島津忠平ニ遣シテ共ニ秋月、龍造寺兩氏ヲ討タンコトヲ勸ム、是日、義久、政家ニ和ヲ許ス、

〔薦野家譜〕三 豊後勢筑後國出張附道雪、紹運黒木出陣所々働の事、

一薩州衆肥後、有馬兩口_ニ出張必定候、頃玖珠郡至御座所以使僧、(種彦)秋月龍造寺事、此節豊薩被仰談、可被成御誅伐之由、被仰遣之由候、爲御存知候、(政家)○上下略、九月三日附薦野増時宛、戸次道雪書狀ニカ、ル、全文ハ、八月二十八日ノ條ニ收ム、

〔上井覺兼日記〕十九 九月、

一廿一日、○中略、隈部親泰、島津氏ニ人質ヲ出スコトニカ、ル、本月二十一日ノ條ニ收ム、又龍造寺与就和陸之儀、先刻秋月之兩使_ニ相添

被遣候使僧、又々秋月之使同心_ニ歸著候、肥後國少も不殘去上候て、和平奉頼之由也、政家永々御當家_ニ無違變、可爲御幕下之段、神載を以、被申血判也、次_ニ者豊後衆梁川近責寄候、

○大友義統ノ將戸次道雪、高橋紹運等、筑後築河、瀬高等ヲ火クコト、本月十一日ノ條ニ見ユ、彼方_ニ從爰御戰隔可目出之由、支而被申候、終日右之

御談合共也、此晚典廐拙宿_(征久)へ申請候、伊集院肥前守、本田刑部少輔、上原長門守御會尺_(尙近)頼申候、深更まで、御閑談候て御酒宴也、

一廿二日、○中略、島津忠平、肥後高瀬ニ陣替ヲ議スルコト、並ニ合志親重、降ルコトニカ、ル、本月二十四日並ニ二十一日ノ條ニ收ム、從秋月殿書狀預候、龍与和平之

事媒介候之處、御許宥忝之由也、彦山座主坊_(舜有)より書狀預候、池田總一懸預候也、此晚忠平様

彦山座主 舜有

政家義久ノ幕下ニナルベキヲ誓フ

戸次道雪等島津氏ト協カシテ龍造寺政家ヲ撃ツニ大友義統ニ獻策ス

拙宿へ申請候、忠長、(伊集院)忠棟御同前也、奥之山方、松尾方なと被參候、御茶湯會尺申候、御閑談共也、深更_ニ御歸也、

忠平等小代ノ處分政家へ返事義統ヲヘ議ス

一廿五日、天神へ別而讀經等祈念候、(忠平)武庫様於御宿_ニ御談合也、條數、一小代刷之事、一龍造寺和平之儀御返事之事、一豊州御返答之事、終日此等之御談合也、從豊州と候ハ、筑後表仕

合能候て、豊後衆梁川ちかく責寄、坂東寺へ著陣候、○戸次道雪、高橋紹運等、築河、瀬高等ヲ火クコト、本月十一日ノ條ニ見ユ、其衆之内戸次道雪、高橋入道_(細道)より兩使を以、爰元へ被申候數か條也、題目者豊薩彌御一致御異篇

無之様にとの儀也、又ハ龍へ御和平之由傳被聞候、是非共此度龍家御退治肝要之由也、御和睦ならハ右之兩人媒介申度之旨也、菟角當邦龍於御和平_ニ者、豊之陳衆可曳煩之所存と

聞之候由、御使衆被申候、今日御談合、小代事ハ一圓_ニ被召崩候て、可然之由半分又ハ甲參_(義久)と申上、先々被召出候て可目出之由、半分然者未定也、就御返事之事者、不及衆口候、太守

様御存分と申、又ハ政家既血判進上之上者、早々御和平候て、御幕下_ニ被召成、肥後國不殘此度御知行可目出之由也、備後日依時宜梁川、田尻邊までハ御所望も可有歟之出合也、

一廿六日、早朝龍造寺之返事可有由候て、忠棟宿へ麟臺、拙者參し候、御使穢新、上長同心仕候也、彼方にて朝食御振舞也、酒宴也、○下略、島津征久、白間野宗郷ヲ肥後小代ニ破ルコトニカ、ル、本月二十六日ノ條ニ收ム、

一廿七日、○中略、島津征久、白間野宗郷ヲ肥後小代ニ破ルコトニカ、ル、本月二十六日ノ條ニ收ム、此日龍造寺へ御返事被成候、穢新、上長也、肥

政家血判ノ誓書ヲ致ス

政家へノ使者ノ和上原尙近

忠平誓書
ヲ政家ニ
致ス

道雪等へ
返事

忠平ハ政
家ノ大友
氏及ビ龍
造寺氏部
下ニ對シ
ル處置ニ
同スベシ

大友氏へ
義絶ノコ
トハ遠慮
スベシ

政家副島
長門守ヲ
質トシテ
降ル

阿蘇氏ハ
降ラズ

天正十二年九月二十七日

後之事指上候由被申候間、先々其分にて御和平被成由也、武庫様より政家今之姿に向後無異儀候ハ、勿論自此方御愾變有間敷之段、神載を以御返事也、豊後儀絶之事ハ京都之御媒介にて、先年御和睦候間、菟角と難被仰候、○織田信長、近衛前久ニ頼リテ、島津義久ト大友義統トノ和ヲ計ルコト、八年八月十二日ノ條ニ見ユ、併龍秋月分別次第候、龍之事者從爰御見捨有ましき御返答也、

拾月、

一三日、毘沙門と別而讀經等仕候、忠棟宿にて豊後陳より戸次道雪、高橋紹運使被指上候御返答也、町田羽州、吉田作州使也、條々御あいしらいの御返事也、龍造寺と和平之儀秋月媒介を以、大方被仰談候、併無一著候條、耽落著之刻、從此方豊陳まで可被仰通之由共也、○下忠棟等、亂舞ヲ催スコトニカ、ル、十月二十一日ノ條ニ收ム、

一九日、如常、一昨日善哉坊越著候、豊後陳へ彼方御使僧可然之由、出合候間、此段申付候、○下

〔後薩藩舊記雜錄〕

十五 古御文書三番箱中 義弘公御譜中ニ在リ

起請文

一今度政家被改先非、當邦可爲幕下之由御懇望之條、向後於如此者、不可有變化事、一爲豊後其外分國衆中、到政家御進退、自然雖有謀略、聊無邪儀表裏可被致同心事、

一此節豊州へ儀絶之事、即刻雖可任其其趣、(行々)京都以御媒介一致之故、遠慮口能之事、

右條々令違犯者、

御譜ノ朱カキ
天正十二年九月歟、

〔古今戰〕

○舊典類聚 上略、島津忠平、高瀬陣替ノコトニされハ、りうさうしまさいへも、まつまハを

やのかたきなれとも、○龍造寺隆信、島津氏ノ兵ト肥後島原ニ戦ヒわかみの大事におよふゆへ、はや入しちにそへ嶋長門守をさし出、しきりにかうさんのおし申されけり、さあらハとて、やかてはたしたにめしなし、くんしゆへまつまのことく引給ふ、ちくこのかまち、くさの、ほしの、ちくし、あきつき、はら田まで、皆御はた下こそ申されける、めてたかりける折ふし也、されともいまたあそけハしたかはず、○下

○秋月種實、義久、及ビ政家ノ爲メニ、和ヲ講ジテ、成ラザルコト、本月十日ノ條ニ、肥後ノ合志、山鹿、三池等ノ諸氏、義久ニ降ルコト、同月二十一日ノ條ニ、島津征久等、白間野宗郷ヲ肥後小代ニ破ルコト、同月二十六日ノ條ニ見ユ、

二十八日、辛薦野増時、米多比鎮久等、立花統虎ヲ援ケテ、筑前立花城ヲ守ル、是日、大友義統之ヲ褒ス、

〔薦野家譜〕

三 豊後勢筑後國出張 附道雪、紹運黒木出陣所々働の事

天正十二年九月二十八日

天正十二年九月二十八日

三一四

道雪事至筑後表越山之條、留守之儀氣遣ニ存候處、其方被殘置之由候、攻口同前之辛勞令推察候、彌無油斷堅固之格護肝要ニ候、必追而一段可嘉之候、(實カ)恐々謹言、

九月廿八日

義統 御判

薦野三河守殿

〔米多比文書〕

○筑後

(懸紙、書)立花三左衛門前ノ名也、

米多比新藏入殿

義統

(増長切封)

道雪事至筑後表越山之條、留守之儀氣仕存候之處、其方被殘置之由候、攻口同前之辛勞令推察候、彌無油斷堅固之格護肝要候、必追而一段可賀之候、恐々謹言、

九月廿八日

義統(花押)

米多比新藏入殿

〔木下文書〕

○筑前

(折封、ハ書)

木下掃部助殿

義統

道雪事至筑後表、越山之條、留守之儀氣仕存候之處、其方被殘置之由候、攻口同前之辛勞令推

察候、彌無油斷堅固之格護肝要候、必追而一段可賀之候、恐々謹言、

九月廿八日

義統(花押)

木下掃部助殿

〔筑後立花家譜〕

坤

宗茂

(天正)

十二年甲申八月鑑連、鎮種往テ筑後ノ叛族ヲ伐ツ、時ニ宗茂立

花ノ城ヲ居守ス、秋月種實間ヲ伺ヒ、兵ヲ率テ來リ侵ス、城ヲ距ルコト三里、留テ次ス、將ニ明日ヲ以テ、城ヲ攻ントス、宗茂是ヲ聞、蔣野參河、米多比五郎次郎ニ謂テ曰、汝等宜シク夜ニ乘シテ其營ヲ斫ルヘシ、參河曰ク、城固ク守備ル、逸ヲ以テ、勞ヲ待ツハ、全勝ノ策ナリ、今敵兵強盛宜シク出戰フ可ラス、宗茂曰ク、奇ヲ出シ勝ヲ制スルハ、兵家ノ要法ナリ、敵モトヨリ、吾年少ヲ侮ル、其備無キニ乘シ、輕騎ヲ以テ掩擊セハ、必勝ノ道ナリ、汝若シ往コトヲ欲セスンハ、吾自ラ往ン、參河大ニ服ス、乃五百騎ヲ率ヒ、軍ヲ潜テコレヲ襲フ、敵果ノ備無シ、參河火ヲ敵營ニ縱キ、鼓譟ノ而ノ入ル、種實胡床ニ據テ指麾ス、將士皆殊死奮戰ス、五郎次郎兵二百ヲ率ヒ背ヨリ夾擊ス、敵遂ニ敗走ス、首ヲ斬ルコト三百餘級、後種實數來リテ侵掠ス、宗茂每戰コレニ勝ツ、

〔立花系傳〕

五 宗茂公戰功略記

筑前立花麓在糟谷郡

天正十二年甲申八月、

天正十二年九月二十八日

三一五

先是七月、道雪公軍于筑後、秋月、宗像、原田、麻生相俱欲攻立花城、今夜陣于城外三里所、公聞之急命薦野、米多比等、乘夜襲彼陣焉、敵兵大敗、凡殺敵三百、

○戶次道雪、高橋紹運ト共ニ、筑後猫尾ノ攻圍ニ參加スルコト、八月十九日ノ條ニ見ユ、大友義統、筑後古賀ノ稻員安守ノ忠功ヲ褒ス、

〔稻員家記舊題家勳〕○筑一天正十二年甲申春、黑木兵庫頭家永降龍造寺隆信、而以稚子四郎丸

爲質子、相副釜瀨大和守屬龍造寺、因茲從豐州志賀常陸守鑑綱入道道雲爲大將、攻黑木猫尾、高牟禮兩城、隆信援兵成富十右衛門茂安爲先、依大勢突出攻懸、志賀軍敗北而歸豐州矣、

同年春三月廿四日、隆信於肥前國高來郡嶋原、爲嶋津中務太輔家久被討、○龍造寺隆信、島津家久ト戰ヒテ敗死スルコト、三月二十四日ノ條ニ見ユ、乘此弊秋七月十三日、自豐州朽網三河守入道宗歷、志賀太郎親次爲大將、

攻黑木城、然城堅而難容易潰、○義統ノ兵、筑後猫尾ニ黑木實久ヲ及秋八月、高橋主膳兵衛尉鎮種入道紹運、戶次伯耆守鑑連入道道雪在筑前國岩屋、立華兩城、不忍聞之、同月十八日、兩將出岩屋、立華、赴黑木、而加豐後陣矣、○道雪、紹運、筑後猫尾ノ攻圍ニ參加スルコト、八月十九日ノ條ニ見ユ、同月廿四日、豐軍之將替

陣于權現山矣、高良山大祝保真、座主良寬、大宮司孝直、甘木四郎家長、稻員安守、爲後詰加豐軍矣、○道雪、紹運等、筑後ノ諸所ヲ侵シ、高良山座主良寬、之ニ應ズルコト、八月二十八日ノ條ニ見ユ、秋九月四日之夜、黑木大老椿原式部丞鬮心而

延敵於城中、依自内反亂、遂翌日落城、而家永伏誅矣、○筑後猫尾陷ルコト、九月一日ノ條ニ見ユ、同五日、豐軍陣於川崎、柳嶋村東岡上、山下城主蒲池鎮運、川崎重高降參矣、○蒲池鎮運降ルコト、九月十一日ノ條ニ見ユ、同九日、本川、瀨高、

家永ノ臣
椿原式部
丞應雪

黑木家永
龍造寺隆
信子隆
信九子隆
郎永子隆
信九子隆
ス

鷹尾、田尻、賀井津、榎津、酒見、廣池、生津、西牟田打廻之、皆爲味方矣、○道雪、紹運等、筑後ノ諸日及ビ九月十一日ノ條ニ見ユ、同十五日、豐軍陣坂東寺矣、柳川城龍造寺家治隆信、支持之也、冬十月三日、豐軍在陣高良山也、○道雪、紹運等、筑後高良山ニ陣スルコト、十月三日ノ條ニ見ユ、此時自豐州至稻員安守賜感狀、其狀曰、

今度其國上下之者惡逆之企、不及是非候、然者安守事須路之覺悟深重之由感悅候、殊黑木表被差登之由、御辛身勞力ニハ、勞察勞力ニ作ル、存候、彌可預馳走事可爲悅悦、同上書ニハ、祝祝、同上書ニニ作ル、著候、必其堺取鎮、一稜可賀之候、猶朽網三河入道可申候、恐々謹言、

九月廿八日

義統御判

稻員式部丞殿

二十九日、壬寅佐田鎮綱、筑後ニ於ケル戰捷ヲ賀シ、大友義統ニ物ヲ贈ル、是日、義統、之ニ答フ、

〔佐田文書〕九○肥後

一佐田彈正忠殿

義統

筑後表之儀、彌得勝利候之條、祝著深重候、猶以加下知候間、彼表案中不可有程候、仍爲音信鮎一折送給候、令悅喜候、每々御懇切之儀不及申候、委細猶浦上長門入道可申候、恐々謹言、

天正十二年九月二十九日

三一七

鮎一折
浦上道册

天正十二年九月是月

九月廿九日

佐田彈正忠殿

義統(花押)

三一八

○大友宗麟、同義統、鎮綱ニ隔心無キ旨ヲ述ブルコト、十一年七月十五日ノ條ニ見ユ、是月、比叡山横川ノ良信、同所中堂再建ノ爲メ、諸國ニ勸進ス、

〔曼殊院文書〕

○山城

勸進帳彙

勸進沙門叡山横川中堂僧正良信、請下仰乎國々、助成、憑乎人々、合力、奉中再興比叡山横川、中堂上之狀、

夫伽藍起立、紹隆太本、殿堂造功、流傳基趾、然則白馬寺前、漢帝花龜妙之分、色、班鳩宮裏、欽明、月權實之交、露、粵當院者、楞嚴不二、定崛、法性蘇陀、幽峯也、抑中堂嘉祥元年起立、慈覺大師、草創也、本尊是大師自造、聖觀音、遠沾妙道、摩訶薩也、此是應于天子本命之淨場、冥于鎮護國家之勝所、乎、何矧日本吾朝者、觀音有緣、國土也、依之天照太神以觀世音、有下仰御本地之習、然間十之八九、奉崇觀音、威神乎、剩臨于杉洞、勵妙行、諸神番役、十羅輔佐、回國行者、法花奉納之源、運步、緇素、聞法結緣之地、王臣崇重、年舊、道俗、欽仰日尙、然而世移、乎澆漓、時暨乎濁亂、長等、阻鬪、于弓箭、唐崎、濱、于鉞、梶、聿、明、智、郡司、讓、倭、固、蠹、兵、火、忽、發、佛、閣、神、舍、悉爲烟雲、學室僧房、只殘礎石、其已來山爲虎狼棲、麓爲牛馬牧、嗚呼、嶺嵐徒吹、谷水空流、

横川中堂僧正良信

横川中堂僧正良信

横川中堂僧正良信

横川中堂僧正良信

勸許ヲ得テ假殿ヲ構フ

而已、然而神爵徹于骨髓、不圖討于大將、因果早翻、今亡二秀吉、武運既盡、果隨兵、一天鎮而四海治畢、誠同高祖討于秦皇、保四百歲、太子亡于守屋、理七百季、乎、然天正第十冬、天權現再現、神威、猿猴竊听、巖上、智地玄奧、感懇誠、終顯、斯謂歟、爰以學侶、忝蒙勸許、先構于假殿、傳聞、漢朝、玄法寺、回祿已後、加光榮、既有改盛之舊規、豈无廢而興之現證、乎、肆、再造思、雖春於肝膽、巧匠企難、促於土木、古德曰、自力不前、借佗救助、文、縱雖寸釘尺木、不可輕、九層臺起、自累土、亦雖片竹半繩、不可洩、千里行始、于足下、經曰、天帝釋王、翻于堂閣、建立福力、感切利天宮、須達長者、依祇園精舍經營、視兜率內院、先蹤既爾、後輩何虛耶、仰願、一天邪雲普收、兮、諸堂再興、早遂、四海逆浪皆平、兮、百姓朝暮煙厚、伏請、結緣與善人、現世蒙山王之加護、一宗一門、榮花任意、當生預觀音勢、至引攝、上品上生蓮臺、結、跌、都而不信、誹謗、族不沈、生死海底、有到涅槃岸上、仍勸進狀如件、

天正十二年九月日

勸息敬白

○織田信長、比叡山ヲ火クコト、元龜二年九月十二日ノ條ニ、正覺院豪盛等、再興ノ爲メ、諸國ニ勸進スルコト、十年十二月十二日ノ條ニ、横川惠心院建立勸進ノコト、十二年八月四日ノ條ニ見ユ、

豐受大神宮、同宮領伊勢安濃郡卯杖饗料御厨ヲシテ、上分ヲ徵納セシム、

天正十二年九月是月

三一九

〔松本文書〕

○京都大学所藏文書所收

應宣

可任早先例、員數致催促沙汰、令勤仕神役外宮御領當國安濃郡卯杖饗料御厨當年上分之
間亥、

右件御厨者、往古以來爲嚴重神稅在所者也、然早木員數任先規、遂究濟徵納、可令專式日神役
勤狀、仍所宣如件、以宣、

天正十二年九月 日

- 禰宜度會神主(花押)
- 禰宜度會神主(花押)
- 禰宜度會神主(花押)
- 禰宜度會神主(花押)
- 禰宜度會神主(花押)
- 禰宜度會神主(花押)
- 禰宜度會神主(花押)
- 禰宜度會神主(花押)
- 禰宜度會神主(花押)

禰宜度會神主

禰宜度會神主(花押)

羽柴秀吉、伊勢ノ地ヲ諸將ニ頒ツ、

〔校本松坂權輿雜集〕

上 第壹 御城郭之部

羽柴筑前守秀吉知行割之事

知行割目錄

一 壹志郡高

六万貳千八百六拾六石八斗六升之内、北ニ付ル、

三万石

民部少輔殿自分

三千石

榊原

貳千八百石

藤方

五百石

長野左京

五百石

水谷

三千石

河北左助

貳百石

無軍役シイナ 垣川次助

合四万石

天正十二年九月是月

小島民部
少輔

藤方朝成
長野左京

天正十二年九月是月

三二二

松ヶ嶋廻より、(多氣力)たげ谷まで北ニ付ル、算用次第貳万貳千八百六拾六石八斗六升

蒲生飛驒守(殿秀)

蒲生賦秀

飛驒守

一飯高郡

貳万八千百五拾九石六斗

一飯野郡

壹万六千三百貳拾石三斗八升

一多氣郡

貳万四千百八石貳升

飯野多氣兩郡

合四万四百貳拾八石四斗之内

三万四百貳拾八石四斗

飛驒守

御藏入 壹万石此内

上部越中(貞永)

御藏入 上部貞永

一渡會郡

貳万八千七百石九斗七升之内

三千七百石九斗七升

飛驒守

田丸直息

壹万五千石

田丸(直息)

九鬼嘉隆

壹万石

九鬼(嘉隆)

關一政

一八千石

關本知分(一政)

河曲郡神戸之内を以、

一貳千石

同新知

合壹万石

大和宇多郡一圓ニ飛驒守ニ遣ス内、

一壹万三千石

澤(源六)

秋山(右近將監)

芳野(宮内)

芳野宮内

將監

秋山右近

賦秀與力

澤源六

飛驒守自分與力
合拾貳万三千百五拾五石

以上

筑前守

天正十二年九月是月

三二三

天正十二年九月是月

天正十二年甲申年九月

秀吉朱印

三二四

○秀吉、蒲生賦秀、生駒親正、織田信包等ニ、伊勢ノ地ヲ與フルコト、六月十三日ノ條ニ見ユ、

羽柴秀吉、尾張光明寺ニ禁制ヲ下ス、

〔光明寺文書〕

○名古屋溫故會繪葉書第六十五輯所收

禁制

尾州光明寺

一當手軍勢甲乙人亂妨狼藉之哀、

一放火之事、

一對百姓不謂族申懸事、

右條々堅令停止訖、若違犯之輩在之者、速可處嚴科者也、仍下知如件、

天正拾貳年九月 日

筑前守(花押)

美濃兼山ノ森忠政、同國愚溪寺ニ禁制ヲ下ス、

〔愚溪寺文書〕

○美濃

禁制

愚溪寺

一甲乙人等濫妨狼藉之事、

俗人借宿
祠堂物
德政

一伐採山林竹木事、

一於山林殺生之事、

一山林放牛馬事、

一於寺內俗人借宿并軍勢取陣事、

一寺家造營物并祠堂物德政之事、

一於後々寺家へ萬用物并要脚以下、無謂新儀之諸公事等之事、

右條々堅令停止訖、若於違背之輩者、可處罪科者也、仍下知如件、

天正十二年九月 日

忠政(花押)

○忠政ノ父長可、尾張長久手ニ戰死スルコト、四月九日ノ條ニ見ユ、

天正十二年九月是月

三二五

天正十二年十月一日

十月小盡
甲辰朔

三二六

一日、甲辰大友義統、衛藤統門ノ筑後在陣ノ功ヲ褒ス、尋テ、又志賀紀伊介ノ功ヲ褒ス、

〔大友家文書錄〕

六義統

天正十二年十月、義統給感書、賞衛藤統門、志賀紀伊介筑後軍勞、

今度至筑後表、臼杵越中守以同心、從最前遂在陣、殊於所々軍勞之由感入候、彌可被勵馳走之事肝要候、必追而一段可賀之候、恐々謹言、

十月一日

義統在判

衛藤統門又右衛門尉殿

志賀鎮隆

今度至筑後表、志賀兵庫頭鎮隆以同心、從最前遂在陣、於所々軍勞之由感入候、彌可被勵馳走事肝要候、必追而一段可賀之候、恐々謹言、

十月三日

義統在判

志賀紀伊介殿

肥後筒嶽ノ小代親泰、島津義久ニ降ル、是日、義久ノ弟島津忠平、義弘親泰ヲシテ、本領ヲ安堵セシム、又同國隈府ノ隈部親泰、筑後邊春ノ邊春鎮信等、

忠平ニ謁ス、

〔上井覺兼日記〕

十九

九月、

一廿九日、○中略、島津義虎等、酒宴ヲ催スコト、城一要、加屋九郎殿同心にて、拙宿へ禮被成候、御酒參

會候也、此晚武庫様御宿へ參候、從小代質人指出御奉公之由申候、兩人共親孝こ小代一家衆也、

從此方之使僧忠平こ打付、質人指出候、進退之儀何と様にも、御助預へ孝介き由也、此等之御物語最

中、青鷲到來候條、暫我々可罷居之由候て御振舞也、忠平麟臺、喜入殿、我々也、御酒宴にて御閑

談共也、

一卅日、拙宿にて、各々御酒參會候、座躰、客居平田左近將監殿、伊美、吉田美、伊地知伯州、主

居新武、新精忠元町田久信町羽、拙者、伊野州、酒宴にて閑談也、宇土殿拙宿へ禮儀也、御酒參會候、加悦飛驒

守座新精忠元町田久信こ召出候也、此日も堺目へ人數不出様こと稠差留候也、

拾月、

一朔日、看經等別而仕候、各御禮など承候也、武庫様へ御禮忠平こ參候衆中同心申候、皆々被懸御

目候也、麟臺御下忠平こ參、武庫様へ金瘡之醫術得御意始候也、此日御談合候、小代落著之儀共

也、先々押領之分者被召上、本領被下候而、今分親孝こ小代家被殘候て可然之由出合候、隈部

殿、邊春殿鎮信自身被指出候、武庫様へ被參候、即御見參也、甲冑進上と見得候、御酒御寄合也、

天正十二年十月一日

三二七

小代親泰
質人ヲ出
ス

名和顯孝

金着ノ醫
術泰ノ押
領分ハ召
上テ親泰
隈部親信
邊春鎮信

天正十二年十月一日

三二八

我々も禮也、太刀、百疋預候、留守にて對面不申候、從小代御禮(我)ニ兩使指出候、穢所(穢)新介、白濱次郎左衛門尉意趣被聞候、邊春殿禮に被來候也、白麻甘帖預候也、

一六日、○中略、合志親重、覺兼ニ物ヲ贈ルコトニカ、ル、九月二十一日ノ條ニ收ム、此晚小代殿禮に被來候、太刀、馬預候、并白間野殿同心也、鳥目百疋預候也、兩人共ニ御酒寄合候也、

〔後薩藩舊記雜錄〕 十五

尙々、小代よりは質人ハ、はや／＼被指出候、其上今日ハ舍弟ヲ可被指舉之由候、自身可被參事ハ五日之内たるへく候、

去朔日ニ隈部方被致參陳、武庫様始各被成御見參候、其外和仁、邊春も自身被遂祇候、無殘所屬平均候、尤肝要存候、

一從肥前(龍造寺政家)モ、五日中ニ兩質ヲ可指出之由、相聞得候間、其節迄者、此表に諸軍衆も被相支、可被聞召合之由候、

一三船、隈庄衆從吉松陣易之刻、○忠平、軍ヲ肥後吉松ヨリ同國高瀬ニ移スコト、九月二十四日ノ條ニ見ユ、不參候て殊更到堺目、惡振舞等多々候之間、先々此節ハ、兩所之人衆ハ然与可被罷居之段申通候、爲御存知候、

一小代之儀一兩日中可罷出之由候、猶巨細者追而可申入候、恐々謹言、
(天正十二年カ)
十月三日
覺兼(花押)

甲斐宗運兄弟ノ態度

忠棟(花押)
忠長(花押)

圖書頭

伊集院右衛門太夫

上井伊勢守

本多下野守殿御宿所

上封

○肥後ノ合志、山鹿、三池等ノ諸氏、忠平ニ降ヲ乞フコト、九月二十一日ノ條ニ、義久、龍造寺政家ノ和ヲ請フヲ許スコト、同月二十七日ノ條ニ見ユ、

二日、美濃清水ノ稻葉一鐵、領内ノ檢地ヲ行フ、是日、之ヲ老臣那波直治ニ命ズ、

〔美濃那波文書〕 〇美濃

去年以判形支配候分、檢地可申付由尤候、一宮ニ遣分不及申候、入くみ候共、互ニ分々可扶持候上者、堅遂糺明可申付候、自然誰々雖爲家來知行、糺明之條急与可申付候、於出來分爲新給申付候、陣役已下嗜肝要候、其方へ遣候分者、右京亮、彦六かたへの判形之外候、可得其意者也、

出來分ハ新給トシテ與フ

天正十二年十月二日

三二九

天正十二年十月三日

天正拾貳

十月二日

那波和泉守殿

一鐵(花押)

三三〇

○秀吉、知行目錄ヲ一鐵ニ與フルコト、十一年十一月十三日ノ條ニ見ユ、ナホ一鐵等、美濃某寺ヲシテ、其知行ヲ安堵セシムルコト、便宜左ニ合致ス、

〔續古文書類纂〕

二 常在寺
○美濃

御寺之儀、上様、城介様以來御抱之儀候條、聊不可有別義候、仍而狀如件、

右京亮

天正十二年八月日

貞通(花押)

一鐵(花押)

○宛所
ヲ關ク、

三日、^{丙午}大友義統ノ將戸次道雪、高橋紹運等、軍ヲ筑後高良山ニ移ス、尋デ龍造寺政家ノ領邑草野、妙見、井上等ヲ攻撃シ、又秋月種實ノ領邑ヲ侵ス、

〔薦野家譜〕

三 豊後勢筑後國出張、附道雪紹運黒木出陣所々働の事

草野重永
父子敗退ス

○上略、道雪、紹運等、筑後築河、西牟田等ヲ攻ム、十月十三日、諸軍を高良山に打入れ、暫く入馬をやすめ、^{符カ}十月十一日ノ條ニ收ム、^{いやなか}十月十三日、諸軍を高良山に打入れ、暫く入馬をやすめ、草野か城に取かけ手強く攻けれハ、草野長門守重永、其子親永防きかねて、城をすて、甲の丸

田原親家
秋月破ラ
兵退ク

大友氏ノ
諸將高良
山等ニ於
テ春ヲ迎

薦野増時
統虎ノ後
見トシテ
立花ニア

義統玖珠
郡年スベ
親家ハ日
田郡ニ在

發心か嶽へ引籠りける故、城を燒拂ひ、星野、問註所か領内へ働き、在々を放火し、城々に押

へ勢を置、惣軍筑後川を打渡り、秋月領内に押入り、甘木、^{あまふづ}甘水、^{いやなか}彌永まで燒拂ひけり、此時田

原親家ハ、手合せのため、日田郡へひかへけるか、道雪、紹運、秋月表へ働きの注進を聞て、上

座郡へ打出しか、秋月勢に戦ひ負て、日田郡に引退く、搦手の軍利あらざる故、道雪、紹運諸

將と相議し、秋月表を引拂はる、斯て今年も戎馬の間に暮けれハ、諸將高良山、柳坂、北野村

邊に陣取て、^{あらたま}改の春をそむかへらる、秋より冬に至て、大友勢の猛勇の働、近年の珍事也と

人々申ける、是偏に道雪、紹運の武功に據るものそかし、誠に蒼蠅驥尾に附くの類ひなるへ

し、此たひの出陣に、^{當時}薦野三河守ハ、統虎の後見として、立花城に残し置く、三河守嫡子彌

助成家、三河守か弟勘解由丞ハ出陣す、又三河守名代として、安部六彌太と言士をつかハし

ける、○中略、安部六彌太ノ戦功ノコトニ

尙々、此表之儀用口上候條、段々不申候、又從勘可被申候、^{且カ下同ジ}安部六彌太

や、三ツ取申候、無比類との申事候、

態用一書候、先日者、就題目預御使候、畏悦之至候、其以後如何候哉与存斗候、依到來早々御

注進可目出候、仍而此表聊無異儀候、可御心安候、來春御行爲可被指急、^{大友義統}屋形様於玖珠郡被成

御越年候、親家御事も日田郡、在陣候、兎角改候ハ、早速至秋月可被取懸御議定候、爲御

天正十二年十月三日

三三一

天正十二年十月三日

三三二

存知候、將又御書三通指遣候、定而統虎渡可申候、勝々安部六彌太戰死之御書未無到來候、必相調候而可進之候、此節彼仁別而粉骨之段達上聞、至增時^(豊野)何様取合不可有餘儀候、爲御心得候、恐々謹言、

十一月廿四日

道雪御判

薦野三河守殿

今度道雪至黒木表越山之刻、安部六彌太事爲名代被指副候之處、於彼表分捕及度々戰死之由候、忠儀之次第無比類候條、感心不淺候、必取鎮、至其方一稜可賀之候、恐々謹言、

十二月廿三日

義統御判

薦野三河守殿

〔高橋記〕

廿一下筑後上妻郡御陣替^并豊州衆心持違被打入事

略^{上(天正十二)}同年十月三日、高良山ノ如ク御陣替ニテ、追付草野ニ取懸ケ、家治^(鴨)ヲ發心^{ホウシシテカ}兵ニ追上ケ、其後星野、門住所^(同)ヲ追コミ、誥城^(誥)ニナシ、上筑後殘所ナク燒拂、依之敵方諸家共ニ、豊州方ニ心ヲ靡カス者多ク出來ル所ニ、田原親家心持違ヒ、御弓箭心ニ不染、如豊後可被打入ト見タリ、親家此下心ハ、縦御弓箭向後被得勝利候共、道雪、紹運ノ武功ニノミ也、豊州ノ者共如何ニ軍

勞ヲ盡候共役ニ立ズ、只人ヲ彩色タルマテニテ、側ヨリ隣ノ寶ヲ算テハ、不入者ト私欲出候ハ、偏ニ豊後家モ末ニ成タルトソ見エケル、紹運公、道雪公此儀内々被聞召付、天魔ノ所行無疑トソ被營ケル、如此邪路ノ心起リ候へ共、政道ノ仕手モナク豊州衆打入ラレ候間、道雪公、紹運公捨子ニ御ナリ、十方ナキ仕合也、然共良寛、鎮連ヲ見捨ラレマシキ由ニテ、先秋月ニ取懸、甘木、檜原、甘水ヲ放火シ引飯ル、其年モ早暮レ、高良山ニテ御越年也、

〔立花記〕

九道雪公紹運公御征伐筑後袁

○上略、道雪、紹運等、筑後築河等ヲ攻ム、^(天正十二年)十月三日ニ道雪、紹運其外豊府ノ諸將高良山ニ陣營ノ、同四日ニ、草野長門守家清カ居城ヲ破、一炬ノ煙ト燒拂フ、家清父子兼テ構置シ發心嶽ニソ籠リケル、夫ヨリ星野カ居城ヲ責破リ、秋月治部少輔ヲ甲ノ城ニ追込、近邊ヲ燒拂フ、尤強戰ナリケレハ、戸次兵部少輔鎮北^(北)其外雜兵アマタ戰死ス、城々ニ押ヘヲ置、秋月領ニ押入テ、甘木、彌永邊迄燒働メ、師ヲ治テ歸、又三瀦所々ノ殘黨ノ城々ヲ屠リケリ、此時西牟田ノ要害ニテ、阿部六彌太多ノ分捕高名ノ、鐵炮ニ中リテ戰死ス、或時戸次治部鎮直主從五六人ニテ、斥候ノ爲ニ出ケルカ、秋月師是ヲ見テ、百餘人墮ト喚テ追カ、ル、治部少輔是ヲ見テ、田ノ畔ニ走リ上リ、矢トツテ打ツカヒヨク引テ發シケレハ、一町餘ヲ射通シ、敵ノ上ヲ鳴ワタツテソ越ニケル、鎮直田ノ中へ飛ヲリ、二ノ矢ヲツカヒ射テケレハ、一町計ニ進ミ來ル鎧武者ノ胸板

天正十二年十月三日

三三三

道雪ハ北
野ニ紹運
ハ赤司ニ
陣ス

天正十二年十月三日

三三四

ヲ射通、夫居ニトウト倒レハ、此箭一筋ニ恐テ、敵トモ一所ニ打寄、イロメキ立テ見ヘケレハ、鎮直又矢取テ打ツカフ、新右衛門カケ來、治部少輔誤レリ、足下ノ箭ハ我々カ命ナリ、一筋モ大切ナリ、敵ハシラミタルソ、退玉ヘトテ、打テカ、リケリ、其後道雪ニ北野村ニ陣營ノ、紹運ハ赤司村、其外豊劔ノ諸將ハ高良山柳阪ニ陣營シテ、秋月、龍造寺ト度々ノセリ合ニ、立花高橋兩家ノ士卒ヲクレヲ取コトナカリケリ、○下

〔筑後立花家譜〕

坤

鑑連○中略、道雪等、筑後西牟田、和仁等ヲ略スルコトニカ、ル、九月十一日ノ條ニ收ム、

十月三日、

鑑連諸將ト兵ヲ率ヒ

テ、高良山ノ營ニ至ル、四日、鑑連及ヒ高橋鎮種、草野重永ヲ攻ム、重永父子戰ヒ敗レ、城ヲ棄テ、走リテ發心岳ニ保ス、因テ火ヲ縱チ、其城ヲ焚キ、星野、問註(註)所ノ邑ヲ侵シ、盡ク廬舎ヲ焚キ、兵ヲ留メテ、諸城ヲ遏ノ出ルコトヲ得サラシム、軍ヲ率テ、筑後河ヲ濟リ、秋月ノ界ニ入り、焚掠シ、甘木、甘水、彌永ニ至ル、田原親家兵ヲ將ヒ、日田ニ在リ、鑑連、鎮種秋月ヲ攻ルヲ聞キ、進テ上坐ニ入り、秋月ト戰フ、利有ラス、收テ日田ニ還ル、鑑連、鎮種モ親家ノ敗ヲ聞キ、亦軍ヲ班シ、高良山柳坂、北野ニ次シ、以テ歲ヲ過ス、是年秋ヨリ冬ニ至リ、豊ノ師西略ス、其鋒甚タ銳シ、皆鑑連、鎮種ノ力ナリ、○立花近代實錄異事ナシ

〔立花系傳〕

四

鑑連公戰功略記

筑後耳納山在山本郡草野村

天正十二年甲申十月三日、公豊兵共來、圍攻耳納山城數十日、草野長門守重久(水カ)弗能防戰、竊出

城據發心嶽、

筑後善導寺口在竹野郡

天正十二年甲申十月廿八日、草野重永、與善導寺僧相謀、令僧言請降、因之公遣兵於草野、爲取資子、公兵與僧俱過飯田村、時重永之伏兵蜂起擊之、由布宮内惟貞、足達對馬、後藤隼人(佐)佐連種、海老名彈介、竹迫五郎兵衛統種、十時勘解由兵衛惟元戰死、

筑後善導寺

天正十二年甲申十二月八日、嚮善導寺僧與草野謀、多害公臣、仍公大怒、興兵破却善導寺、鑿僧徒、斬長老二人於柳坂、縱火燒亡殿廡、新田掃部投本尊彌陀像乎林中、今存者云、

筑後星野城在上妻郡

天正十二年甲申十二月、公豊兵相俱攻星野城陷之、

〔藤龍家譜〕

四

龍造寺十八代藤原政家公

同十月三日、豊後勢戶次入道ヲ大將トシテ、柳川ノ城ニ取掛タリ、當城ニハ、直茂公、家晴、其上草野左衛門尉家清差加リ、身命ヲ捨テ防戰ス、道雪城ノ堅固ナルヲ見テ力攻ニハ叶ハジト士卒ヲ引上、高良山ヘ取上ル、

翌四日、道雪、紹雲兩將ニテ草野長門守鎮員ガ里城ヲ攻ケルニ、鎮員嫡子家清ハ、柳川ノ城ニ

天正十二年十月三日

三三五

草野重永
道雪ノ兵
ヲ襲フ

道雪善導
寺ヲ攻ム

星野ヲ攻

草野鎮種ノ妙見城
問注所鑑景ノ井上城

有テ城中無勢也シカバ、防戰叶難ク、詰^(註)ノ城發心岳ノ要害ニ取上ル、時ニ豊後勢ノ内ヨリ今村彌助軍功アリ、既ニ草野カ外廓破レシカバ、道雪、紹雲爰ヲ打捨、草野中務太輔鎮種^(大下同)ガ生葉妙見城ニ、島津方ニテ居タリシヲ攻ケルニ、鎮種ハ折節筑前若杉ノ城ニアリ、其子長虎丸幼稚ニシテ、合戰叶ヒ難ク逐電ス、斯リシカバ道雪、紹雲問住所治部太輔鑑景ガ井上ノ城ヲ襲テ、其近邊ヲ放火シ、生葉ノ庄ニ陣ヲ取ル、

親家ハ道雪紹運ト不快

或記ニ曰、隆信公ノ御戰死ヲ聞テ、大友宗麟大ニ悅テ、自身二万餘騎ノ軍兵ヲ引卒シ、筑後ニ出張ス、道雪、紹雲筑前ヨリ進發シテ大友ノ勢ニ加リ、所々ニ働キ軍功アリ、此時田原近江守親家、兼々道雪、紹雲ト不快也、故ニ其軍功ヲ猜ミテ、彼ノ兩人ハ自立ノ志アル由、種々讒ヲ搆ヘケレバ、宗麟是ヲ信シ、筑後ヲ打捨、俄ニ歸國シケル、道雪、紹雲是ヲ聞テ、是大友家ノ傾所也、然シ我々捨ラレナガラ、一命ヲ兼テノ恩ニ報セン、忠ヲ盡スベシ、唯^(下脱)二人僅ノ人數ニテ、翌年ノ夏マデ高良山ニ在陣シケリ、^(○肥陽軍記ニモ、宗麟、自ラ兵ヲ率キテ筑後ニ出ツト爲ス、)

〔普聞集〕

七

四日、道雪、紹運、兵ヲ將テ草野家清ヲ攻、家清外廓ヤフレテ發心嶽ニ上ル、二

士星野鎮胤カ幾葉城ヲ圍セ、其後問注所治部大輔ヲ襲ヒ、所々放火ス、大友ノ老臣田原親家、平日道雪、紹運ト隙アリ、且コノ度ノ筑後ノ役、道雪、紹運カ功莫大ナルヲソネミテ、兵ヲアケ本國ニカヘル、二人ハナヲ高良山ニ在陣ス、座主良寬無二ノ志ヲシメシ、良三、良眞、^(隣)鄰圭、

高良山道雪寬ハ道雪ニ與シ良三良眞等ハ政家ニ通ズ

良巴等ハナヲ肥前ニ心ヲ通ス、

〔九州治亂記〕

八

筑後所々合戰事

○上略、道雪、紹運等、筑後西牟田、城高等ヲ燒クコトニカ、ル、九月十一日ノ條ニ收ム、十月三日、高良山ニ諸勢ヲ打入、翌四日、草野カ居城ニ押カケ手強ク攻ケレハ、草野長門重永、其子親永城ヲ明ステ、城ノカサ山ニ構ヒ置タル發心嶽ノ丸ニ引籠ル、寄手頓テ城ヲ燒拂フ、其后星野、問詰所カ領内ヘ働入悉ク放火シ、ハタカ城ニナンテ、ソコ々ニ押ヘヲ置、筑後河ヲ越テ秋月領ニ押入、耳木邊マテ燒働有ケリ、此時豊後比田ヨリ田原親家モ秋月領ニ打出ル、是者高良山在陣ノ勢秋月邊ニ働ナラハ、手合セスヘシトテ、大友ノ下知ニヨツテ、張出タリシカ、親家元來弓矢ノ道ヲエサル者ニテ、ムサト深働シテ、秋月勢ニ追マクラレ、這々豊後ヘ引入ニケリ、此ニヨリテ、道雪、紹運モ高良山ヘ人數ヲ打入ル、カクテ今年モ漸暮ケレハ、豊後、筑前ノ諸將高良山、柳坂、北野村ニ於テ越年ス、秋ヨリ冬ニ至テ、大友衆筑後國中ノ働珍シキ手柄也、コレシカシナカラ、道雪、紹運ノ助成ニ依テ也、龍造寺隆信ハ、類スクナキ勇將ナルカ、幕下ノ國ニ於テ、大友衆コレホトニ働レ城々ヲ攻ルニ、何トテ後攻セラレヌソ、人數ヲモ向ラレヌヤト聞ニ、其比肥前ニモサマ々サハル事出來テ、隆信他國出陣ナラサル子細多カリケリ、^(○本書、隆信ナホ生存スルガ如ク記スハ誤ナリ、)

親家ハ弓矢ノ道ニ暗シ

〔北肥戰誌〕

二十

大友勢筑後國亂入所々軍ノ衰

天正十二年十月三日

三三八

草野ニハ
兵少シ

一 同月初メ大友ノ軍士戸次道雪ヲ軍將トシテ、數千騎相集リ、龍造寺(家勝)上總介カ築川ノ城ヲ圍ミ攻ム、○道雪、紹運等、筑後築河ヲ攻ムルコト、九月十一日ノ條ニ見ユ、サレトモ、持口堅固ニシテ、攻落スベキ様モナシ、道雪城ノ躰ヲ量リ見テ、則士卒ヲ引揚、同月三日、高良山ヘ取登ル、

一 翌レハ、十月四日、戸次、高橋相議シテ、草野長門守鑑員ヲ攻ヘシト、高良山ノ陣ヲ發シ、草野ノ里城ニ取掛ケリ、此時鑑員カ嫡男左衛門尉家清築河ノ城ヘ在テ、家人等多ク家清ニ從ヒシカハ、當城中無勢ニシテ、鑑員防戦叶ヒ難ク、外廓ヲ打破ラレ、發心岳ノ本城ニ取上ル時ニ、寄手ノ中ヨリ今村彌助軍功アリ、斯テ戸次、高橋ノ兩使夫ヨリ生葉ヘ打テ通り、嶋津方星野中務太輔鎮種カ妙見ノ城ヲ攻ケルニ、折節鎮種ハ、兄弟共ニ近日筑前國若杉ノ城ノ警衛トシ、留主ナリシカハ、其子トモ長虎丸、熊虎丸未タ幼稚ノ者ニテ、敵ノ大勢ヲ防キ難ク思ヒシニヤ、城ヲ落テ逐電ス、斯リシ程ニ、戸次、高橋頗ル武威ヲ振ヒテ、近郭ノ村里民屋ヲ悉ク焼拂ヒ、問注所治部太輔鑑景カ井ノ上ノ城ヲ攻ベシト、其通路ヲ取切、豊後ヨリノ一將田原六郎親家ト陣ヲ一ツニ合セ、生葉ニ先ツ屯ロシケリ、然處ニ彼田原親家己レカ士卒ニ議シケルハ、今度太守義統公ヨリ、敵征討ノタメ、某等ヲ被差向、數日ノ軍勞莫大ナルニ、アノ道雪、紹運(奴カ)目カ奚ソヤ、下知モナキ處ニ、筑前ノ預リヲ明テ、此所ニ來リ、我々カ軍ニ差加リ、所々ノ城ヲ攻落スニ依テ、今度ノ戦功ハ、悉ク彼兩入道カ名ニ顯レ、此親家カ武

大友勢ノ
戦死者

〔所々戦死名數〕

名ハ一向ナキカ如クニ隠ル、所詮他人ノ功ヲ立ンタメ、命ヲ敵ニ抛テ、久シク軍ヲ當陣ニ暴サンヨリ、急キ豊府ヘ歸テ席ヲ温メンニ不如ト議ス、士卒モ又遠境ノ長陣ニ困窮シテ、是ニ同意シケレハ、則親家兄弟ハ、己レカ勢ヲ引分テ、府内ヘコソ打歸リケレ、斯リシ間、道雪、紹運アキレ果、是皆天魔ノ所業ニシテ、大友家ノ末ニナルヘキ前表也、サラハ先ツ問注所カ城攻ヲ延引シテ當陣ヲ返スヘシト、又高良山ヘ引返シ、小時シハ軍ヲ留テ在陣シケリ、○肥陽軍記 異事ナシ、

筑後國善導寺口 行野郡
井上發心岳加之

天正十二甲申年

一 十時勘解由惟元

十時主馬祖

一 後藤隼人助連種

天正十二年十月三日、同隼人(佐)種長嫡子、後藤市兵衛祖

一 海老名彈介季節

同三日戰死、同定右衛門祖

一 由布宮内惟定

同十月八日戰死、同美作惟信長男、今源五兵衛祖

一 足達對馬

同十月四日、同助左衛門、同九兵衛兩家祖

一 戸次兵部少輔鎮比

同十一月四日、同八兵衛祖

天正十二年十月三日

三三九

天正十二年十月三日

三四〇

一森三右衛門

足達對馬家來、

筑後國城嶋三藩郡、

天正十二年八月廿八日

至中務之丞御感狀有、

一阿部六彌太親常（藤）
蔭野三河守與力、至三河守
御感狀、同六彌太親

〔日本耶蘇會年報〕

〔歐文材料譯文〕

耶蘇會のバードレ及びイルマンの日本通信 第二編

豊後の戰爭中に起りし事數件に就きて、

七十歳餘の老人にして、國王（大友宗麟）が有する諸城中、最も重要なる立花と稱する城の主將（百次道重）は、同國に於て、最も武勇あり、優秀なる大將なるが、昨年報告せし如く、彼の著陣は敵に對して豊後軍の大なる力となりたり、この人と寶滿の城の主將（高橋紹運）は豊後を回復し、現在太子（大友義統）を補佐せり、（柴田禮能）リノと稱するキリシタンの貴族は豊後のヘルクレスなるが、（義統、禮能ノ功ヲ賞シ、一門ニ准ジテ、杏葉紋ノ使用ヲ許スコト、十月二十一日見ニ、太子の使として來り、この兩將と語りぬたる時、主將の立花殿は彼に對して、次の如く述べたり、予が甚だ當惑せるは、予并に寶滿がキリシタンの教を惡めりとフランシスコ王に告げたる者あることなり、その事は虚偽にして、予は今日まで、この教に對し、何等なしたることなく、又言ひたることなし、又之に關しては、何等知るところなき上に、予がクニシユ（○國守カ、

柴田禮能
ハ豊後ノ
ヘハるク
ナリ

道雪紹運
キリシタ
ズンヲ好
ズト宗麟
ニ告グル
モノアリ

義統（キリシタ）
ト意シ宗
ト見ス麟

道雪紹運
筑後ノ失
地ヲ大部
分回復ス

義統ハ八
幡ヲ崇敬
ス

として、又ロンジユ（○老中カ、として一生仕へ、今又この軍の總大將として仕ふるフランシスコ王が、キリシタンにして、その教を尊崇せるが故に、何事をも言ふ能はず、予若し彼が自失せる者の如く、棒を持ちて踊りつゝ、市街を歩行するを見ることあらば、予も之を眞似て、追隨すべし、彼は予の王にして、又主君たり、予が城より此處に來れるも、彼に仕ふる爲めなればなり、予は彼と親しきキリシタンに託して、この言を彼に傳へんと欲したり、汝が之を傳ふることを喜ぶ、予は國王とその子なる太子が、キリシタンの教を弘布することに就き、いさゝか意見を異にせることを知れり、故に彼等を一致せしむるよう努め、若し必要あらば、この教を弘むる爲め、及ぶ限りの援助をなすべしと、フランシスコ王は、この傳言を直ちにバードレ・ペロ・ゴメスに通じ、其後右の言葉を傳へし貴族自らバードレの許に來りて、更に詳細に之を語りたり、

昨八十四年（○天正十二）の末に、豊後の軍は、少しく善き事をなしたり、殊にその大敵なる秋月の地に於ては、嘗て城より出づることを敢てせざしが、終に以前失ひたる筑後の國の大部分を回復せり、前に掲げたる柴田リノは、數回の戰鬥に於て、驚くべき功を立てたり、之に因り、太子は彼に己の武器を與へたれば、彼は大に喜び、會堂に來り、デウスに感謝を捧げたり、府内の附近に華麗なる八幡の社有り、諸人之を戰の神となせり、太子は頗る之を崇敬し

天正十二年十月三日

三四一

天正十二年十月三日

三四二

その財産の中より、多くを寄進し、戦争に於て得たる成功は、悉く之に歸したり、○義統、豊後由原八幡社へ戦捷ヲ祈ルコト、七月是月ノ條ニ見ユ、筑後の國に於ては、同じく八幡に獻じ、かの地方にて大に尊崇せられたる頗る華美なる社の附近に戦ひしことあり、柴田リノは甚だ善き武士にして、豊後の大身中に、その槍を以て重んぜられたるが、戦争が豊後方の勝利となりて終りし後、右の社を攻撃し、之に火を掛け、部下と共に、附近に在りしものを悉く破壊せり、數人の異教徒之を見て怒り、太子が八幡を崇敬することを想起すべし、と言ひたれば、リノは堂々として怖るゝところなく彼等に答へ、その言葉は謂れなし、太子の崇敬する八幡は、その味方にして府内に留れり、予が破壊焼却せるこの八幡は敵なるが故に、右の如く之を遇したり、と言へり、太子は之を遺憾とせしが、かくの如き勇猛なる士を必要とするが故に知らざるを装ひたり、この戦争中、キリシタンに關して起りし他の、記載の價值ある事件の中二つを述べし、第一はフランシスコ王の女婿なるゴンサロ・ファヤシドノの家臣のことなり、彼は、その主人に隨ひ攻撃せし敵の寨前十四五歩の所に在り、他の家臣も、彼と並びてその後方に在りしが、敵の發せし長銃彈は、第一の人に當らず、後方に在りし第二の人に當り、彼は直ちに倒れ死したり、發射頻繁なりしたため、他の彈丸來りて、第一の人をも倒したれば、諸人皆彼も死したるものと思ひしに、その後暫くして回生せり、その傷を求めしに、彈丸は著衣を通過し、又

革の袋をも通過して、之に納めたる聖寶器に達せしが、神羊の小なるものと、他の聖寶とを包みたる紙を通らず、彼の身體には、少しの跡をも留めざりき、既に述べたる如く、發射の場所より十四五歩を離れたるに過ぎず、甚だ善きキリシタンなりし彼の主人は、この恩惠に驚嘆し、その聖寶と銃丸とを携へて、バードレ・ペロ・ゴメスの許に到り、之を示したり、他のキリシタンは、週の各日一人の聖徒に祈る習慣を有し、之が爲め七人の聖徒の名を小板に書き記して帶に吊しぬたるが、接近して發したる敵の銃彈は、聖徒の名を記したる小板に當り、彼には少しも害を與へざりき、

○道雪、紹運等、筑後梁河、瀬高、鷹尾等ヲ火クコト、九月十一日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔戸次軍談〕四 猫尾城沒落 並 攻取處々城衰 ○上(天正十二年)十月三日、高良山ニ諸勢ヲ打入、翌十四

日、草野長門守重永ガ居城ニ押懸レバ、忽チ草野城ヲ明ステ、城ノ笠ニ構ヘ置タル發心カ嶽ニゾ引籠ル、寄手頓テ城ヲ燒拂ヒ、夫ヨリ星野、問注所ガ領内ヘ働キ入、所々放火セシメ、裸城ニナシテ、ソコノニ押ヲ置、筑後河ヲ打越テ、秋月領ニ推入、甘木邊マデ燒働ス、此時豊後日田ヨリ、田原親家モ秋月領ニ打テ出、是ハ高良山在陣ノ勢秋月邊ニ燒働セバ、手合セスベシト、義統ヨリノ下知ニ依テ出張レケルガ、親家未ダ若年ニテ、弓箭不功ユヘニ、ムサト

天正十二年十月三日

三四三

天正十二年十月三日

三四四

深入シテ、秋月勢ニ追立ラレ、這々日田へ引入ケリ、是ニ依テ、道雪、紹運モ、高良山へ入數ヲ打入ケル、方々ノ合戦ニ日數ヲ積、今年モ早暮行バ、諸將高良山柳坂、北野村邊ニ陣取テ越年ス、秋ヨリ冬ニ至テ、大友勢ノ働キ近年ノ珍衰ナリ、是偏ニ道雪、紹運ノ助成ニ依バナリ、サレバ道雪父子、紹雲ハ當時九州ニ於テ比倫ナキ豪傑ナレバ、向所必ズ破リ、當ル所挫ズト云衰ナシ、強將ノ下ニ弱兵ナキ習ニヤ、兩家ノ士卒何レモ手柄ヲ顯セリ、其中ニモ十時、由布、安東、薦野、内田、沓掛、堀、高野、森下、足達、池邊、因幡、後藤、吉田、小野、綿貫、竹廻、田北、米多比等ノ勇士、隣國ニ名ヲ輝カセリ、

道雪父子
及比紹運
ハ比倫ナ
キ豪傑

高良山
竹迫新次
衛

道雪陣場
ラ明ケテ
歸選シタ
ル者ヲ成
敗ス

〔淺川聞書〕

乾 一道雪様高良山御陣之時、上妻カ久末コ御出被成候節、竹迫新次衛弟坂東寺コ出家仕居候を被召出、還俗被仰付候、御盃之上コ而經被下精進落申候、御召替之御具足折節御持せ被成たるを可被下と御座候處コ、彼者其年十八、明朝敵之具足を奪ひ取著可申候と申上候處コ、諸人うかつけコ申上候と存候コ、翌朝打廻コ罷出敵を仕伏、詞之如く著仕候、高良山御在陣之内、筑前に陣場をあげ罷歸候故、御成敗三十一人内コ而切死申候由、由布相摸此時ふりよき由コ候、新次衛ハ三十三度之場數に、一番鎧、一番首、一番乘、分捕一度も仕はつし不申候、此内二度向ひたる方コ取合無之、手コ合不申由コ候、三十三人之由、野上忠右衛門、村尾安左衛門無妻子故御免也、

〔筑後將士軍談〕

四十五 城館第宅部一 陣屋村陣跡

北野郷陣屋村ハ、天正中、立花道雪陣營ノ地ナリ、道雪宿所ノ跡ヲ、今ハ茶屋々布ト云、文化二年、陣跡ヨリ地ヲ掘テ、古刀一ヲ得タリ、今其古刀村中ノ農家ニ藏ス、

〔筑後將士軍談〕

四十五 城館第宅部一 柳坂村城跡

山中ニアリ、南北十五間餘、東西八九間、城主未タ詳ナラス、上野筆記、詳見墳墓部、

四日、丁未、讓位ノ思召アルニ依リ、羽柴秀吉、仙洞御所ヲ造營ス、是日、繩打アリ、

〔兼見卿記〕

七 十月四日、丁未、天晴、○中略、公家衆、秀吉ノ被旨ヲ賀スルコトニ、即刻筑州至禁裏之邊

被罷上也、今度院之御所造立、其繩打地形被相定云々、公家各被罷出之間、予同前罷出、德大寺殿、花山院殿、西園寺殿、大炊御門殿同道申了、禁裏之東於御馬場少相待、次筑州自一條路東へ出、二條殿御門外ヨリ御馬場へ來、御屋敷之繩打在之、東へ御築地ヨリ東へ五十間四方御築地也、其外卅間御築地之外堀在之、次於御馬場紹巴獻一盞、屏風、金、立之、毛氈已下敷之、筑州著座、公家各對座、菓子有一盞之儀、初獻筑州、次德大寺殿、其外次第不同、無正躰、次筑州發句云、○多聞院日記ハ、以下ノ發句ヲ

冬なれとのとけき空のけしき○多聞院日記「空のけしき」ヲ「陰ノ光」ニ作ル、哉 秀吉

天正十二年十月四日

三四五

東馬場ニ
繩打ヲナ
ス

五十間四
方

秀吉ノ發
句

天正十二年十月四日

さかへん花の春をまつ比

紹巴

三四六

筑州一段褒美、依此儀百石紹也(註)ニ遣之、即折紙於當座遣之、天下之面目實儀也、次第三幽齋へ所望也、即云、

あたらしき御庭に松を植そへて○多聞院日記「へ」ヲ「エ」ニ作ル、

玄旨○多聞院日記「玄」旨ヲ「細兵」ニ作ル、

筑州褒美機嫌也、次東之御門内へ入、南庭ヲ北へ廻、上土門ヨリ被出、菊亭所へ禮太刀折

紙、銀子十枚云々、勸修寺へ太刀折紙、銀五枚(季非)、次久我殿太刀折昏(銀十枚)、次德雲軒へ入、公家各一

禮罷歸也、直參禁裏、以中山黃門今日之儀珍重申入、退出、參德大寺殿、自是歸河東了、

十一月二日、甲戌、○中略、長岡幽齋、屏風一双ヲ獻ズルコトニカ、ル、十一月二日ノ條ニ收ム、仙洞御普請初、京上下罷上、民部卿法印被罷

上、公家衆各被罷上也、予幸出合之間、各令同道、暫普請場ニ在之、今夕於德大寺殿、勸修寺

入道、中山黃門、坊城、通仙各被請、興行之儀在之、予兼約也、直可罷向所存之處、幽齋俄可

來之由直談之間、德大寺殿へ御理申、歸宅了、即幽齋來、燒風呂進夕食、種々相談、入夜飯

京、當番之間、予同道參内、御番所へ若宮様御成、被遊圍碁、予御相手、二番被遊也、次薄与

三番被成、御見物、及深更入御、仕合忝義也、相番柳原、番代(推賢)終夜相談了、

三日、乙亥、早天退出了、松田勝右衛門申來云、今度御普請之事、先年御築地之次第ヲ以テ申

付也、然者當郷賀茂築之次、其筋築地堀可打渡之由申來、自是以使者理可申之由返事了、即

遣喜介、申理不相濟之間、予罷出、以休庵(久我通興)民部卿法印へ申理、堀之儀用捨無別義、築地非常分之義、追而猶可申理、不可有子細之由休庵被申了、普請場へ罷出、法印へ申禮了、無別義通松勝へ申渡、松勝入魂了、外聞祝著々々、○下略

八日、庚辰、薄雪、山々相積也、

禁裏仙洞之御普請堀多分出來了、○下略、攝津中島天滿宮造營ノ爲メ、萬句興行ノコトニカ、ル、十一月八日ノ條ニ收ム、

〔顯如上人貝塚御座所日記〕○山城 一今日三日○中略、秀吉、彼爵ノコトニカ、ル、十年十月三日ノ條(補遺)ニ收ム、又院御所ヲ

東ノ馬場ニタテラレ、親王御即位申沙汰アルヘキト云々、築地ヲ十月五日ヨリツキハシメ

ラルヘキ由也、金銀ノ定御即位ニ三千貫、御作事方ニ五千貫、院ノ御入目ニ二千貫、都合一万貫御請也、○中略

一庭按察使殿今日六日御上洛、中御同前、○中略

一此比風聞ハ山科七郷ヲ内裏御料所ニ進上云々、檢地セラレテ、三千石在之云々、

〔言經卿記〕 五 十月四日、丁未、天晴、

一羽柴筑前守禁中東馬場ニ院御所可立之由被申、繩ヲ引ラル云々、公家衆參會云々、

九日、壬子、天晴、

一幕々阿茶丸令同道、禁裏東柳馬場ニ院御所可立之由繩打有之間、見物ニ罷向了、

天正十二年十月四日

三四七

前田玄以
奉行ス

天正十二年十月四日

三四八

十一月二日、甲戌、天晴、

一院御所御屋敷普請始有之云々、民部卿法印玄以奉行也云々、堂上衆各參會也云々、
六日、戊寅、天晴、

一院御所御屋敷普請兩日有之云々、堀ヲホル也云々、

廿五日、丁酉、天晴、

秀吉造營
ヲ見物ス

一羽柴新大納言殿○秀吉ヲ權大納言ニ任ズルコト、十一月二十二日ノ條ニ見ユ、院御所御屋敷見物ニ御出也、堂上衆各參會也云々、

〔多聞院日記〕○三十一 十月十六日、

一當今ヲ院へ移シ親王ヲ御即位ニ可申調、則院ノ御所ノ御屋敷五十間四方ニナワ取沙汰之、
御知行ハ山階郷ニテ千石申定ト云々、

〔秀吉事記〕

○上略、秀吉ヲ從三位權大納言ニ任ズルコト、十一月二十二日ノ條ニ收ム、忝親王御歲近シ不惑、不レ可レ有無ニ御即位、然、
而院御所中古以來斷絶、於レ是乎亞相立ニ院御所、御即位可レ被ニ取行、由奉レ奏ニ先院御所ニ欲レ
造ニ營之、半夢齋玄以任、民部卿法印ニ奉ニ行之、撰ニ良辰、始ニ作奠、○下略、秀吉ヲ内大臣ニ任ズルコト、
ニカ、メ、十三年三月十日ノ條ニ收ム、

前田玄以
ヲ民部卿
法印ニ任
ズ

○仙洞御所造營始ノコト、十三年正月十八日ノ條ニ見ユ、

羽柴秀吉、天正寺ヲ山城新紫野ニ剱メントシ、敷地及ビ船岡山ヲ寄進ス、

惣見寺

〔眞珠庵文書〕○山城

今宮祭禮御輿相渡候道事、

一惣見寺於相立者、新儀たりといふ共、可爲西之道通事、

一若惣見寺於不相立者、近年有來可爲道通事、

一右兩條不相定付而、當年者かりに東之道通御輿可相渡之旨申付候間、以來ハ非相定候事、

以上

天正十二
九月六日

玄以(前田)
(花押)

〔總見院文書〕○山城

新紫野天正寺敷地境内東西百間、付紫野南北百貳拾間、并船岡山之事、至于盡未來際令寄進訖、專佛法

紹隆、可被奉祈天下太平者也、仍狀如件、

天正拾貳年十月四日

秀吉花押

古溪和尚(宗庵)

〔蒲菴稿〕

○山城 山號太平、寺號天正、披蓁拾磔、創業之日、瑞雪滿地、戲賦一偈、聊述賀忱、以
奉錄呈大檀越閣下、

前三々與後三々、認得西東又北南、葉是黃金雪吾玉、一彈指現大伽藍、

天正十二年十月四日

三四九

古溪宗陳
太平山

敷地ノ廣
サ

織田信長ノ位牌所

正親町天皇宸筆額

天正十二年十月四日

〔多聞院日記〕三十一 十月十六日、

一信長ノ御位牌所紫野ニ在之、作様一向機ニ不合トテ、ナワ打ヲシテ、又立ナヲサスルト云々、

三五〇

〔正親町天皇宸筆天正寺勅額草〕○大德寺所藏 原寸縦〇・四五五 横一・二二六

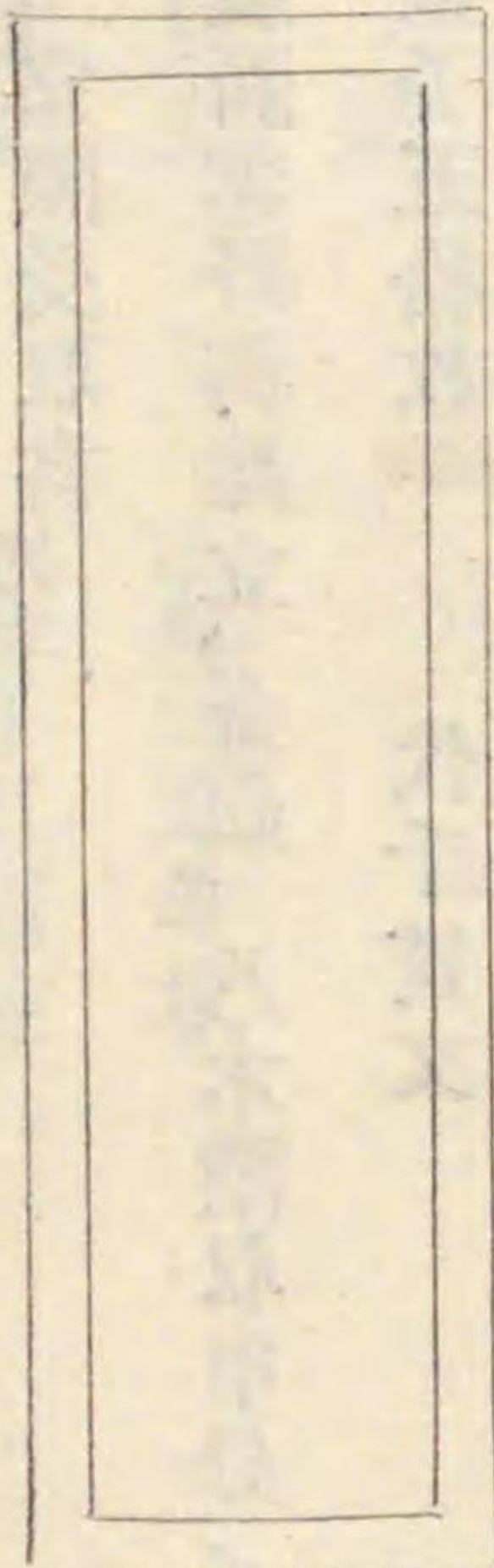


〔京都府寺志稿〕四十下 大德寺二三 事蹟 新紫野天正寺ノ事

紀伊根來寺傳法院ノ堂宇ヲ移サントス

竣工セザリシ理由

本寺ハ天正十一年、(二)豊臣秀吉亡君織田信長冥福ノ爲ニ之ヲ舟岡山ニ創立セントシ、已ニ地ヲトシ、其建築ヲ總見院住持古溪宗陳ニ托シ、其費用ヲ給シ、事ヲ起サシム、其堂宇ハ根來寺ノ傳法院ヲ撤シテ、之ヲ移築スルコトトシ、已ニ之ヲ大阪川口ニ廻送シタリ、然ルニ其事果サス、已ニ經營セシ舟岡山ノ地面ト後陽成帝宸翰天正寺三大字ノ額面トハ、之ヲ總見院ニ寄付シ、彼ノ運送堆積セシ傳法院ノ木材ハ、大阪ノ川口ニテ遂ニ朽敗ニ屬セリ、依テ其川口ヲ號ケテ傳法口ト云フ、今其實詳ナラスト雖トモ、古溪宗陳ハ利休ノ事ニ關シ秀吉ノ意ヲ失シ、鎮西ニ放逐セラレ、加フルニ、軍國多事、爲ニ其建築ヲ果サ、リシ者ノ如シ、大德寺中在ル所ノ勅額及舟岡山寄進狀並ニ塔額、黃梅院藏スル所ノ古文書、宗陳、紹暲(玉浦)新紫野建立費用ニ關スル文書等ニ依テ之ヲ案スルニ、其大略ヲ知ルヘキナリ、
天正寺勅額方丈藏、總見院物品



高 廣 字大

○舟岡山寄進狀 方丈藏、總見院舊藏

天正十二年十月四日

三五二

天正十二年十月四日

○本文略ス、前掲總見院文書所收天正十二年十月四日付古溪宛秀吉寄進狀ニ同シ、

秀吉寄進ノ建立ノ費用

宗陳受取書 同上

就新紫野御建立、金銀並八木請取申分ノ事、

一金子五拾枚 代千貫文

一銀子五百枚 代千貫文

一八木貳千石 代貳千貫文

右合方四千貫文、

右受取所如件、

六月二日

羽柴筑前守殿 參

總見院 宗陳 花押

紹綜勘定書 同上

御預之内古溪わきまへ返納申分覺

新紫野御建立費之内古溪わきまへ分

一百八拾枚六匁

根來傳法院壞雜用

一五拾五枚

天正寺小屋三ヶ所入目

一百六拾八枚廿六匁四分

向唐門、玄關、中門、築地、米倉(所カ)察所へ雜用等

合四百三枚三十貳匁八分

右分ハ御算用不相立候ハ、古溪(所カ)辨へ返納致申候間、依如件、

七月十六日

總見院 紹琮 花押

德善院僧正 玉床下

高桐院宛總見院古文書但年月詳ナラス、然レトモ、天正寺ニ關スルヲ以テ此ニ付ス
爲新紫野天正寺御建立方金銀米預申分之中

納

千貫文 金子五十枚

千貫文 銀子五百枚

貳千貫文 米貳千石

合四千貫文

天正十二年十月四日

天正十二年十月四日

内 銀子方下行ノ分

三百六十貫三百文

百十貫文

以上四百七十貫三百文

貳千石ノ

米方下行分

百八十貫文

米百(米書)以下不詳

〔參考〕

〔北鹿 隔葺記〕

二十 寛文四年八月十二日、晴天、○中 自玉舟被頼、摠見院之天正寺與云額正

親町院宸翰乎否之事、今日備觀覽、則正親町院之勅筆正筆之旨仰也、

〔兵家茶話〕

四 一織田信長公御事の後、秀吉大德寺にして、追薦の會を設け、朝に請て、太

政大臣の贈官なし參らせらる、猶公のため一寺を建て、香火の場とせん事を欲し、其額を請られしかへ、正親町院(宸)震翰をそめさせ給ふて、太平山天正禪寺の號を賜し、然るに秀吉公身榮花に誇られし後、此事忘たるかことく成し、其勅額今大德寺の内惣見院にありとなん、

天正寺ノ勅額ヲ靈觀ニ入ル

大平山天正禪寺ノ號ヲ賜フ

〔寶山外志〕

封疆 船岡山 世曰千坊墓所、蓮臺寺古有千坊、故名、今日千本者、誤之、是也、今以船岡西隣蓮臺寺、

爲京師北邙也、天正十二年、關白秀吉賜之古溪和尚、爲天正寺之地基、以故船岡今屬摠見院、拾遺集有歌曰、船岡乃野中仁立留女郎花渡佐奴人和不有登會思不、又西行歌曰、不奈於賀濃寸曾(乃脫カ)野津加乃賀寸曾江天無賀志乃非登仁幾味於奈志津留、皆是詠墓所也、六條判官源爲義亦殺于此、

德川家康、尾張小牧ノ壘ヲ修ス、

〔家忠日記〕

三 十月、

一日、(甲)癸卯、伊勢へ働候、沙汰候、

二日、(甲)辰、

三日、(乙)巳、雨降、

四日、(丙)午、小牧普請候、

○家康、尾張小牧ヲ巡視シ、松平家忠ヲシテ、同國小幡ヲ守ラシムルコト、本月十一日ノ條ニ、榊原康政ヲシテ、小牧ヲ守ラシムルコト、同月十六日ノ條ニ見ユ、北條氏直、櫻井武兵衛ヲシテ、其父和泉守ノ名跡ヲ安堵セシム、

天正十二年十月四日

松平家忠動ス

〔櫻井文書〕

○出

父和泉守令死去之間、名跡之儀出置候、致相續、軍役嚴密ニ可走廻旨被仰出者也、仍如件、

天正十二年甲申

(北條氏虎印)

十月四日

山角上野介 奉之

櫻井武兵衛殿

五日、戊申羽柴秀吉、京都ヲ發シテ、大坂ニ歸ル、

〔言經卿記〕五 十月五日、戊申、晴陰、

一羽柴筑前守淀城マテ下向云々、

〔顯如上人貝塚御座所日記〕

○山

(十月)

六日、大坂へ歸城、御使川豐前守、若法、益少三人、

今度歸陣之御音信綿五十把、昇進御禮一腰一疋、

一玄以へ御音信綿廿把、御使越中、(河野)少進申次也、

十月六日、御書恐々謹言、民部卿法印、

○秀吉、尾張ヨリ美濃ニ撤兵スルコト、九月十七日ノ條ニ見ユ、

〔附錄〕

〔顯如上人貝塚御座所日記〕

○山

十月、

淀 本願寺光
佐使ヲ遣
シテ秀吉
ノ歸陣ヲ
賀ス
前田玄以
賀ス
賀ス

本願寺新
門跡光壽
父光佐ト
不快ス
和解ス

義重會津
ニ遊ブ

天正十一
年上野多
々木山ニ
陣シ新田
ヲ攻ム
蘆名盛隆
ト共ニ田
村清顯ヲ
攻ム
清顯ト和
ス

一此比新門様少御存分ありて御不會之様也、(下間様)刑部卿御使を申、無事ニ相調候て、八日興門様

にて御參會あり、御座敷御人數、

御門跡 新門 興門 (細川氏)北様 御兒様 (宇野)主水 凌雲 長衆五人御相伴也、

常陸佐竹義重、上杉景勝ニ答へ、近況ヲ報ス、

〔伊佐早文書〕

○羽前

追而、爲遊山與風會津へ打越候、於様躰者、彼口上可有之候、以上、

如芳墨、去年以來令絶音問候之、内々無御心元存候之處、預使僧候、誠以本望之至候、抑御當國悉平均被取成之由、自何以專要候、殊上口之様子具蒙仰候、何も令得其意候、將亦去年上州表へ令出勢、新田、館林兩地之間、號多々木山所ニ張陣、彼兩城堀際へ詰寄、日々立備候之處、城主閉門戸、敵一騎一人不出合候之間、萬方へ賦武勇、鄉村無一字も擊碎揚放火、悉蒸民等押拂絶人家候之條、可成亡國事不可有程候、聞召可爲御太慶候、然者近年於奥口田村方對當方不儀連續遺恨深重之間、芦名盛隆令相談、其外之諸士引率、去春一同ニ靡軍旗候之條、不突楯即時悃望、其上田村方於拘も、岐之城々十二三ヶ所被明渡候間、爰元無據上遂和睦候、然間奥州皆以令一統候様子可被及聞召候歟、○伊達政宗、蘆名、岩城、田村三氏ノ媾和ヲ佐竹義重ニ告ゲ同意ヲ求ムルコト、十三年三月十四日ノ條ニ見ユ、如斯之上、御當國以御手透、武上之間へ至御越山者、一途可及御手合候條、於御本意者、不可有疑候、餘

天正十二年十月五日

三五七

天正十二年十月五日

三五八

事猶彼舌端任入候間、令略候、恐々謹言、

(天正十二年)
拾月五日

(佐竹)
義重(花押)

(上杉景勝)
山内殿
御報

○景勝、佐竹氏ノ一族北義廉ニ書狀ヲ遺ルコト、五月十三日ノ條ニ見ユ、

惟住長秀、尾張ヨリ越前ニ歸ル、是日、前田利家、上杉景勝ノ老臣直江兼續
ニ答ヘテ、長秀ノ近ク加賀ニ出馬スベキヲ報ジ、越中境城攻略ヲ賀ス、

〔保阪潤治氏所藏文書〕筆陣一

此表爲御見廻重而預示快然之至候、仍爰元仕置彌丈夫ニ申付候、就其惟住越前守去廿八日從
尾州令歸陣候、近日此地出陣、其外二万餘出勢候、然者貴國先手衆堺之城外構放火候て、虎眼
迄之由此口上承候、御手柄不及是非候、此節申談、(成政)佐々可對治事眼前候、猶追々可申達候、恐
々謹言、

(天正十二年)
十月五日

(前田)
利家(花押)

(兼續)
直江山城守殿
御返報

○長秀、尾張ニ出馬スルコト、八月十九日ノ條ニ、景勝、利家ト呼應シテ越中境ヲ攻ムル
コト、九月十八日ノ條ニ見ユ、

六日、(己酉)陸奥蘆名盛隆、其臣大庭三左衛門ニ弑セラル、盛隆ノ子龜若丸、家
督ヲ繼グ、

〔高野文書〕○陸前

御札謹拜見、抑今般以不慮之比合、(慶名)盛隆死去、依之洞取亂候之處、被入御念候之故、(取勝力)被靜、畢竟
御威光、大小人喜悅之眉、至吾等式其恐不少奉存候、乍此上當方安靜御塩味奉頼候、此由宜預
御披露候、恐々謹言、

新國上總掾

(天正十二年下同)
拾月十二日

貞通(花押)

(親孝)
高野壹岐守殿

〔伊達政宗記錄事蹟考記〕一 一 佐竹常陸介殿義重御狀寫

急度申越候、仍盛隆御生涯之由、如何様之子細ニ候哉、案外之至候、則會津へも及使者
候、然者盛隆若子有之上、於自今以後も、無二會津へ可申合逗塞候、將又此刻其境目聊不
可有油斷候、隨而入衆指越候、用所等無隔意可被相談候、巨碎彼口上可有之候、恐々謹
言、

十月九日

義重書判

天正十二年十月六日

三五九

佐竹義重
授兵ヲ會
津ニ送ル

新國貞通
高野親兼

天正十二年十月六日

谷部下野守殿

右矢部理兵衛所持、元祿八年十月四日御覽被遊、被返下之、右御記録ハ不載之、

一新國上總貞通書狀寫○中略、十月十三日附、高野壹岐守宛、新國貞通書狀ニカ、ル、前掲高野文書ニ同ジ、

右鹿又圖書所持、元祿八年十月八日御覽、被返下之、但高野與惣左衛門ニ爲貴可然旨御意有之、右御記録ハ不載之、

一磐城右京大夫殿常隆御狀寫

盛隆就仕合、先度一啓到著如何、先書如願(願方)之候、到此上も吉凶無二申談筋ニ候之間、盛隆在世ニ不相異、尙以弓箭可曳詰由存候、依之今度本宮右馬頭、窪田刑部少輔爲使申届候、委細之段、彼兩口ニ可有之候之間、不具、恐々謹言、

十月十三日

常隆書判

大内備前守殿(定綱)

右片倉小十郎所持、元祿八年十月四日御覽、被返下、但大内太郎八方へ遣之可然旨御意有之、御記録ハ不載之、

〔伊達山治家記録〕

五 十月六日、己酉、此日會津ニ於テ、寵臣大場三左衛門其君葦名三

岩城常隆
蘆名氏ト
申合スベ
キヲ述ブ

盛隆ハ二
階堂盛義
ノ子
享年
盛隆ノ妻
ハ伊達輝
宗ノ妹
大場三左
衛門途電
セントス

三左衛門
ノ生立

浦介殿平盛隆ヲ弑ス、廿四歳、盛隆實ハ磐瀨二階堂遠江守殿盛義ノ子ナリ、葦名殿盛興早世ノ後、盛氏入道殿止々齋ノ計ヒニ因テ、彼家ヲ相續セラル、盛隆ノ北方ハ、公御妹ヲ御養女トシ給ヒテ、去ル永祿九年ニ盛興ニ嫁シ、盛興卒去ノ後、又盛氏養女トシテ盛隆ニ配セラル、男子誕生シ、龜王丸殿ト稱ス、是葦名ノ家嗣ナリ、賊臣大場三左衛門主君ヲ弑シテ逐電セント欲ス、種橋大藏ト云者出會ヒ、即チ討殺スト云云、

〔會津四家合考〕 一 盛隆生害ノ事

盛隆イミシクモ三浦ノ家久廢レタルヲ興シ、既ニ絶ナントスルヲ續テ、行年二十四歳ト申ス(天正十二年)今年九月中旬ノ比、龜王丸ト申ス男子一人誕生アレハ、靈椿未タ老サルニ、丹桂花始テ開心地ナリシヲ、湯餅ノ祝僅ニ過キ、産褥モ未改ル内ニ、思ノ外盛隆逆臣ノタメニ弑セラレ玉フ、子細ハ、其比二本松義繼郎等ニ、大庭三左衛門ト云童アリ、賤キ巫ノ子也ケルカ、眉目形モ優ニ、剩心剛ニシ、イマタ幼稚ノ時、一日ニ三度迄比類ナキ舉動セシニヨリ、三左衛門ト名付ラレタリ、盛隆此童ヲ見テ、頻ニ所望ナリケルヲ、天生嗚呼ノ者ナレハ、進セテモ行末如何ナラントテ、一向同心セザリケルヲ、猶頻並ニ乞ハレケレハ、無是非進セラレタルニ、始ノ程ハ寵愛他ニ異也シカトモ、色アル花ノ榮落時替ル習ナレハ、何シカ薰賢(道)カ袖ヲ藉タル寵、彌子瑕カ桃ヲ餘タル戯モアタナル夢トナレハ、實ニ龍陽君カ前魚ニ泣タルモ理也、是ヨリ盛隆近

天正十二年十月六日

三左衛門
盛隆ヲ弑ス

種橋大藏
ヲ三左衛門
討ツ

凶兆

天正十二年十月六日

三六二

習ノ者共、ナニトナク三左衛門ヲ疏ミ、年來ノ舉動ニ替タル様ノミ多ケレハ、彼ハ内々心ニ籠テ思ヒケルハ、所詮傍輩ノ斯ク疏ミケルモ、畢竟公儀ノ思召事替ルヨリ起レハ、何ソ他ニ向テ恨ヲ含シヤ、何様時節ヲ伺ヒ、盛隆ヲ弑シ進セテコソ、年來ノ鬱憤ヲ晴シ者ヲト、根深フ思入テ、嗔恚彌増リケレハ、同十月六日ノ朝、痛ヤ盛隆手ツカラ鷹ヲ居テ、南縁ニ端居シ給ヘル處ヲ、背ヨリ近付寄テ、安倍ナクモ弑シ參ラセ、折節直イノ者コソ居合ハサリケメ、即時ニ本丸ヲ逃伸ヒ、西ノ城戸迄走り出ケル、跡ヨリ童坊一人追懸ケルカ、折節種橋大藏ト云者、朝番ノ替リニ登城スルヲ見懸、爾々ノ狼籍(備)ノ由聲ヲ揚テ呼タリケレハ、種橋則チ寄セ合セ、彼三左衛門ヲ討シトナン、斯ル淺猿シキ世ノ中ナレトモ、龜王殿ノ御坐ケレハ、セメテノ事ノ頼ニ、亡君ノ寵恩ニ浴タル舊臣共、程嬰杵臼カ跡ヲ踏テ、兎角打紛レタル間ニ、淺猿シカリシ冬モ暮、天正十三年ニ成リニケリ、○會津伊達兩家覺書、會津舊事雜考異事ナシ、

〔會津四家合考〕九

盛隆生害之衷

國家ノ廢興ニ至誠ノ先知歷然ナレハ、哀ノ有無愚カ旨ヲ非可評、只俗説ヲ取テ記侍ル、盛隆生害ノ少前ノ哀ナリシト云、祕藏ノ鶴鴨ヲ二ツ一寄ニ把ル、是ヲ希代ノ逸物也ト譽ル族モ有、又イヤ小キ物ノ大ナルヲ無理ニ從ヘタルハ世ノ中ヨカラヌ先表ニモヤアランナト口々ニ評シタリケルカ、程ナク盛隆此鶴ヲ居ナカラ生涯也シト云、又盛氏岩崎ニ御座タル時、

鷹カ鴨ヲ二ツ一度ニ取タリ、希代ノ事ト鶴浦入道カ方エ盛氏自筆ノ消息有シヲ見タリ、是若盛興逝去ノ比ニテモヤ有、又蒲生秀行逝去有ヘキ春、○秀行卒スルコト、慶長十七年五月十四日ノ條ニ見ユ、塩川エ鷹野ニ出ラレタルニ、鶴カ鴨ヲ二ツ一寄ニ取タルト云、

一地下ノ雜談ニ、盛氏生害ノ前ノ哀ナルニ、厩ニ立並タル馬ノ内ニテ、何トスヘキ何トスヘキトクリ返物ヲ言、付居タル馬取共肝ヲ潰ノ急キ厩別當ニ此由ヲ告ル、別當モ怪トテ馳來リ、何ノ馬カ左言タルソト尋ル、辭ノ下ヨリ側ニ立タル馬、此馬カ左言タルト言シト也、

〔葦名家記〕一

盛隆生害之事

去程ニ天正十年夏ノ比、盛隆ニ若君誕生アリ、龜王殿ト號ス、天正十一年六月廿二日、大庭三左衛門ト云者、不慮ニ恨ル事有テ、盛隆ヲ討奉リ、其身モ即時ニ討レヌ、抑此大庭三左衛門ト云者ハ、須賀川諏訪大明神ノ神主大場ノ何某カ子也、然ルニ相馬合戦ノ時、此三左衛門十三ノ年、盛隆ノ御前ニテ一日ノ内ニ、三度マテ敵ニ懸合セシヲ御覽有テ、幼若ニシテ武勇ノコト甚御感有テ、御側近ク召仕レケリ、器量人ニ超エ、美男ノホマレ有シカハ、盛隆御寵愛不斜、去ルニ依テ、諸人三左衛門ヲ崇敬スル事カキリナシ、其後三左衛門十九歳ニテ元服シ、盛隆ノ御腰ノ物番ニ被成ケリ、尤御近習トハ申ナカラ、盛隆モ前方ノ様ニハ寵愛モアサハカニ成行ケル、殊ニ彼三左衛門ハ奢第一ノ者ナレハ、主恩ヲ笠ニ著テ、我意ヲ働キケレハ、家中ノ

盛隆ノ死
ハ十一年
トノ説
三左衛門
ノ素生

天正十二年十月六日

三六三

諸士皆々ニクミアヘリ、サルニ依テ、三左衛門思ケルハ、傍輩ニモウトミハテラレシハ、只君ノ御心ユヘナリ、兎角盛隆ヲ恨奉テ、本意ヲトクヘシト思ヒ立テ、盛隆ヲ討奉リ、其身モ忽亡ヒケルコソ薄情ナレ、

〔異本塔寺長帳〕^五 ^{〔天正〕}十二年^甲申、葦名盛隆ノ家人大庭三左衛門、十月十日ニ主人盛隆ヲ切殺ス、此ノ大庭ハ二本松城下町人ノ子也、則大庭ヲハ種橋大藏討ツ、

〔伊達族譜〕^六 ^{〔外族譜一〕}葦名

盛氏 ^{平三郎、從五位下、大膳大夫、修理大夫、止止齋、}

天正八年庚辰六月十七日卒、年六十七、法名竹岩、號瑞雲院、

盛興 ^{〔伊達〕}母種宗公女、平四郎、

天正二年甲戌六月五日歿、年二十九、

女 ^{母同上、白川七郎義親室、}

天正十年壬午八月二十四日歿、法名月心、

盛隆 ^{實岩瀨二階堂遠江守盛義嫡子、母晴宗公女也、盛興室亦晴宗公女也、盛興歿後、盛氏養之、配盛隆、爲嗣、次郎、平四郎、}

天正九年辛巳八月、稱三浦介、十二年甲申十月六日、爲幸臣大場被弑、年二十四、

某 ^{母晴宗公女、龜王丸、}

盛隆ノ死ハ十月十日トノ説

盛隆ノ家系

天正十四年丙戌十一月二十二日夭、年三、

女 ^{母同上、相馬大膳大夫盛胤室、}

女 ^{母同上、盛重室、盛泰母、}

女 ^{母同上、佐竹右京大夫義宣室、}

〔葦名系圖 并 添狀〕

盛氏 ^{葦名平三郎、從五位下、修理大夫、大膳大夫、〔天下同シ〕}

女 ^{白河七郎義親室、母伊達種宗女、天正十年八月廿四日卒、道號月心、}

盛興 ^{葦名平四郎、天正三年卒、二十九歲、母同上、}

盛隆 ^{葦名平四郎、實者須賀川二階堂盛行子、盛氏養之、配盛興後室爲嗣、天正九年八月、任三浦介、以通志於信長公也、同十二年十月六日卒、廿四歲、}

龜王丸 ^{天正十四年十二月廿二日、三歲卒、母伊達晴宗女、輝宗養女、}

盛重 ^{葦名平四郎、主計頭、始稱義廣、實佐竹義重二男也、嫁盛隆女、爲嗣、}

女 ^{相馬大膳大夫盛胤室、母同上、}

女 ^{佐竹右京大夫義宣室、母同上、}

天正十二年十月六日

天正十二年十月六日

〔佐野本系圖〕十四 佐原

盛氏 童名龜王丸、從五位下、修理大夫、

盛興 荻名太郎、天正三年六月五日先父卒、二十九歲、室伊達左京大夫晴宗女、

女子 白川城主關三、河守義親室、

盛隆

龜王丸 母伊達晴宗女也、當歲時父盛隆橫死、故繼家督、家老共守立之、

盛重 實佐竹右京大夫義重次男、初義廣、荻名平四郎、主計頭、

盛隆 實二階堂遠江守盛義男也、天正三年爲養子、娶盛興後家、二本松義繼有侍童、遊佐三左衛門云、巫者子也、盛隆見之、乞于義繼以侍左右、寵幸無比類、改號三左衛門、天正九年、任三浦介、敍從五位下之由下勅宣、同十二年、遊佐氏寵衰愛弛、朋友輕侮、遊佐氏深怨、九月、男子出生、稱龜王丸、十月六日、盛隆臂鷹立檐下、遊佐氏不意弑之、二十四歲、遊佐氏逃走城外、於路穗橋大藏誅遊佐氏、

○盛隆、蘆名盛氏ノ嗣トナルコト、二年六月五日ノ條ニ、織田信長ノ奏ニ依リ、三浦介ニ

十二年九月
龜若丸
誕生

三六六

花押

〔花押彙纂〕

ア之 部 蘆名盛隆

天正十二年十月六日

〔參考〕

任ゼラル、コト、九年八月六日ノ條ニ、伊達輝宗ノ斡旋ニ依リ、田村清顯ト和スルコト、十年四月十七日ノ條ニ、上杉景勝ノ新發田重家ヲ伐タントスルヲ聞キ、越後赤谷ノ小田切彈正忠ニ命ジテ、景勝ノ爲メニ、斡旋セザラシムルコト、同年八月十六日ノ條ニ、景勝ノ新發田出陣ニ依リ、援助ヲ求メラル、コト、十一年四月二十四日ノ條ニ、陸奥蘆松ニ出兵セントシテ、小田切但馬守ニ命ジテ、來リ會セシムルコト、同年五月十五日ノ條ニ、越後境ニ出兵セルヲ景勝ニ報ズルコト、同月十九日ノ條ニ、景勝ヨリ援助ヲ謝セラル、コト、九月三十日ノ條ニ、伊達政宗ニ其援助ヲ謝スルコト、同年十二月四日ノ條ニ、政宗、相馬義胤ト陸奥金山ニ對陣シテ戰ヘルニ依リ、須江彈正左衛門尉ヲ遣シテ、之ヲ援クルコト、本年四月五日ノ條ニ、清顯ト戰ヒ、田村表ニ出馬セントスルヲ景勝ニ報ズルコト、同月十六日ノ條ニ、富田氏實ヲシテ、景勝ノ越後下郡出馬ニ援助スベキ旨ヲ報ゼシムルコト、五月十日ノ條ニ、其臣松本行輔、栗村下總ニ、陸奥黒川ヲ奪ハレ、尋デ、之ヲ復シ下總ノ父新國貞通ヲ降スコト、同六月十三日ノ條ニ、子龜若丸歿スルコト、十四年十一月二日ノ條ニ見ユ、

三六七

天正十二年十月六日

感隆

○伊達文書^五
八月廿一日附伊達輝宗宛書狀

三六八

感隆

○同
五月十四日附伊達輝宗宛書狀

印章

〔印章彙纂〕

ア之部 蘆名盛隆

感隆

○伊佐早文書^一
二月廿二日附小田切彈正忠宛書狀

感隆

○伊佐早文書^一
霜月十三日附小田切彈正忠宛書狀

天正十二年十月六日

三六九



藤

○示現寺文書(岩城)
天正十二年九月十七日附嘯月院宛寄進狀袖判

〔葦名家傳記〕 葦名傳

一天正七^{己卯}春、盛氏五拾九歳、嫡男平四郎盛興ニ家督ヲ譲リ、向羽黒^{岩崎}アリ、ニ隱居城ヲ築住ス、知寛入道出齋^(正正下同)ト號、然ニ同年七月、盛興逝去、依テ出齋公小田山城ニ立飯政務ス、家ノ執權ニハ金上遠江守、四天ノ宿老トシテ、平田兵部太輔、松本源左衛門、佐瀬河内守、富田左近將監此四人奉行職也、會津仕置、翌辰年六月、知寛入道六十歳而逝ス、因茲須加川二

盛興卒ス

盛隆ノ幼名

階堂盛義一男福王丸ヲ以テ、葦名家嗣トス、左京亮盛隆ト號ス、同九巳年、任三浦介、寔ニ當家ノ面目トス、室ハ盛興ノ女子、聲名代也、蘆名之一門十六家、或ハ旗ノ衆都而貳拾有八館在是云云、

一天正十午五月盛隆一子出生、龜王鷹ト號、同十一未年十月、盛隆不慮ニ逝去、大場三左衛門信景御腰物番勤仕、美男ノ譽アリ、主君ヘ對シ恨ノ事有テ、忽奉害、其時常世氏定常、憎ヤ信景ト組付、捕ヘント上ニ成下ニナリ、終ニ定常ニ組伏ラル否、沼澤出雲高秀彼信景ヲ刺通ス、龜王君二歳而家督ト成、同十三酉夏、四歳而早去、御母ハ伊達左京大夫晴宗ノ女盛昌院殿光圓性瑞大姉也、此時ヨリ盛重相續ト成、

〔藤葉榮衰記〕 下 盛隆公ヲ三左衛門奉討事

夫盛隆公左三衛門ニ被討給フ、其所以如何トナレハ、一年盛隆公八丁目ヘ被向御馬、陣ヲ張リ、^(政)正宗公ト戰ヲ決シ給フニ、伊達ノ軍悉ク破レテ引給ヒケルヲ、追事甚急ニシテ、伊達ノ兵ヲ數多討捕勝時ヲ作り引別レ、御歸陣ノ時、二本松ノ宿ヲ押テ通り給ヒケレハ、貴賤群集ノ是ヲ見物ス、然ルニアル町屋ノ内二十四五歳ノ童部容儀勝レタルカ、片手ニ色アル花ヲ一枝持、前ニ書物ヲヒロケテ居タルヲ、盛隆公見付給ヒテ、此所ニ小時御馬ヲ立給ヒテ、御使ヲ以テ、此子ヲ御所望有ケレハ、父母否ヤ不惜、辭スルニ詞ナク、任御所望ケレハ、盛隆公不斜御

天正十二年十月六日

三七一

盛隆八丁目ニテ政宗ト戰フ
二本松町家ノ美童ヲ伴ヒ還ル

龜王丸家督トナル

譜代ノ諸
臣三左衛
門ヲ妬ム

喜ヒ、御物具ヲ給リ、御引替ノ御馬ニ乗セ給ヒテ、會津へ連レテ御歸城有テ、三左衛門ヲ寵愛シ給フ事無限、所謂愛樂ノ互ニ替事ハ、似紅檠黃落樹ト云へハ、早晚君寵スタツテ、御志枯々ナルマ、ニ、三左衛門恨ヲ含ム處ニ、譜代相傳ノ子共トモ、三左衛門ニ權ヲ被取、安カラス事ヌカニ思ヒ、妬シト思フユへ、是ヲ見テ喜ヒ、不聞所ニテハ、三左衛門ヲ雁汗ト仇名ヲ付テ笑ケリ、サムレハクワレヌト云義ニテ付タルト云へリ、後々ニハ、三左衛門此事ヲ竊ニ聞テ、胸アサカリ心迷ヒ跳上リ々々大息ヲツイテ、夜晝是ヲ思フニ、骨髓ニ徹シ難忍事無限、然ル處ニ或人三左ニ向ヒ、今朝ノ御食雁汁ノ御料理ニテ御參リ候ヤト言テ莞爾ト笑ケレハ、三左是ヲ聞テ、毒ノ箭ヲ胸ニ受タルヨリモ甚ク、不及堪忍、彼ヲ一刀伐テ憤リヲ休メ、返ス刀ニテ腹ヲ切ント思切タルカ、大汗ヲ流シテ堪忍シ、是ハ誰モ不云屋形ノ被仰ナレハ、無咎奴ヲ殺メ、徒ラニ命ヲ棄ンヨリ、屋形ヲ一太刀討申、恨ヲ泉下ニ報セント思ヒ定テ、明日盛隆公ヲ奉討ト思フ晚ニ、知音ノ傍輩達ヲ呼集テ、叮嚀ニ振舞、三左交リヲ深クシテ酒ヲ勸メ、莞爾ト笑ヒ、客ニ向ヒ云ケルハ、昨夜ノ夢ニ、我望ノ叶事ヲ見タリ、三日過テ各へ語り可申、慥ナル吉夢ナレハ、是ヲ祝ハン爲ニ、今朝ト存候ヘトモ、晝ハ互ニ公用重ケレハ、座席ヲ御急キ候へハ、御残り多ク存ル故、何ノ一種モ無之トイヘトモ、一盞奉饗爲ニ、夜中ニ申入也、緩々ト御遊ヒ給ハルニ於テハ、辱キ由云テ、色々様々ノ肴ヲ調へ、盃ヲ指ツサ、レツ、舞フツ謠フツ、イカニモ亭

三左衛門
意ヲ決ス
知音傍輩
ニ振舞フ

盛隆ヲ弑
ス

死裝束

三左衛門
ハ神巫ノ
子

主フリ結構花奢ニ興ヲ催シ、快ク酒宴終夜ニ及ヒ、明朝死ント思フ氣色少モ不見ケリ、客人座敷ヲ立テ歸ル時、餘波ヲシノ詞コソ後ニソ思ヒ知レタリ、既ニ其夜モ明、十月十日ノ早朝ニ三左衛門沐浴シ焚香シ、出仕ノ衣裳美麗ニ刷ヒ、袴著テ御廣間へ來リケル折節、盛隆公御鷹ヲ居サセ給テ縁ノ柱ニ御靠リ、御前ニ近習ノ人モナク、只御一人御座ス、縁ヲ一禮シテ通リケルカ、常ニ刀ヲ拔不指通りケレトモ、此度ハ指タルマ、通り、立歸リ箭聲ヲ出シテ、盛隆ヲ一刀奉切、深手ニテ御座ケレトモ、心得タリトテ、御腰ノ刀ヲ過半抜給フ所ヲ、二ノ太刀ヲ繼切伏奉リ、大手ノ方へ走り出ケルヲ、追懸討留ントスル者ナク、諸人驚躁テ匍リ周章屋形ノ御傍へ計リ群集シケル、中ニ侍一人追行ケル處ニ、跡ヨリ人數多續キ二町餘リ逃延タルヲ追詰討殺シ見ケレハ、下ニハ白キ絹ノ衣裳ヲ著、六道錢ト數珠ヲ頸ニ掛タリケレハ、逃テ命生ントハ不思ケルニヤ、如何ナル因果ノ報ニ被討給フヤラン、嗟テモ餘アル次第也、然レハ其後盛隆公御子ナシ、會津ノ御家繼可給御方ナキ故ニ、佐竹屋形ノ御子義宣ノ御弟義廣ト申ヲ御名代ニ立テ申、御入部有テ義廣公ノ御代ニ成ニケリ、○東國合戰覺書異事ナシ

〔政宗公御軍記〕乾 伊達ノ御家と葦名ノ家御先代御合戰并御縁邊之衷

○上 又同年九月末、盛隆なを男色の心止給へて、其比安達郡二本松の神なきの子に大場三左衛門と言者を寵愛し給ふ、彼三左衛門は、美男の生れ隠なき者にて、二本松の城主畠山右京

畠山義繼
ニ仕フ

盛隆三左衛門ヲ義繼ニ望ム

三左衛門ノ寵衰フ

傍輩三左衛門ヲ侮ル

老臣等盛隆ノ死ヲ須賀川ニ報ル

天正十二年十月六日

三七四

太夫義繼是を聞及ハレ、召出して寵愛せらる、此者義繼に仕へ、於戰場三度迄無比類働を立たりける、義繼褒美有て、大場三左衛門と名付仕へる、或時盛隆此三左衛門を見給ひ、義繼へ頻に所望有、義繼も此者を深く惜み、彼者ハ元來賤き者の子なれと、參せかたき由辭退有、盛隆重て被申越ハ、其賤き者義繼近習に仕へる、上ハ、我等におゐて何とて異なる事あらん、殊に侍に取立らる上ハ遠慮有へき事なしとて、再三懇望に付、義繼も陳辭に言葉なく、三左衛門を盛隆へ送り被遣、盛隆喜悅無限、近幸甚し、然共三左衛門元來年長たる者故、程なく盛隆の寵愛もちとろへ、剩別人を又愛せらる程、兼て三左衛門を憎ける傍輩共、時をふて彼を侮り賤む、然共三左衛門傍輩にハ野心もさしはさまて、こつすいより盛隆を恨みけり、同年十月六日の朝、盛隆鷹を手にすへ、南向の縁に端居し給へ、三左衛門是を見て、人なきを幸と、後より走寄、只一打に切殺し、直に庭へ飛おり、路地口の戸を踏破り、本丸を逃出、西の木戸より走出けるを、踏(踏)ハ同朋壹人追懸出たり、然所へ植橋と云者城番に出けるを、彼同朋見懸て、事の子細を呼懸、植橋兼而武勇の者なれハ、心得たりとて、立向ひ、切合けるが、終に三左衛門を討留たり、依之會津の一門家老打寄評定し、此上は、所々の用心干要也とて、翌七日、荒田井とも有リ、長門と云者を使として、金上盛備、平田實範、富田氏實、針生盛信連書を以、須賀川の保土原ね南齊、矢部下野、須田美濃、守屋筑後所へ盛隆不慮の害に逢給ふ事をひそかに造

佐竹岩城兩氏モ亦川兵ヲ須賀川ニ送ル

盛隆三左衛門ニ領地ヲ宛行ハズ
三左衛門殺テ送リテ義繼ニ求ム

知せ、追而須賀川用心のため、會津より人數を指遣也、此時大内備前定綱も會津を頼居ける故、兼而會津より人數を副ひしか、此度又用心のため、塩松へも會津より加勢を籠置る、須賀川ハ、佐竹、岩城へも、會津不慮の事を通知せしかハ、佐竹、岩城ハ人數を須賀川へ指越、是清顯公政宗公への氣遣によつて也、其後盛隆の御子龜王丸殿と申せし、天正十四年十一月廿二日に、三歳こ而早世有、爰におゐて、芦名の世繼絶へんとする所に、佐竹殿の御次男平四郎義廣を芦名の家督に定め、天正十五年三月三日に義廣會津へ下向在、此時年十三に成給ふ、天正十六年後五月十一日に龜王殿の御母公も御死去也、

〔仙道記〕

○徳川昭武氏本

一盛隆二本松之城主畠山左京大夫義繼之小性性三左衛門と申者を所望被

申候、義繼寵愛雖無比類候、無是非遣被申候處こ、領地をも不宛行、還而堪忍難成躰こ成行申候こ付、三左衛門無念こ存、盛隆を討可申候、侍百騎斗御越候様にと申遣候、則八十騎遣、背(背)あふりと申所に相待申候、盛隆早朝に鷹を居、遠侍ハ被出候、三左衛門待請、一太刀に首を打落、東門まで立除申候、番替之侍とも御城中騒くハ如何様の義に候哉と尋候、三左衛門返答に、喧嘩有之由申候、さてハ其方遁申間敷とて、大勢きり掛候こ付、主君之(主君)討候因果にて被討候、二本松より參候侍とも、右之段承引被申候、
一盛隆死去、男子無之、女子三人有之故、佐竹義重之息義弘(廣)爲養子掣、後號盛重、

天正十二年十月六日

三七五

天正十二年十月六日

三七六

〔新編會津風土記〕

三十二 陸奥國會津郡之七 南 青木組上五箇村 小田村 墳墓

葦名修理大夫盛氏墓 村東三町餘ニアリ、

盛隆ノ墓

塋域東西二十六間、南北十六間、四方ニ高三尺計ノ土居ヲ廻ラシ、其中ニ塚二アリ、東ヲ盛氏ノ墓トシ、西ヲ盛隆ノ墓トス、共ニ五輪ヲ建ツ、古木アリテ、物フリタル所ナリ、略此墓及盛隆ノ墓ハ、府下天寧寺町宗英寺ノ守レル所ナリ、文化二年、永ク洒掃ノコトヲ司リ、怠ルマシキ由、寺僧ニ命シ、年々白銀ヲ附ス、略○中

葦名三浦介盛隆墓 盛氏ノ墓ノ西ニアリ、上ニ五輪ヲ建ツ、盛隆實ハ、須賀川ノ二階堂遠江

守盛義ノ子ナリ、盛氏ノ子盛興早世セシニ因リ、其後室ニ配シ、盛氏ノ家督ヲ嗣シム、天正

九年、三浦介ニ任セラル、同十二年十月六日、嬖臣大庭三左衛門某ニ弑セラル、行年二十四

歳ト云、大庭カ事、飯寺村ノ條下ニ出ス、瑞泉院蘭室永賀大居士ト諡ス、又此西北ニ一ノ塚アリ、盛興及亀王

丸ノ墓ノ由云傳レトモ、何レヲソレト知難シ、

法號

三左衛門ノ墓

〔新編會津風土記〕

三十四 陸奥國會津郡之七 南青 木組下十九箇村 飯寺村 墳墓

五輪塚 村ヨリ丑ノ方五十間餘ニアリ、

高六尺、周十間、大庭三左衛門某カ墓ナリト云、此三左衛門、元ハ二本松義繼カ郎等ナリ、

心剛ナル小童ニテ、一日ニ三度マテ勝レタル振舞セシトテ、斯ク名乗ラセシトソ、容色殊

ニ勝レシカハ、葦名盛隆深ク所望アリテ、會津ニ來仕へ、嬖幸厚カリシニ、幾程モナク色衰

テ、寵愛弛ミ、傍輩ニモ疎マレシカハ、深ク無念ニ思ヒ、盛隆ヲ弑セントス、天正十二年十

月六日、盛隆何心ナク南縁ニ鷹ヲスヘ居タル處ヲサシ殺シ、頓テ本丸ヲ逃レ、西ノ城戸マテ立去シカ、種橋大藏某ト云者ニ出逢テ、遂ニ彼ニ討タル、其時此屍ヲ埋シ所ナリト云、昔ハ上ニ五輪アリ、俗ニ青五輪ト稱へ、石ヲモテ撃ハ血出シト云、今ハナシ、

〔葦名家故臣錄〕

葦名家御墳墓記 並御引導之寺院 盛隆 御墓小田ノ台東ニ葬、寺ハ寶壽院、

伊豫能島ノ村上武吉、同國忽那島ノ俊成左京進ヲシテ、所領ヲ安堵セシム、

〔俊成文書〕

○伊豫

- 一 所忽那嶋俊成名壹貫二百五十文、
- 一 同嶋重安貳貫五百之内四分一、
- 一 同嶋爲取二貫五百之内四分一、
- 一 同嶋石丸壹貫貳百五十之内四分一、
- 一 怒和嶋壹貫六百六十之内四分一、
- 一 岩城嶋壹貫貳百文、
- 一 本庄五百分、
- 一 櫻井壹貫三分、

天正十二年十月六日

三七七

天正十二年十月六日

一、吉田三貫百七十五文、

右父日向守進退(半)半分無相違可有知行者也、仍如件、

天正十二年

拾月六日

武吉(村上)(花押)

俊成左京進殿

○村上元吉、俊成左京進ヲシテ、知行ヲ安堵セシムルコト、十年十月二十三日ノ條、十一年十二月晦日ノ條(補遺)ニ見ユ、

七日、羽柴秀吉、尾張、美濃在陣ノ諸將ヲ戒ム、

〔幸田文書〕

其表普請番等以下、無由(由)斷可被入精事肝要候、自然敵雖相動候、卒爾之行無用候、珍儀候者切々可被申越候、猶追々可申候、恐々謹言、

十月七日

秀吉(朱印)

勢田左馬亮殿

氏家源六殿

氏家久左衛門尉殿

卒爾ノ手立ハ無用

勢田左馬亮

氏家源六

同久左衛門尉

古田彦三郎

〔古田文書〕

其表普請番等之儀、無油斷可被入精事肝要候、自然敵雖相動候、卒爾之行無用候、珍敷儀候者、切々可申越候、尙追々可申候、恐々謹言、

十月七日

秀吉(朱印)

古田彦三郎殿

〔荒尾文書〕

先書如申候、其城普請番等之儀、彌無由斷可被入精事尤候、自然敵雖相動、卒爾被出入數候者、可爲越度候間、其覺悟肝用候、恐々謹言、

十月八日

秀吉(朱印)

池田丹後入道殿

荒尾次郎作殿

池田丹後入道

荒尾次郎作

〔近江加藤家文書〕

○近江(縣)加藤孫六とのへ

先書如申候、其城普請番等之儀、彌無由斷可入精事尤候、自然敵雖相動、卒爾被出入數候てハ可爲越度候間、其覺悟肝用候、謹言、

天正十二年十月七日